

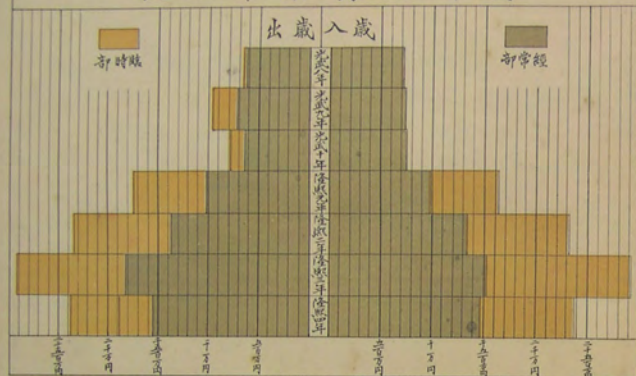
配置一空機關及燈覺

月八(年三十四清明)年四照錄

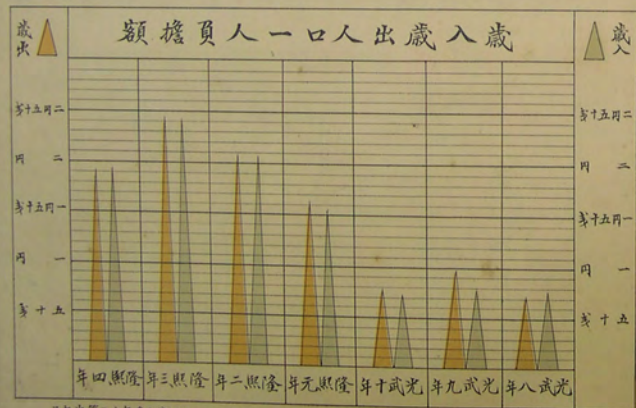




# 歲計豫算累年比較

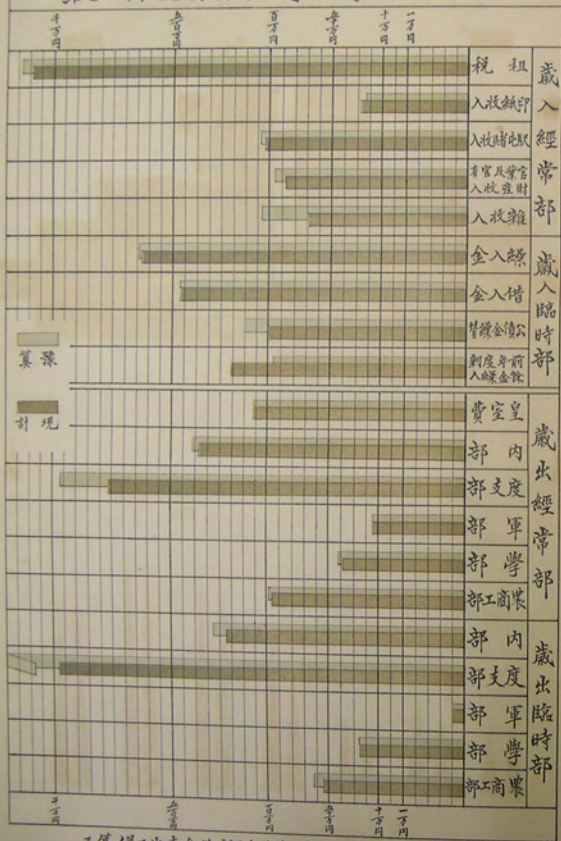


在現示月六八算豫度年四熙隆



月七出算ノ今年各定額ノニルシナリ加増ノ今五年毎ノ破算ノ在現示年三熙隆ノ人口  
1710 1907 1908 1909 1906 1905 1904

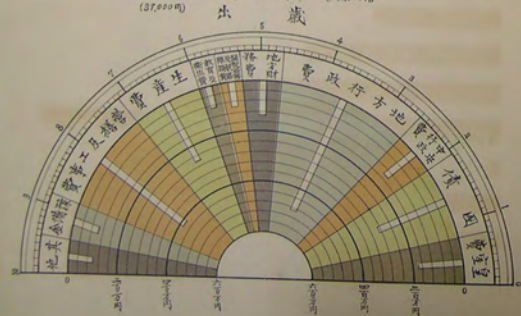
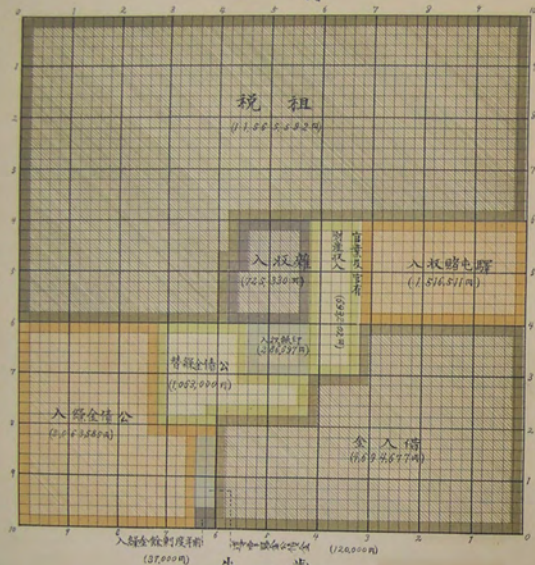
隆熙三年歲入歲出預算現計比較



隆熙三年歲入歲出預算現計比較

別類種算豫計歲度年四熙隆

入歲





光武十年度以降租稅(關稅收入除之)驛屯賭收入及印紙收入累年比較

1000000 900000 800000 700000 600000 500000 400000 300000 200000 100000 0

科目	光武十年度	隆熙元年度	同載年度	同參年度
合計				
印紙收入				
驛屯賭收入				
其他内國稅				
烟草稅				
酒稅				
家屋稅				
戶稅				
地稅				

光武拾年度

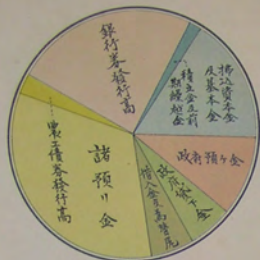
隆熙元年度

同載年度

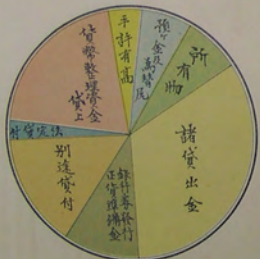
同參年度

# 在韓國金融機關總括現況

（隆熙四年明治三十五年）  
六月末日現在



政府預り金	三〇三三三七六
政府預り金	五六七二三四八
佛込資本金	八九五一〇〇
積立金及	五四三二六七
前期繰越金	一三二五五〇〇
銀行券發行高	一〇三三〇〇〇
銀行券發行高	一七八九〇七三
諸預り金	二一五二五〇
銀行券發行高	五三九九三七一
計	



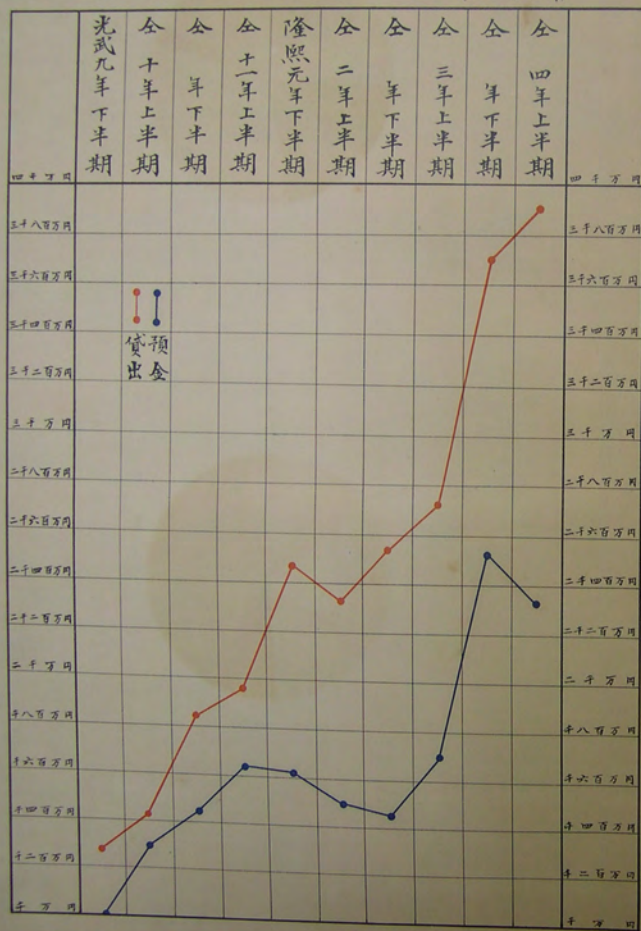
儲蓄整理資金	一一五八五五九
法定貸付	一〇三五一三〇
別途貸付	七九九四九三七
銀行券發行高	五四三二六七
銀行券發行高	一八四四六二七
銀行券發行高	三九〇五五五
銀行券發行高	二九六一九三八
銀行券發行高	二八六四四五
銀行券發行高	五三九九三七一
計	

運轉資金，內譯

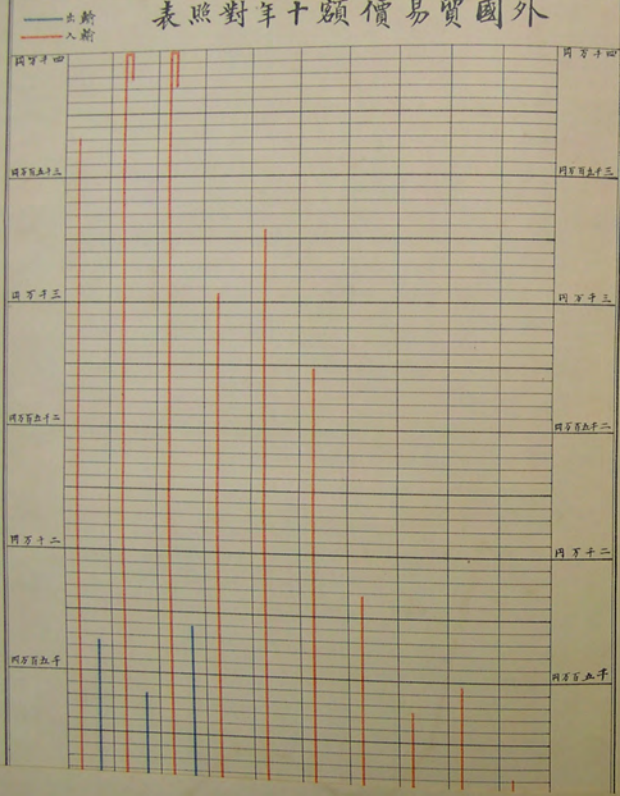
資金運轉，狀況

# 總預金貸出金比較

(在韓國日韓  
金融機關合併)



表照對年十額價易貿國外



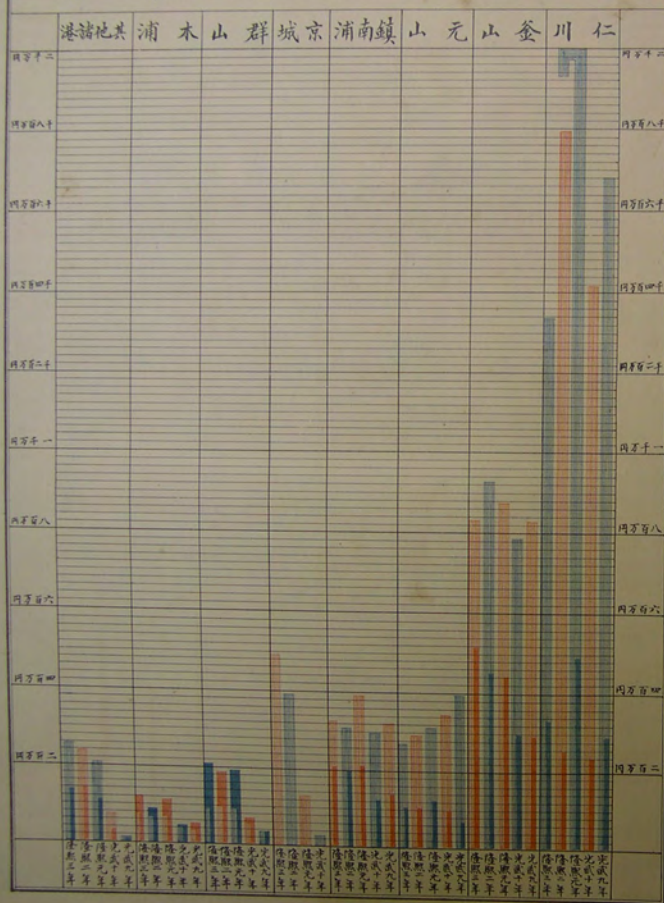
輸出入價額港別五年對照表

输出

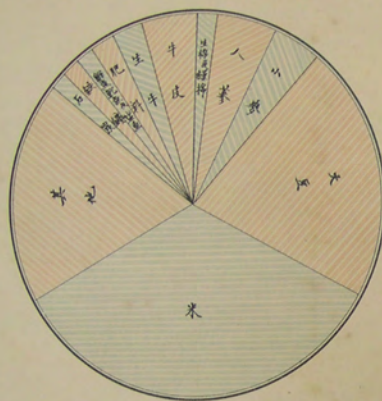
出

輸入

人



隆熙三年



輸出重要品  
輸出總價額 三六二四八〇〇月

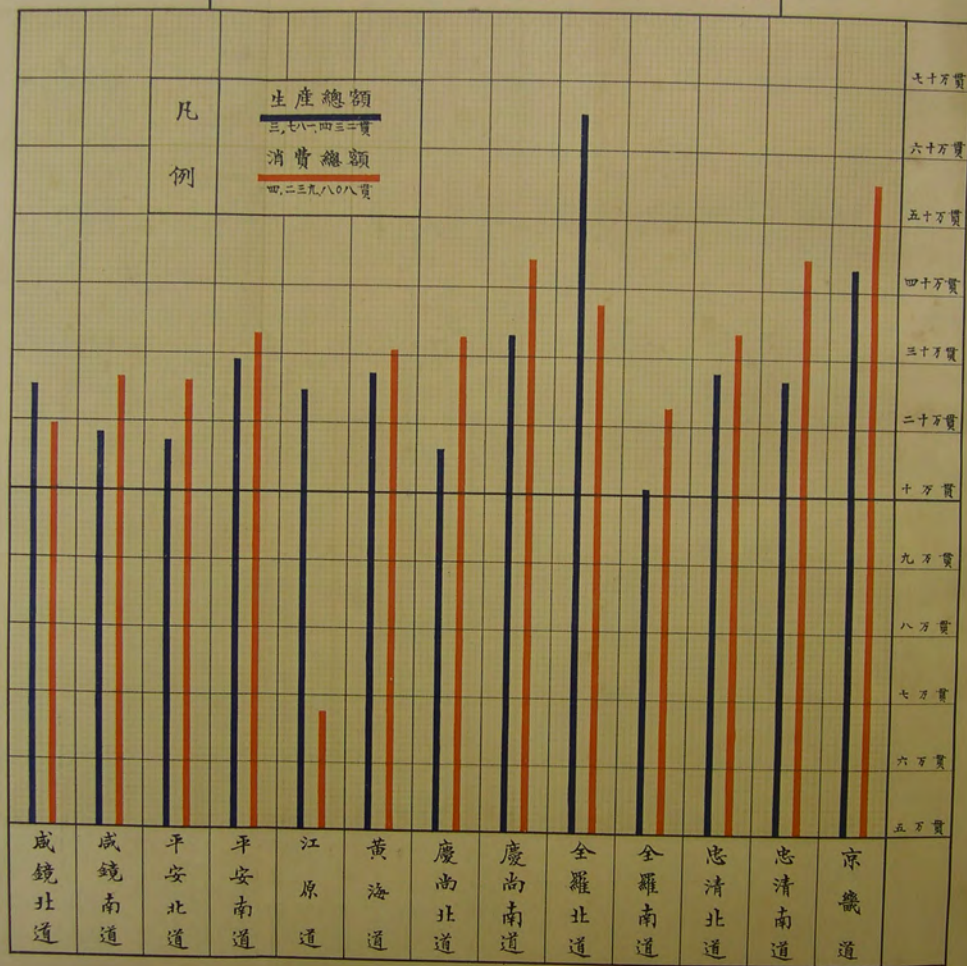


輸入重要品  
輸入總價額 三六二四八〇〇月

# 煙草產地圖



表較比量數費消及產生草烟(分年ヶ一)地查調既



# 韓國財政施設綱要

## 第一編

### 第一章 財務概説

#### 第一節 財政整理ノ沿革

當國ノ財政ハ舊來宮府ノ混同稅制ノ不備歲出ノ濫撥並幣制ノ紊亂等ニ基  
因シ久シク紛糾ヲ極メ弊竇自カラ其間ニ發生シ滔々トシテ常習ヲ爲シ延  
ヒテ産業ノ廢頽トナリ民力ノ萎靡トナリ積弊半乎トシテ拔クヘカラサル  
ノ勢ヲ致セリ

由來宮中府中混淆シテ其別判明ナラス宮中ヲ以テ府中ヲ制シ政府責任ノ  
歸スル所固然トシテ知ルヘカラサルハ韓國古來ノ因襲ニシテ其財政上ニ  
於テモ亦宮中ハ國家以外別ニ徵稅官ヲ各道ニ派遣シ各種ノ租稅ヲ徵收シ  
一方ニハ國庫ノ窮乏ヲ顧ミス屢過重巨額ノ支出ヲ強要シ然カモ事苟モ宮  
中ニ關スル以上政府ハ如何ナル要求モ之ヲ拒否スル能ハサルノ狀態ニシ

テ兩者ノ混亂實ニ言語ニ絶スルモノアリキ  
租税制度ニ就キ之ヲ觀ルニ徵税機關複雑ニシテ之カ統一ヲ缺キシノミナ  
ラス徵收方法亦不完全ナリシヲ以テ豫期ノ實收ヲ見ルコト難ク税制ノ基  
礎ハ頗ル不確實ナリキ蓋シ中央財政機關ハ畢竟虛位ヲ有スルニ過キスシ  
テ關稅制度ノ特別會計ノ下ニ組織サレタル總稅務司ノ專管ニ屬セシカ如  
キ、釐稅驛賭稅其他ノ雜稅ノ收納及紅蔘專賣事業ノ宮内府ノ管掌タリシカ  
如キ機關ノ錯綜甚ダシク加之郡守主トシテ徵稅ノ局ニ當ルノ外宮内府及  
中央官廳ノ派遣ニ係ル收租官アリテ各種ノ徵稅ニ從事スル等一定ノ規律  
ナキカ爲メ國庫ノ收入制度ハ殆ント官吏ノ私慾ヲ充スノ手段ニ供セラレ  
其局ニ當ルモノハ誅求是レ事トシ恣ニ各種ノ賦課金ヲ徵シ之ヲ私スルモ  
ノ比々皆然リトス

更ニ歲出ニ至リテハ放漫不整理ヲ極メ各官廳ハ濫リニ出給命令ヲ發シテ  
其支出ヲ度支部ニ強要シ或ハ出給命令ノ權ヲ有セサルモノ若ハ直接出納  
ノ衝ニ在ル官吏亦任意ニ支出スルカ如キ其事例少ナシトセス殊ニ甚シキ  
ハ自カラ收入シタルモノ自カラ支出シテ別ニ一ノ資金ヲ有シ國庫ハ其收

支ノ正數ヲ知ラサルカ如キ奇態ヲ演スル等開國五百四年(明治二十八年)ノ  
制定ニ係ル會計法ハ唯ニ裝飾的空文ニ過キサル有様ヲ呈セリ

貨幣制度ニ關シテハ光武二年(明治三十一年)發布ノ貨幣章程ニ於テ銀本位  
ヲ標榜セシニ拘ハラス當初政府ハ少許ノ銀銅貨ヲ發行シタルニ過キスシ  
テ爾來盛ンニ白銅貨ヲ鑄造發行シ其表價ト實價トノ差大ナルヲ利シ鑄造  
利益ヲ收メントセシ結果遂ニ濫鑄ノ弊ニ陥リ加フルニ民間ニ於ケル私鑄  
偽造亦滔々トシテ起リ爲メニ其信用地ニ墜ナ財政上經濟上ニ及ホセシ影  
響ハ頗ル深酷ヲ極ムルニ至リ是ヨリ先キ光武五年(明治三十四年)貨幣條例  
ヲ發布シ金貨本位制度ヲ採リシト雖モ久シク其實施ヲ見ス幣制紊亂ノ救  
濟上何等ノ效果ヲ來サザリキ

財政ノ紊亂夫レ此ノ如シ積弊ノ艾除蓋シ容易ノ業ニ非ラス而カモ上下ヲ  
通シテ國家ニ對スル誠意ヲ缺キ且ハ理財ノ觀念ニ乏シク此危機ニ際シ之  
カ救済ノ方策ヲ講スルモノナク平然トシテ袖手傍觀ノ狀態ニ在リテ益々  
其弊ヲ増大ナラシメタリシカ光武八年(明治三十七年)八月日韓協約成立ノ  
結果トシテ財政ニ關シテ日本政府ノ推薦ニ依ル顧問ノ就職ヲ見ルニ到リ

茲ニ財政整理ノ端緒ヲ啓キ亞ヒテ光武十年明治三十九年統監府ノ設置ト共ニ伊藤統監其任ニ就キ爾來其指導ノ下ニ宮中ノ廓清並行政諸制度ノ刷新等駁々トシテ進行シ同時ニ財政ノ整理亦一段ノ進捗ヲ告ゲタリ今茲ニ財政整理著手以來施設シタル主要ノ事項ヲ摘記スレハ

一 幣制紊亂ノ素因ヲ爲セシ舊白銅貨ノ回收並葉錢ノ整理ヲ實行スルト同時ニ擬ニ發布サレタル貨幣條例ノ實施ヲ宣言シ以テ金貨本位ノ實ヲ揚ケ又第一銀行ヲ中央金融機關トシ兌換券ノ發行ヲ公認シ

二 國民經濟ノ發展上從來設立ヲ見シモ資金ニ乏シク十分ノ發達ヲ爲サカリシ銀行ノ保護助長ヲ圖リ又政府監督ノ下ニ全國樞要ノ地ニ農工銀行手形組合及金融組合等ヲ設立セシメ之ヲ爲メニハ金融資金ノ一部ヲ割キ無利子貸下ヲ決行シ或ハ起業資金ヲ以テ補助ヲ與ヘ其成立ヲ助成シ以テ各地方金融ノ圓滑ヲ謀リ

三 豫算ノ編成及其實行等會計法ノ勵行ヲ促シ同時ニ第一銀行及其各支店ヲシテ金庫事務ヲ執行セシメ國庫金ノ出納ハ專ラ金庫ナシテ之ヲ掌理セシムルコトトシ一方ニ於テハ日本通信官署ニ國庫金取扱ヲ

依託シ以テ國庫金出納機關ノ普及ヲ期シ

四 稅務刷新ノ第一著手トシテ財務紊亂ノ淵源タル徵稅機關ノ更新ヲ實行シ之ヲ統一シ金制シ租稅徵收手續ヲ制定シテ徵稅ノ順序方法ヲ公示シ以テ不正ノ徵求ヲ防遏シ爾來輕易ノ稅制ヲ改正若ハ新定シ負擔ノ公平ヲ期スルト同時ニ歲入ノ増加ヲ圖リ

五 從來英國人ブラオン氏專掌ノ下ニ獨立シテ經營セシメタル關稅事務ヲ統一シ國庫ノ收入トシ又外國貿易發達ニ隨伴シ新ニ稅關及稅關支署ヲ増設シ更ニ樞要ノ地ニ保稅倉庫ヲ設置シ以テ物資ノ出入ニ便シ依リテ當業者ノ利便ニ供シ

六 常室有及國有財産ノ歸屬ヲ明カニスル爲メ設置セラレタル調査委員會ニ於テ審議ノ結果宮内府ヨリ移屬セシ驛屯土其他雜稅ノ處理紅蔘專賣事業ノ經營及國有不動産及常室債務ノ調査整理等ニ關シ各之ニ必要ナル施設ヲ爲シ

七 各種必要ノ財源ヲ調査シ之ヲ涵養方法ヲ講スル等將來ノ財政計畫上遺漏ナキヲ期シ

八

外國貿易ノ發展上從來天然ノ狀態ニ放任セラレシ港灣ノ修築ニ著

九

手ト同時ニ通商ノ發達ニ伴ヒ燈臺ヲ増設シ尙ホ水道ノ施設ヲ企圖シ

建築ノ統一上建築所ヲ創設シ全國各官衙ノ廳舍及官舎等ノ新營改  
築ヲ掌理シ建築材料ノ潤澤低廉ヲ圖ル爲メ煉瓦製造所ヲ起シタルカ  
又模範事業トシテ印刷局ヲ創設シ各種印刷及製紙事業ヲ計畫シタル  
等ニシテ今ヤ是等ノ施設ハ其基礎漸ク確立シ大體ニ於テ成果ヲ齎シツ、  
アリトス而シテ各其詳細ノ狀況ニ至リテハ後段章ヲ追フテ之ヲ敘述セン  
トス

第二節 財務機關

韓國ニ於ケル財務機關ハ其最高機關トシテ度支部アリト雖モ前述ノ如ク  
其名アリテ實ヲ有セス就中徵稅制度ノ不備ハ自カラ弊竇ヲ釀成シ財務紊  
亂ノ淵源ヲ爲シタルハ疑ヲ容レサル所ニシテ徵稅機關ノ整備ヲ期スルハ  
財政整理ノ第一要件タリ此ニ於テ當時財政顧問ハ徵稅機關ノ特設ヲ韓國  
政府ニ提議シ光武十年明治三十九年管稅官々制ヲ制定シ度支部大臣直轄  
ノ下ニ各道ニ稅務監ヲ置キ觀察使ヲシテ兼務セシメ以テ稅務監督ノ任ニ

當テ更ニ樞要ノ地ニ稅務官ヲ配置シ內國稅務執行機關トシ其下ニ稅務主  
事ヲ各郡ニ派駐シ稅務ノ執行ヲ分掌セシメ一方ニ於テハ光武九年明治三  
十八年以來漸次各地ニ財政顧問支部及分廳ヲ設置シ唯ニ稅務ノミナラス  
進シテ地方ニ於ケル一般財務ヲ監督シ以テ不正ノ徵求、不當ノ支出ヲ禁遏  
シ地方經濟狀態ノ進歩ニ努メ其配置漸ク治キニ及ヒ光武十一年明治四十  
年六月ヲ以テ京城、平壤、大邱、全州及元山ニ顧問監部ヲ置キ支部以下ヲ監督  
シテ地方財務監査ノ任ニ當ラシメタリ

光武十一年明治四十年七月締結セラレシ日韓新協約ノ結果トシテ財政顧  
問ハ其職ヲ去リ次テ隆熙二年明治四十一年一月各部改正官制ノ實施ヲ見  
顧問制度ニ一步ヲ進メ從來裏面ニ在リテ指導監督ノ任ニ當タリシ日本人  
ハ韓國官吏ニ任用セラレ直接責任ノ地位ニ立ツコト、ナリ當國行政組織  
上更ニ一新生面ヲ開ケリ今該官制上ニ於ケル財務諸機關組織ノ大要ヲ述  
レハ左ノ如シ

一 度支部ニ官房、司稅局、司計局、理財局ヲ存置シ

二 從來財政顧問部ニ於テ管掌セシ財源調查事務ヲ擴張シ新ニ度支部

ノ一局トシテ掌理シ

三 從來度支部ノ一局タリシ検査局ハ會計検査勸行ノ必要上新ニ度支部大臣ノ管理ニ屬スル獨立官廳トシ

四 印刷局モ検査局ト同様獨立官廳トナシ又水道施設事務ハ度支部ノ所管ヲ離レテ内部ニ移屬セシメ

五 從來全然特別會計ノ下ニ韓國關稅事務ヲ獨立專管セシ總稅務司廳ヲ廢止シ更ニ關稅局ヲ新設シ度支部大臣ノ管理ニ屬スル獨立官廳ト

六 從來ノ建築所ハ改正官制ト共ニ其事務ヲ擴張シ

七 從來ノ地方徵稅機關ヲ廢止シ更ニ內國稅務及地方財務監督機關トシテ曩ニ設置セラレタル財政顧問監部所在地ニ財務監督局ヲ特設シ

且之カ執行機關トシテ財務署二百三十一個所ヲ設置セリ

爾來官制改正ノ重ナルモノヲ舉クレハ左ノ如シ

一

隆熙二年(明治四十一年)六月勅令ヲ以テ宮內府所管及慶善宮所屬ノ不動產竝從來宮內府ニ於テ徵收セシ諸稅ヲ國有ニ移屬スルノ件公布

セラレシ結果同年七月臨時財産整理局官制ノ發布ヲ見該局ハ國有財産及帝室債務ノ整理ニ關スル事務ヲ掌理シ

二

從來帝室財産ノ一トシテ宮內府經理院ニ於テ專ラ之カ經營ヲナセシ紅蔘專賣事業ハ隆熙元年(明治四十年)十二月國庫收入ト定メラレ其所管ヲ度支部ニ移屬シタルヲ以テ同二年七月度支部司稅局ニ蔘政課ヲ増設シ該事務ヲ掌理セシカ本年一月新ニ蔘政局ナル獨立官廳ヲ設置シ之カ管理ニ任シ

三

光武九年(明治三十八年)以來當國開港ノ設備維持ニ關スル工事ヲ掌理シツ、アリシ臨時稅關工事部ハ事務統一上ノ必要ヨリ隆熙二年(明治四十一年)八月之ヲ建築所ニ合併シ同時ニ建築所ノ事務ヲ擴張シ

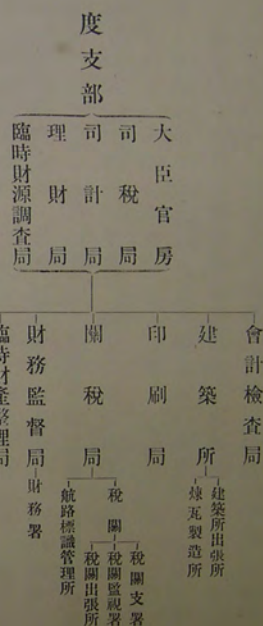
四

隆熙二年(明治四十一年)忠清南道公州ニ財務監督支局ヲ設置シタルシカ同三年(明治四十二年)三月之ヲ廢止シ更ニ獨立シタル監督局ヲ新設セリ又本年一月財務監督局官制ノ改正ト同時ニ全羅南道光州ニ財務監督局ヲ新設シ

五

本年三月關稅局及稅關官制ヲ改正シ新ニ船舶及海員ニ關スル事務

増設シ又燈臺局ヲ航路標識管理所ト改稱シ  
 六 本年三月新ニ土地調査局設置セラレテ度支部大臣管理ノ下ニ土地  
 ノ調査及測量ニ關スル事項ヲ掌理スルコトナレリ  
 今本年即チ隆熙四年(明治四十三年)六月末日ニ於ケル韓國財務行政機關ノ  
 配置ヲ示セハ左ノ如シ



## 第二章 歲計

韓國ニ於テハ由來歲入歲出ノ現計ハ毎年豫算ヲ以テ公表セラレタリト雖  
 是レ畢竟形式ニ止マリテ毫モ其實效ナカリシカ財政顧問部ノ設置ヲ見ル  
 ニ至リテ初メテ歲入ノ狀況ヲ正確ニ調査シ所要經費ノ需要額ニ按排シテ  
 之カ權衡ヲ保タシメ而シテ光武九年度明治三十八年ノ歲計總豫算ヲ編成  
 シ從來豫算ナルモノ、殆ト無視セラレシ弊習ヲ矯正シ以テ之カ正確ニ維  
 持セラル、ニ努メタリ尋テ隆熙二年(明治四十一年)一月新官制ノ施行トナ  
 リシヨリ以來政務機關ノ擴張事業ノ増進等ニ因リ従前ニ比シテ歲計豫算  
 額ハ大ニ増加スル所アリシト雖モ其編成ニ益々精密ヲ加ヘ嚴ニ豫算ノ範  
 圍ヲ維持シ豫算外ノ支出ヲ緊縮シテ以テ歲入歲出ノ均衡ヲ保ツヲ得ルニ  
 至レリ

今左ニ本年即チ隆熙四年(明治四十三年)及前五箇年間ノ歲入歲出豫算ヲ掲  
 載シ其増減ヲ示サン

自光武九年度 歲入 歲出 豫算 比較  
 至隆熙四年度

[illegible]

第一節 歲入

韓國豫算制度ノ略ハ確立スルニ至ルヲ光武九年度明治三十八年以降ニ於ケル歲入豫算ノ概況ヲ述ヘシニ光武九年度ニ於テハ歲入七百四拾八萬貳百八拾七圓ニ過キサリシニ五箇年後ノ隆熙四年度明治四十三年ニ於テハ實ニ貳千參百七拾六萬五千五百九拾四圓卽三倍強ノ増加ヲ示スニ至レリ是レ時勢ノ發展ニ隨ヒ各般ノ施設ヲ要スルモノ漸次多キヲ加フルカ爲其財源ヲ國債ニ需メタル等臨時ノ歲入著シク増加セシニ依ルト雖一面亦

行政機關ノ整備ニ伴ヒ租稅其他官業收入等經常歲入ニ於テモ漸次其増加ヲ來セルニ原因ス今左ニ光武九年度以降本年度ノ豫算額比較表及其内譯表ヲ掲ケン

自光武九年度至隆熙四年度 六箇年度間歲入豫算額比較表

[illegible]

[illegible]

自光武九年度  
至隆熙四年度  
六箇年度間歲入豫算內譯表

[illegible][illegible]

[illegible]

第二節 歲出

光武九年度以降ニ於ケル歳出ノ概況ハ政務機關ノ刷新及諸般事業増進ノ爲前記歳入ニ於ケル増加ノ如ク六箇年間に著シキ増加ヲ來セリ今左ニ之カ比較表及内譯表ヲ掲ケン

自光緒九年度至  
隆熙四年度  
六箇年度間歲出豫算額比較表

[illegible]

[illegible]

自光武九年度至隆熙四年度 六箇年間歲出豫算內譯表

科 目	經常部	皇室部	內務部	本部廳
(隆熙四十四年度) (明治四十二年)	1,200,000			三〇七,四八八
(隆熙三十三年度) (明治四十二年)	1,400,000			三六八,六六六
(隆熙三十二年度) (明治四十一年)	1,400,000			二八〇,九〇〇
隆熙元年度 (明治四十年)	1,400,000			七四四,四四四
光武十年度 (明治三十九年)	1,400,000			八六七,七二二
光武九年度 (明治三十八年)	1,400,000			一一〇〇,〇〇〇

[illegible]

[illegible][illegible]



軍實資金及常備債務支拂	110,000	80,000	110,000	110,000	110,000	110,000
煉瓦製造所事業費						
前年度歳入不足補填額						
財務整理費						
重建及新築費 <small>(元金内府所管ノ包)</small>						
度支部所管合計	46,000	8,000	4,000	4,000	4,000	4,000
學部所管						
教育補助費	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
學校建築費	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000
臨時學事擴張費其他						
學部所管合計	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000
農商工部所管						
農商工業費	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000
臨時棉花栽培所	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
輸出牛檢疫費其他	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
商工業調査費	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000

第三節 歳出豫算費途區分

光武九年度(明治三十八年)以降、隆熙四年度ニ至ル六箇年間ノ歳出豫算ヲ其費途ノ性質ニ依リ區別スルハ大略左ノ如シ

平壤鐵業所擴張及修繕費	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000
農商工部所管合計						
元法部所管						
漢城裁判所修費其他						
歳出臨時部合計	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000
歳出總計	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000

種別	隆熙四年度 (明治三十四年)	隆熙三年度 (明治三十五年)	隆熙二年度 (明治三十六年)	隆熙元年度 (明治三十七年)	隆熙十年度 (明治四十六年)	隆熙九年度 (明治四十五年)
皇室費	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000
國債費	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000
中央行政費	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000
地方行政費	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000
軍務費	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000
裁判及監獄費	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000

備考

費等ナリ

#### 第四節 繼續費

スヘキ金額ハ百拾壹萬九千七百六拾圓ナリ其費目及年割額ハ左ノ如シ

第一編 第二章 戰計

## 第五節 各特別會計

隆熙元年度明治四十年ニ於テ始メテ特別會計ヲ設ケ爾後四年度ニ至ル四箇年間ノ歳入歳出豫算ヲ示スコト左ノ如シ但度量衡製造檢定所ハ元年度限り棉花栽培費ハ二年度限り廢止シ之ヲ一般會計ニ編入セリ

區分	年	度	入	出	入	出	入	出	入	出	入	出
慈惠醫院	明治四十年	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年	明治四十五年	明治四十六年	明治四十七年	明治四十八年	明治四十九年	明治五十年	明治五十一年
印刷局	1120,000	1120,000	1,260,000	1,260,000	1,260,000	1,260,000	1,260,000	1,260,000	1,260,000	1,260,000	1,260,000	1,260,000
煉瓦製造所	1,260,000	1,260,000	1,260,000	1,260,000	1,260,000	1,260,000	1,260,000	1,260,000	1,260,000	1,260,000	1,260,000	1,260,000
公債金	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000
平壤鐵業所	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000
度量衡製造檢定所	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000
棉花栽培費	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000	5,200,000

## 第六節 日本政府ヨリノ借入金

隆熙元年明治四十年七月ニ於ケル日韓新協約締結ノ結果ハ前述ノ如ク諸般經費ノ増加ヲ來シ之カ爲從來ノ歳入ノミヲ以テシテハ到底其費途ヲ支

フルコト能ハサルニ因リ隆熙元年度明治四十年以降五箇年間日本國政府ヨリ左ノ借入金ヲ爲シ之カ補足ニ充ツ但此借入金ハ無利子ニシテ返済ハ無期限ナリ

一金百七拾六萬九千五百參圓 (隆熙元年度 明治四十年度)  
 一金五百貳拾五萬九千五百八拾圓 (隆熙二年度 明治四十一年度)  
 一金四百六拾五萬參千五百四拾圓 (隆熙三年度 明治四十二年度)  
 一金貳百六拾萬圓 (隆熙四年度 明治四十三年度)  
 一金貳百六拾萬圓 (隆熙五年度 明治四十四年度)  
 合計金千六百八拾八萬貳千六百貳拾參圓 (明治四十四年度)

## 備考

借入金最初ノ豫定總額ハ千九百六拾八萬貳千六百貳拾參圓ナリシカ隆熙三年明治四十四年四月ヨリ司法權ヲ日本國ニ委託ノ結果之ニ伴フ經費ニ相當スル金額トシテ隆熙四年度明治四十四年同五年度明治四十四年ニ於テ各年百四拾萬圓合計貳百八拾萬圓ヲ減額シタルヲ以テ本文ノ通りノ合計額トナリタルナリ

## 第七節 隆熙三年度明治四十二年歳入歳出現計

隆熙三年度明治四十二年歳入歳出ヲ本年即チ隆熙四年六月末日ニ於ケル

現計ヲ以テ比較對照スルニ歲入經常部千參百八拾八萬八千六百八拾四圓六拾九錢貳厘歲入臨時部千四百五拾八萬九千九百參拾六圓拾參錢四厘合計貳千八百四拾七萬八千六百貳拾圓八拾貳錢六厘之ニ對スル歲出經常部千四百八拾萬四千百貳拾圓六拾貳錢壹厘歲出臨時部千參百參拾五萬九千百貳拾五圓四拾壹錢四厘合計貳千八百拾六萬參千貳百四拾六圓三錢五厘ニシテ歲入ノ歲出ニ超過スルコト參拾壹萬五千參百七拾四圓七拾九錢壹厘ナリ其內譯現計ヲ示スコト左ノ如シ

一 隆熙三年度歲入隆熙四年六月末日司計簿現計(△ハ調定)  
 濟額超過)

科 目	豫算額	調定濟額	收入濟額	不納缺損額	收入未濟額	豫算額ト調定濟額トノ差
經常部						
租 稅	11,234,940.00	11,234,940.00	10,846,176.73	388,763.27	5,300,940.00	3,065,763.27
地 稅	6,235,000.00	6,235,000.00	6,234,330.56	669.44	3,649,000.00	2,589,669.44
戶 稅	5,000,000.00	5,000,000.00	4,611,846.17	388,153.83	3,649,000.00	1,369,846.17
關 稅	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
噸 稅	4,000,000.00	4,000,000.00	4,000,000.00	0.00	0.00	0.00
臨時部						
酒 稅	10,000,000.00	10,000,000.00	10,000,000.00	0.00	0.00	0.00
煙 草 稅	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
家 屋 稅	2,000,000.00	2,000,000.00	2,000,000.00	0.00	0.00	0.00
雜 稅	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	0.00	0.00	0.00
鹽 稅	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
印 紙 稅	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
官 業 及 官 有 財 產 稅	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
鐵 業 稅	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
茶 業 稅	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
醫院收入及其他	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
諸 收 入	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
稅 關 雜 收 入	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
雜 入	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00

水 產 稅	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	0.00	0.00	0.00
鹽 稅	10,000,000.00	10,000,000.00	10,000,000.00	0.00	0.00	0.00
鐵 業 稅	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
家 屋 稅	2,000,000.00	2,000,000.00	2,000,000.00	0.00	0.00	0.00
酒 稅	10,000,000.00	10,000,000.00	10,000,000.00	0.00	0.00	0.00
煙 草 稅	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
既 往 年 度 地 稅 收	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
印 紙 稅	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
官 業 及 官 有 財 產 稅	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
鐵 業 稅	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
茶 業 稅	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
醫院收入及其他	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
諸 收 入	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
稅 關 雜 收 入	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00
雜 入	1,000,000.00	1,000,000.00	1,000,000.00	0.00	0.00	0.00

[illegible]

二 隆熙三年度歲出隆熙四年六月末日司計簿現計

科 目	豫 算 額	豫 算 決 定 後 増 加 額	支 出 額	翌 年 へ 度 越 繰	豫 算 残 額
經 常 部		前年度繰越			
皇 室 費	一 千 万 一 百 一 十 五 千 圓	餘額 金庫預金 現金	一 千 六 百 一 十 五 千 圓		
内 部 所 管					
内 部 本 廳	三 千 六 百 六 十 六 千 圓		三 千 六 百 六 十 六 千 圓		五 千 四 百 四 十 五 圓

警視廳	四六九,七〇〇	五三三,五〇〇	一六六,六〇〇
漢城府	一八九,九〇〇	二四四,〇〇〇	一〇八,七〇〇
地方各道	四〇〇,〇〇〇	四〇〇,〇〇〇	一一六,六六六
地方各郡	八五五,二〇〇	四〇〇,〇〇〇	一〇六,六六六
地方警察費	二六六,一三三	一七六,一三三	四〇,〇〇〇
大韓醫院	一七六,〇〇〇	一六六,〇〇〇	六六,六六六
慈惠醫院支出金	一七六,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇
水道事業費	三三〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇
計	五,九八五,〇〇〇	五,八六二,〇七九	一,〇〇〇,〇〇〇
度支部所管	五八〇,〇〇〇	四九三,〇〇〇	三三六,六六六
度支部本廳	一八九,〇〇〇	一〇八,八八八	四四,〇〇〇
普老所	六〇〇,〇〇〇	一〇八,八八八	四四,〇〇〇
內閣	五五五,〇〇〇	一〇八,八八八	四四,〇〇〇
中樞院	四〇〇,〇〇〇	一〇八,八八八	四四,〇〇〇
表動院	一六六,〇〇〇	一〇八,八八八	四四,〇〇〇
會計検査局	四六六,〇〇〇	一〇八,八八八	四四,〇〇〇
建築所	二二六,〇〇〇	一〇八,八八八	四四,〇〇〇

[illegible][illegible]

計	經常部合計	臨時部	內部所管	軍用及鐵道用地費	治道費	仁川水道工事費	平壤水道工事費	衛生費	漢城土木費	土木調查費	木浦水道補助交付金	漢城衛生會除穢事業費補助	慈惠醫院臨時設備費支出金	臨時水上警備費	水雷發見者賞與金	暴徒掃鎮費
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00
1,600,000.00	1,600,000.00	2,200,000.00	2,200,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000.00	7,000,000					

郵便物警送費	七二四〇〇〇
大韓醫院水道布設費	三八三〇〇
間島內社臨時安附金	四六〇〇〇
臨時民籍調査費	四八八〇〇
土地家屋購入及修理費	九一四〇〇
漢城消防設備費	一五二〇〇
臨時漢城府內道路橋梁修理費	一五六六〇〇
道路改修費補助	五三六〇〇
歷代殿陵參奉追接馬給及鎮南浦水道敷設調查費	一三〇〇〇
警備電話架設費	五二八〇〇
地方警察廳廳舍設備及臨時雜費	一一七〇〇
漢城府臨時登記事務諸費	一七一〇〇
匪徒被害者遺族慰籍金	一七二〇〇
殉職警察官遺族慰籍金	一〇〇〇〇
臨時水害應急諸費	一六二〇〇
義州新義州間橋梁修理費	一五七〇〇



所往被害者遺族給與金	4,100,000	4,100,000	—	—
舊債償還	117,000,000	117,000,000	—	—
澳門島燈臺臺徒被害諸費	1,040,000	1,040,000	—	—
湖南鐵道敷設認可撤消賠償金	11,420,000	11,420,000	—	—
平壤鐵業所貸付金	1,400,000	1,400,000	—	—
追撥史庫重建費	17,111,000	17,111,000	—	—
臨時參業調查費	1,400,000	1,400,000	—	—
退職外國人贈與金	1,400,000	1,400,000	—	—
東宮武官邸附屬官舍維持費	1,400,000	1,400,000	—	—
鎮南浦稅關保甲敷地地租	1,400,000	1,400,000	—	—
清津港雜居地經營支出金	11,420,000	11,420,000	—	—
匪徒被害者救恤恩給金	2,400,000	2,400,000	—	—
臨時機密費	11,420,000	11,420,000	—	—
仁川稅關防疫費	2,400,000	2,400,000	—	—
特別功勞賞與金	10,000,000	10,000,000	—	—
勳勞特賜金	11,420,000	11,420,000	—	—
仁川火藥庫新築費	—	—	—	—

400

20

家屋買收費	20,000,000	20,000,000	—	—
森林事業從事者報酬金	10,000,000	10,000,000	—	—
特別吊慰金	100,000,000	100,000,000	—	—
日本國派遣諸費	10,000,000	10,000,000	—	—
祭幣銀版製造諸費	10,000,000	10,000,000	—	—
清國舊債償還	10,000,000	10,000,000	—	—
仁川稅關復舊工事費	10,000,000	10,000,000	—	—
裁判所建築費	10,000,000	10,000,000	—	—
計	1,120,000,000	1,120,000,000	—	—
軍部所管	1,120,000,000	1,120,000,000	—	—
軍事教官慰勞金	1,120,000,000	1,120,000,000	—	—
學部所管	—	—	—	—
教育補助費	1,120,000,000	1,120,000,000	—	—
學校建築費	1,120,000,000	1,120,000,000	—	—
私立釜山開成日語學校交付金	1,120,000,000	1,120,000,000	—	—
臨時學事擴張費	1,120,000,000	1,120,000,000	—	—
校舍移轉費	1,120,000,000	1,120,000,000	—	—

21



三 隆熙三年明治四十二年七月勅令第六八號ヲ以テ軍部廢止ノ際其豫算殘額ハ宮内府ハ引續キタルヲ以テ本表中軍部所管ニ計上シタル豫算額及支出濟額ハ廢止前ニ支出濟トナリタル額及支出未濟額ナリ

## 附豫算ニ對スル歲入歲出現計増減說明

隆熙三年度明治四十二年歲入ノ收入濟額貳千八百四拾七萬八千六百貳拾圓八拾貳錢六厘ヲ其豫算額貳千九百貳拾貳萬八千拾壹圓ニ對比スレハ七拾四萬九千參百九拾圓拾七錢四厘ヲ減少セリ之ヲ經常臨時ニ區分スレハ經常部歲入ノ收入濟額ハ千參百八拾八萬八千六百八拾四圓六拾九錢貳厘ニシテ其豫算額千五百拾七萬八千九百參圓ニ對比シ百貳拾九萬貳百拾八圓參拾錢八厘ヲ減少スルモ臨時部歲入ノ收入濟額ハ千四百五拾八萬九千九百參拾六圓拾參錢四厘ニシテ其豫算額千四百四萬九千八百八圓ニ對比シ五拾四萬八百貳拾八圓拾參錢四厘ヲ増加セルヲ以テ差引前記ノ減少ヲ見ル

今茲ニ豫算ニ對シ收入濟額ノ増減ヲ生シタル重要ノ事項ヲ舉クレハ概略左ノ如シ

經常部ニ在テ租稅ハ結數ノ増加セルニ依リ地稅收入ノ増加セシト戸數カ

其豫量ヨリ増加セシニ依リ戶稅收入ノ増加セシト入港船舶ノ多カリシニ依リ噸稅收入ノ増加セシト酒類造石高ノ多カリシ等ニ依リ酒稅收入ノ増加セシ等ノ爲合計貳拾七萬八千五百四拾圓八拾九錢ヲ増加セシト雖貿易額ノ少カリシニ依リ關稅收入ノ減少セルト漁業法實施ニ依リ水產稅收入ノ印紙收入ニ移リタルモノアリ鑛業不振ノ爲鑛稅收入ノ減少セシト課稅物件ノ豫量ヨリ少カリシ等ノ爲家屋稅煙草稅及雜稅等ノ減少セル爲合計七拾五萬七千參百五拾七圓七拾壹錢八厘減少セシヲ以テ差引四拾七萬八千八百拾六圓八拾貳錢八厘ヲ減少セリ

印紙收入ハ印紙賣下代ノ多カリシ爲五萬九千七拾壹圓九拾九錢ヲ増加セリ驛屯賭收入ハ米價ノ低落ニ依リ貳拾貳萬貳千參百貳拾七圓八拾六錢四厘ヲ減少セリ

官業及官有財產收入ハ前年度ヨリ持越品ノアリタル爲藝業收入ノ増加セシト患者ノ多カリシ等ニ依リ醫院收入ノ増加セシト新ニ印刷局益金及官有物貸下料等アリタル爲合計拾六萬八千參拾參圓九拾五錢九厘ヲ増加セシト雖鑛石單價ノ値下等ニ依リ鑛業收入ノ減少セシト官報賣下ノ少カリ

シニ依リ官報收入ノ減少セシト、製品ノ翌年度へ持越多キ等ノ爲及度量衡事業收入ノ減少セシト、拂下代金ノ延納許可、賣却價額協定ノ變更等ニ依リ林野收入ノ減少セシ等ノ爲合計貳拾四萬千八百貳拾八圓六錢六厘ヲ減少セシヲ以テ差引七萬參千七百九拾四圓拾錢七厘ヲ減少セリ

雜收入ハ軍艦楊武號ノ賣却砂金馬蹄銀ノ賣却等ニ依リ官有物品賣却代收入ノ増加セシト、辨償及違約金等ノ増加セシモノアリシ爲合計八萬七千六百參圓六錢九厘ヲ増加セシト、雖稅關雜收入等ノ減少セシニ依リ合計六拾六萬千九百五拾四圓五拾六錢八厘減少セシヲ以テ差引五拾七萬四千參百五拾壹圓四拾九錢九厘ヲ減少セリ、臨時部ニ在テ繰入金ハ財源ヲ要スル歲出額減少ニ伴ヒ公債繰入金ノ少カリシ爲拾萬四百貳拾圓拾錢七厘ヲ減少セリ

公債金繰替ハ財源ヲ要スル歲出額ノ減少ニ伴ヒ百萬圓ヲ減少セリ、前年度繰入金ハ前年度剩餘金ノ豫量ヨリ多カリシニ依リ百六拾四萬千貳百四拾八圓貳拾四錢壹厘ヲ増加セリ

以上經常部臨時部ヲ通シテ増減差引減少ノ金額ハ七拾四萬九千參百九拾

### 圓拾七錢四厘ナリ

隆熙三年度明治四十二年歲出豫算額合計ハ貳千九百貳拾貳萬七千五百四拾九圓國庫豫備金外ニ臨時支出ヲ爲シタルモノ七拾四萬六千六百拾四圓及前年度豫算額ヲ本年度ニ繰越シタルモノ四百六拾萬四千九百貳拾壹圓八錢參厘總計參千四百五拾七萬九千八百四拾四圓八錢參厘ニシテ之ニ對シ支出濟額貳千八百拾六萬參千貳百四拾六圓參錢五厘及年度内ニ於テ支出ヲ終ラスシテ翌年度ニ繰越シタル金額ハ參百參拾八萬貳百七拾五圓貳拾錢七厘合計參千五百五拾四萬參千五百貳拾壹圓貳拾四錢貳厘ナルヲ以テ差引參百參萬五千五百六拾貳圓八拾四錢壹厘ノ不用減少額ヲ生セリ

今茲ニ不用減少ニ係ハル重要事項ノ概略ヲ舉クレハ經常部ニ在テハ隆熙三年明治四十二年十一月日本國へ司法權委任ノ結果法部廢止トナリタル爲支出ヲ要セサリシ金額五拾貳萬六拾六圓七拾參錢五厘外ニ農工債券引受ノ分ヲ賣却セシ結果引受金ノ戻入アリシカ爲支出減少セシ金額ハ五拾五萬九千八百五拾四圓八拾六錢五厘ナリ

臨時部ニ在テハ漸次暴徒鎮定ノ結果、暴徒掃蕩費及之ニ關係スル經費支出

ノ少カリシ爲メ不用トナリタル金額ハ六萬六千四百七拾九圓四拾壹錢壹厘ナリ

獸疫豫防費其他關係經費ニ於テ支出ノ減少セシ爲メ不用トナリタル金額ハ四千貳百七拾七圓四拾八錢ナリ

前掲ノ外經常部臨時部ニ於テ經費ノ節約ヲ爲シタルト種々ノ事由ニ依リ豫定ノ支出ヲ要セサリシ爲メ支出ノ減少セシ金額ハ百八拾八萬四千八百八拾四圓參拾五錢ナリ

以上不用減少額ノ合計ハ參百參萬五千五百六拾貳圓八拾四錢壹厘ナリ

### 三 隆熙三年度特別 隆熙四年六月末日司計簿現計

#### 内部所管慈惠醫院特別會計歲入歲出

##### 歲入

科 目	豫算額	調定済額	收入済額	不納缺損額	收入未済額	豫算額ト調定済額トノ差
經常部	117,000,000	117,000,000	117,000,000	—	—	—
慈惠醫院	117,000,000	117,000,000	117,000,000	—	—	—

##### 歲出

科 目	豫算額	前年度繰越	豫算決定後増加額	支出済額	翌年度へ越	豫算殘額
臨時部	11,000,000	—	—	—	—	—
慈惠醫院臨時設備費受入金	11,000,000	—	—	—	—	—
計	11,000,000	—	—	—	—	—

#### 度支部所管印刷局特別會計歲入歲出

(△ハ調定済額超過)

##### 歲入

科 目	豫算額	調定済額	收入済額	不納缺損額	收入未済額	豫算額ト調定済額トノ差
印刷局作業收入	11,000,000	11,000,000	11,000,000	—	—	—

政府支出金		計	
歳入臨時部繰入	40,000,000	歳入臨時部繰入	40,000,000
國債償還金繰替	14,400,000	國債償還金繰替	14,400,000
計	54,400,000	計	54,400,000

歳出

科	目	豫算額	豫算決定後増加額	支出済額	繰翌年度越へ	豫算残額
印刷局作業費		14,400,000	—	14,400,000	—	17,600,000
前年度繰越		—	—	—	—	—
及国庫金		—	—	—	—	—
及国庫金		—	—	—	—	—

度支部所管煉瓦製造所特別會計歳入歳出

歳入

科	目	豫算額	調定済額	收入済額	不納缺損額	收入未済額	豫算額ト調定済額トノ差
煉瓦製造所作業取入		33,400,000	10,400,000	10,400,000	—	—	11,000,000
前年度繰越		—	—	—	—	—	—
及国庫金		—	—	—	—	—	—
及国庫金		—	—	—	—	—	—

歳出

科	目	豫算額	豫算決定後増加額	支出済額	繰翌年度越へ	豫算残額
煉瓦製造所作業費		33,400,000	—	10,400,000	—	11,000,000
前年度繰越		—	—	—	—	—
及国庫金		—	—	—	—	—
及国庫金		—	—	—	—	—

度支部所管公債金特別會計歳入歳出

(△印ハ調定済額超過)

歳入

科	目	豫算額	調定済額	收入済額	不納缺損額	收入未済額	豫算額ト調定済額トノ差
公債金收入		1,000,000,000	87,200,000	87,200,000	—	—	812,800,000
資金會計繰額推入		1,200,000,000	119,600,000	119,600,000	—	—	880,400,000
計		2,200,000,000	206,800,000	206,800,000	—	—	1,699,200,000
前年度繰越		—	—	—	—	—	—
及国庫金		—	—	—	—	—	—
及国庫金		—	—	—	—	—	—

歳出

科	目	豫算額	豫算決定後増加額	支出済額	繰翌年度越へ	豫算残額
歳入臨時部繰入		40,000,000	—	40,000,000	—	—
國債償還金繰替		14,400,000	—	14,400,000	—	—
計		54,400,000	—	54,400,000	—	—
前年度繰越		—	—	—	—	—
及国庫金		—	—	—	—	—
及国庫金		—	—	—	—	—

農商工部所管平壤鑛業所特別會計歳入歳出

歳入

## 歲出

科 目	豫算額	調定済額	收入済額	不納缺損額	收入未済額	豫算殘額 調定済額トノ差
平壤鐵業所作業收入	3,125,000	1,000,000	1,000,000			2,125,000

科 目	豫算額	豫算決定後増加額	支出済額	翌年度へ繰	豫算殘額
平壤鐵業所作業費	3,125,000	—	—	—	3,125,000

## 備考

農商工部所管平壤鐵業所收入済額ノ支出済額ヨリ八萬參千參百拾壹圓號錢七厘不足スルハ借入金ヲ以テ補填整理スルナリ

## 第三章 租稅及諸收入

## 第一節 總論

由來韓國財政ノ如ク紊亂ヲ極メタルモノ其例少ナシ殊ニ徵稅ノ事ニ於テ其最モ甚ダシキヲ見ル即チ徵稅機關ハ之カ統一ヲ缺キ郡守ニ於テ租稅ヲ徵收スルノ外宮内府又ハ中央官廳ノ私派シタル徵稅員ニ於テ任意ニ徵收スル等區々ニ出テ劃一ノ制度ナキカ爲メ地方吏員ハ之ヲ奇貨トシテ擅ニ誅求ヲ事トシ積弊漸ク風ヲ爲セシニ依リ財政顧問就職ノ初メニ當リテ之カ矯正ノ方法トシテ徵稅機關ノ整理ヲ謀リ國庫金ノ出納ハ專ラ金庫ヲシテ司掌セシムルコトトシ光武十年明治三十九年管稅官官制ヲ制定シ度支部大臣直轄ノ下ニ各道ニ稅務監督ヲ置キ觀察使ヲシテ之ヲ兼名シメ以テ稅務監督ノ任ニ當ラシメ樞要ノ地三十六箇所ニ稅務官ヲ配置シテ稅務執行機關トシ更ニ其下ニ稅務主事百六十八人ヲ置キ各郡ニ派駐セシメテ稅務執行ヲ分掌セシメタリ又之ト同時ニ管稅官服制ヲ定メ租稅徵收ニ當ル官吏ハ人民ヲシテ一見稅務官吏タルヲ知得セシムルコトヲ期セリ

光武十一年明治四十年六月ニ至リ徵稅機關ノ配置未タ充分ナラサルカ爲  
徵稅ノ實ヲ舉クル能ハサルヲ感スルヤ更ニ稅務官十四人稅務主事百三十  
九人ヲ増員シ以テ徵稅ノ完美ヲ期スルト共ニ納稅者ノ便宜ヲ企圖セリ敍  
上ノ如ク徵稅機關ヲ整理シ稅務監以下ノ吏員ヲ配置シ稅務執行ノ任ニ當  
テシメタルモ多年誅求ノ積弊ハ一期ニシテ洗除シ難キモノアリ機關ノ整  
理統一ノミヲ以テ満足スベカラス之カ監督ハ最モ緊切ノ事項ニ屬スルヲ  
以テ財政顧問部ニ在リテハ京城平壤大邱全州元山ノ各地ニ顧問監部ヲ置  
キ財政監査官ヲ配置シ其管轄ノ下各道ニ顧問支部計十三箇所、樞要ノ地ニ  
顧問分廳計六十九箇所ヲ置キ之ニ財務官及財務官補ヲ配置シ以テ財務各  
般ノ指導監督ノ任ニ當ラシメ就中徵稅事務ニ就テハ特ニ嚴密ナル注意ヲ  
加ヘタリ

光武十一年明治四十年七月ニ於テ締結セラルタル日韓新協約ノ結果日本  
人官吏任命ノ端啓ケタルカ爲徵稅機關ノ外別ニ指導監督ノ機關ヲ併置ス  
ルノ必要ヲ認メサリシヲ以テ兩機關ヲ合一シ一機關ヲシテ財務ノ整理、徵  
稅ノ完備ヲ期スルコトトシ隆熙元年(明治四十年)十二月財務監督局官制及

財務署官制ヲ發布シ翌隆熙二年(明治四十一年)一月ヨリ實施スルコトトセ  
リ之ニ依レハ財務監督局ハ度支部大臣管理ノ下ニ内國稅務及地方ニ於ケ  
ル一般財務ヲ監督シ財務署ハ之ヲ執行スル機關トナレリ而シテ監督局ハ  
先ツ之ヲ漢城平壤大邱全州元山ニ置キ全國ヲ分ナテ管轄セシメ其下ニ於  
ケル財務署ハ全國樞要ノ地ニ置カレテ其數二百三十四箇所アリ今財務監  
督局ノ名稱及管轄區域ヲ舉クレハ左ノ如シ

## 財務監督局名稱及管轄區域表

名 稱	位 置	管 轄 區 域
漢城財務監督局	京 城	京畿道江原道
平壤財務監督局	平 壤	平安南道黃海道平安北道
大邱財務監督局	大 邱	慶尙北道忠清北道慶尙南道
全州財務監督局	全 州	全羅北道忠清南道全羅南道
元山財務監督局	元 山	咸鏡南道咸鏡北道

以上ノ如ク大邱及全州ノ兩財務監督局ハ各三道ヲ管轄シ其區域廣濶ニ失  
シ監督ノ實效ヲ奏シ難キ感アルヲ以テ隆熙二年(明治四十一年)八月財務監  
督局官制ヲ改正シ大邱局ヨリ忠清北道、全州局ヨリ忠清南道ヲ分離シ之ヲ

漢城財務監督局ノ管轄トシ忠清南道公州府ニ公州財務監督支局ヲ設置シ  
タリ超エテ翌隆熙三年明治四十二年二月新ニ家屋稅法酒稅法及煙草稅法  
ヲ發布シ同年ヨリ之ヲ實施スルヤ定員ノ増加ヲ要スルト共ニ監督機關モ  
之ヲ整一ニシ益々監督ノ實效ヲ奏セシムルノ必要アリ同年三月財務監督  
局官制及財務署官制ヲ改正シ事務官以下ノ定員ヲ増加シ公州財務監督支  
局ヲ廢シ更ニ公州財務監督局ヲ設置セリ  
全州財務監督局ノ管轄區域ハ全羅南北ノ二道ニシテ其區域廣潤ニ失スル  
ノミナラス該二道内ニハ交通機關ノ設備ヲ缺ケルカ爲メ交通不便ニシテ  
監督上機宜ヲ失スルノ虞レアルヲ以テ全羅南道ヲ分離シ同道光州ニ新ニ  
光州財務監督局ヲ設置シ又漢城財務監督局管轄江原道内沿海ノ財務署ハ  
舟楫ノ便利上之ヲ元山財務監督局ノ管轄トスルヲ機宜ニ適スト認メ淮陽  
外七財務署ヲ漢城財務監督局ヨリ分離シ元山財務監督局ノ管轄トスルコ  
トトシ本年即チ隆熙四年明治四十三年一月財務監督局官制ヲ改正シ同月  
二十日ヨリ實施シ以テ今日ニ及ヘリ而シテ是等財務機關ニ配置ノ現在定  
員ヲ表示スレハ左ノ如シ

財務監督局及財務署定員表

局名	局			署		
	長	事務官	主事	計	財務官	主事
漢城	一	一	一	三	一	一
平壤	一	一	一	三	一	一
大邱	一	一	一	三	一	一
全州	一	一	一	三	一	一
元山	一	一	一	三	一	一
公州	一	一	一	三	一	一
光州	一	一	一	三	一	一
計	七	七	七	二一	七	七

備考 本表中△ノ符號アルハ韓人ノ定員ナリ

財務監督局及財務署ノ司掌事務ハ實ニ内國稅務ノ外地方ニ於ケル財務全

般ニ互レル即チ金融機關ノ監督、貨幣ノ整理、金融ノ調節、財源ノ涵養等苟モ地方ニ於ケル財務行政事項ハ總テ此ノ財務機關ノ管掌ニ屬セルヲ以テ其事務ノ廣汎ニシテ且多岐ナルハ言フ俟タサル所ナリ加之隆熙二年明治四十一年六月宮内府所屬ノ驛屯土及各宮庄土ノ國有ニ移屬セラルルヤ之カ管理及小作料徴收ノ事務亦財務機關ノ管掌ニ歸シ一層ノ繁多ヲ加ヘタリ徴税機關ノ組織及沿革ハ叙上ノ如クニシテ漸次機關ノ整理統一ヲ圖リ以テ徴税上ノ整備改善ヲ期シ主トシテ從來徴收ノ税目ニ附キ課税ノ基礎ヲ確實ニスルニ努メ國庫ノ歲入ヲシテ不整頓ノ弊ナカラシムルヲ目的トシ著々實效ヲ奏シツツアリ隨テ新ニ課税シ若ハ賦課率ヲ變更シ人民ノ負擔ヲ增加スルカ如キハ勉メテ之ヲ避ケタルノミナラス從來盛ニ行ハレタル無名ノ徴收ハ之ヲ嚴禁シ人民ヲシテ税法ニ明示セラレタル以外ノ負擔ヲ餘儀ナクセラルルカ如キ弊ナカラシメタリ

之ヲ要スルニ當國ノ民度ハ頗ル低ク經濟亦幼稚ナルヲ以テ新ニ課税シ若ハ賦課率ヲ改正スルカ如キ人民負擔ノ増加トナルヘキ税法ノ制定改廢ハ之ヲ財源涵養ノ後ニ待ツニアラサレハ容易ニ行ヒ難ク而シテ目下ノ現狀

ハ多年紛淆錯綜セル徴税機關ノ下ニ地方官吏ノ收歛誅求ノ利器タリシ税目ニ就キ課税ノ基礎ヲ明確ナラシメ課税ノ公平ヲ期スルニ在リトス

## 第二節 租 税

### 一 地 税

地税ハ本來土地ノ正供ニシテ田畑(番田)ニ限り結トテ制定シ定率ニ依リ之ヲ賦課ス故ニ又結税ト稱シ建物敷地、池沼、山林等ニ及ハサルモノトス

本税ノ起原ハ舊記ノ徵スヘキモノナク遼焉知ルヘカラスト雖モ李朝開國ノ初メニ結テ六等ニ分ケ凶歲ハ之ヲ九等トシ每結上二十斗(凡ソ日本榊一石)ヨリ遞減シテ下四斗マテノ等級ニ分ケテ賦課シ中葉之ヲ改訂シテ租税額ヲ増加シ每結田税トシテ四斗大同(全國ヲ通シテ附)トシテ十二斗三手(薩手吹波手ニシテ其給養ノ爲宮)トシテ二斗二升ヲ附加シ其山地ニアリテハ大豆、木中ヨリ特ニ附加スルモノ)綿、麻布ノ代納ヲ許セリ太皇帝即位ノ歲開國四百七十三年(元治元年)更ニ砲糧トシテ一斗三升三合ヲ増徴シ後開國五百三年(明治二十七年)物納ヲ改メテ金納ト爲シ每結三十兩ト定メ光武四年(明治三十三年)每結五十兩同六年每八十兩トシ結六等ノ内更ニ二十餘階級ニ分ケテ徴收セリ

現在結數ノ基本ハ三百餘年前ノ調査ニ係ハレリ當時每二十年一次ノ改量ヲ期シ一等ヨリ六等トシテ面積一萬平方尺ノ地ヲ以テ一等地トナシ之ニ課スルモノヲ一結ト云ヒ二等地ニアリテハ同面積ノ地ニ八十五貢ヲ課シ以下十五貢ノ差減ヲ以テ六等ニ及フ而シテ當時ノ總結數ハ百四拾五萬五千四百九拾八結アリタリトス爾後成川浦落覆沙、海濱水旱風霜雹蟲等ノ陳廢災減及還實陞總若ハ各宮附屬料園功臣ノ特別免稅等ノ異動アリテ光武九年明治三十八年十二月三十一日ノ現在ハ九拾九萬貳千六百參拾八結六拾貳貢貳束ナリシカ徵稅機關ノ整理統一セラルルヤ實地ノ調査帳簿ノ引繼等ニ依リ隱結ト稱シテ從來郡守郡吏等ノ私食シ國庫ノ收入トナラサルモノヲ檢舉シ之ヲ陞總シ正當ニ課稅シタルモノ約參萬結アリタルモ一方ニ於テ宮内府所有ニ係ル驛屯土ノ隆熙二年(明治四十一年)ニ至リ國有ニ移屬セラルルヤ之カ結數約四萬結ヲ課稅結數ヨリ控除セシカ爲隆熙三年(明治四十二年)七月一日ノ現在ハ九十八萬九千五百六十四結參拾貢六束六把ナリトス今道別ニ結數及稅額ヲ表示スレハ左ノ如シ

道	名	結	稅	額
京	缺	七二、三四五		五一、六四二
忠	清	八八、七九二		七〇、四五六
忠	清	四七、六三〇		三三、九四八
全	羅	一一九、五六九		一〇、三七七
全	羅	一〇五、一三七		一〇、三七七
慶	尙	一〇四、七二七		八二、六四八
慶	尙	一一九、七三三		七八、七六三
黃	海	八〇、三三一		八四、八八四
江	原	一一、七九九		六〇、八八〇
平	安	六六、一一三		一三五、六七六
平	安	三八、九三三		二五、九三三
咸	鏡	五九、八七三		一三六、六七一
咸	鏡	四三、四三七		一〇九、二六八
計	北	九八、九五六		六一、二八五
計	北	九八、九五六		六四、三三三

備考 本表結數及稅額ハ結及圓位未滿ノ箇數ヲ拾去セシヲ以テ合計ト符合セズ

地稅ハ前記ノ如ク開國五百三年(明治二十七年)金納トナシ光武四年(明治三十三年)及同六年ノ兩度ニ每結ノ稅額ヲ増加シ一結八拾兩以內トシ二十餘

階級ニ區分徴收セリ其後貨幣制度ノ改正アリテ五兩チ一元トシ計算セシ  
カ舊貨幣通用ノ地方ニ在リテハ依然兩ノ稱呼ヲ襲用セリ然ルニ光武九年  
(明治三十八年)ニ至リ光武五年(明治三十四年)制定ノ貨幣條例ヲ實施シテ更  
ニ二元チ一圓トナセシト雖之等充分ニ行ハレス依然舊來ノ例ニヨルモノ  
アリタルカ故ニ結價複雑ヲ極ムルニ至リ且ハ其ノ階級モ多キニ過ミタル  
ヲ以テ隆熙二年(明治四十一年)六月法律第十號ヲ發布シ結價ノ階級ヲ減少  
スルト共ニ元ヲ以テ定メタルモノハ一元ニ對シ金五拾錢兩ヲ以テ定メタ  
ルモノハ一兩ニ對シ金拾錢ノ比例ニ依リ換算シテ地稅ヲ徴收スルコトト  
ナシ八圓ヲ以テ上等結ノモノトナセリ其ノ舊結價及新結價ハ左ノ如シ

舊結貨

新結貨

一六〇〇〇  
一三、三三四  
一一、七三四  
一〇、六六六  
九、〇六六  
八、八九〇

四、二〇〇

八〇〇〇  
六、六〇〇  
五、三〇〇

八、五三四

八、〇〇〇

七、四六六

七、一〇〇

六、四〇〇

五、三三四

四、二六六

三、九三二

三、七三四

三、二〇〇

二、六六六

二、一三四

一、〇八〇

一、八六六

一、三三四

一、〇六六

五三四

地稅ハ租稅中ノ最重要ヲ占メ其稅額モ亦內國稅總額ノ八割ヲ占ムルカ故ニ之ヲ賦課徵收ニ關シテハ當局者ノ最モ注意苦心スル所ナリ然ルニ地稅ノ賦課方法タルヤ毎年各面長ノ作成シタル作伏帳ナルモノニ基キ其稅額ヲ決定ス而シテ田畝ヲ小作セシムル者ハ其稅金ヲ地主ヨリ徵收セシテ概ネ小作人ヨリ徵收スルノ慣習ナルヲ以テ年々小作人ノ交代少ナカラサル結果納稅義務者ノ異動頻繁ナルノミナラス面長ナル者ハ多クハ其地方ニ於ケル第二流以下ノ人物ナルヲ以テ往々地方勢力家ノ左右スル所トナリ作伏帳作成ノ際ニ在リテモ勢力家ノ請託ヲ容レ甲ニ賦課スヘキ額ヲ乙ニ負擔セシメ若ハ田畝ノ陳廢等ヲ理由トシ作伏帳ニ掲上セサル等諸種ノ奸惡手段行ハルルコトアルヲ以テ賦課額ハ連年多少ノ減少ヲ見サルコトナキ狀況ナリキ是レ田畝地籍ノ明確ナラサルカ爲ニ實地ノ調査ヲ遂ケテ作伏帳ト照合シ以テ非違ヲ是正スルノ途ナク一ニ面長ノ言ヲ信據スルノ外ナキニ因ル結果ナリト雖亦徵稅機關タル財務署ニ課稅ノ基礎トナルヘキ地稅臺帳ノ設備ナキニ職由セスンハアラス是レ斯稅ノ徵收ニ少ナカラサル煩累ト苦心トヲ要スル所以ナリトス爰ニ於テ乾隆二年明治四十一年

年七月ニ至リ度支部令ヲ以テ地稅徵收臺帳調製規程ヲ定メ財務署及面ニ地稅徵收臺帳ヲ調製セシメタルモ地稅徵收臺帳ハ各面ニ於ケル各地目ノ合計結數及其課稅額ニ過キサルヲ以テ未タ完全ト稱スヘカラサルカ故ニ一方ニハ各納稅者ヨリ面積結數等ノ申告ヲ爲サシメ該申告書ニ依リ結數連名簿ナルモノヲ作成シ以テ課稅ノ基礎ヲ確實ナラシムルニ努メタリ而シテ此結數連名簿ハ或一部ノ地方ヲ除クノ外殆ト完成シ地稅賦課ノ根基ハ今ヤ稍確實ナルノ現狀ニアリ

此ノ如クシテ現今ニ於ケル地稅ハ其基礎漸ク堅ク其徵收額モ比年増加スルノ傾向アリテ國家歲入ノ大部分ハ實ニ之ニ因ルト云フヲ得ヘシ面シテ民力尙ホ餘裕アリテ其附加稅タル地方費ヲモ優ニ納附シアルヲ見ルモ將來該稅ノ地方平穩ニ歸シ民力ノ増進ト共ニ益増加スルニ至ルハ明瞭ナリト云フヘキナリ尙ホ地稅ノ納期ハ從來明ニ規定セラル、アリト雖勵行セラレシテ之ヲ無視スルモノ多ク爲ニ何時ニテモ徵收スルコトトナリシ乾隆三年明治四十二年二月勅令ヲ以テ平安威鏡南北ノ四道ハ其年二月及十一月他ノ各道ハ其年十二月及翌年二月ヲ以テ其年度ノ納期ト定メ之

カ助行ヲ計リタリシカ未ダ充分ニ多年ノ弊習ノ矯正シ得サルモノブルハ遺憾トスル處ナリ

## 二 戸 税

戸税ハ開國當時ヨリ存在セルモノニシテ家屋税法ヲ施行セサル地方在郡ノ一戸ヲ構成スルモノニ賦課スル税法ナリ舊記ニヨレハ陸戸ノ軍丁ハ京ニ上番ス而シテ其郡ニ在ルモノヲ保軍ト稱シ布麻布木綿錢(金錢)ヲ上納シテ軍需ヲ補フ每丁布木ハ各一匹錢ハ貳兩ヲ上納セシメ之ヲ軍布ト稱ス甲子(元治)元年以後改メテ洞布ト稱セリ是レ蓋シ毎洞ヨリ徵收スルニ因ル本稅賦課ノ基礎タル戸數ハ到底之ヲ正確ニ知ルヲ得スト雖開國五百三年(明治)二十七年以前ニ於ケル各道保軍ノ所納額木二千三百三拾三同(二拾二匹、布五百五十二同七匹錢貳拾四萬八千參拾五兩ニ達セシカ同年之ヲ金納トシ毎戸上級四拾五錢ヨリ下級拾七錢六厘ヲ春秋二期ニ分テ納附セシメタリ光武十一年明治三十一年ニ至リ各戸毎參拾錢トシテ徵收スルコトナリシカ隆熙三年明治四十二年納期ヲ四月及九月ト改メ各期ニ其半ヲ徵收スルコトトナセリ而シテ課稅戸數毎年ノ異動ハ面長ノ報告ニ基キ地稅ト同

一ノ方法ヲ以テ加除セルヲ以テ其戸數ハ實數ニ遠ク隱漏戸數ノ夥多ナルヤ知ルヘキノミ蓋シ戸籍制度ナキ當時ノ國情ニ於テハ亦止ムヲ得サル所ナリ

光武十年(明治)三十九年五月警務顧問部ニ於テ調査シタル全國ノ總戸數ハ二百三十三萬餘戸ナリ然ルニ其前年ニ於ケル戸稅ノ課稅戸數ハ僅ニ七十四萬千餘戸此稅額貳拾貳萬餘圓ニ過キスシテ尙百餘萬戸ノ遁脫アルモノニ對シ直ニ課稅スルハ聊カ急激ニ失スルノ嫌アルヲ以テ漸次之ヲ整理シタリ而シテ隆熙三年(明治)四十二年十二月ノ現在課稅戸數ハ二百七萬餘戸ニシテ其稅額ハ六拾貳萬餘圓ニ及フ

## 三 家屋稅

家屋稅ハ從來戸稅ヲ徵收セサル漢城府各郡衙所在地等ノ市街地ニ對シ施行シ以テ地方ト市街地トニ於ケル賦課ノ公平ヲ期スルヲ目的トシ隆熙三年(明治)四十二年二月法律第二號ヲ以テ家屋稅法ヲ發布實施シタルニ始マル本稅ハ家屋每一構ニ付其廣狹ニ依リ一等ヨリ四等ニ分テ課稅ヲ異ニシ尙ホ家屋ノ構造ニ依リテ稅額ヲ異ニセリ即チ石造煉瓦造又ハ瓦葺ヲ以テ

甲種トシ其他ノ普通ノ民家ハ之ヲ乙種トシ其ノ廣サノ計算方法ハ從來ノ間(六尺半方トシテ)ナル名稱ヲ用ユルコト、セリ而シテ其納期ハ五月及十一月ノ二期ニ分テ四月現在ノ戸數ニ依リテ賦課スルコト、ナセリ

家屋稅ヲ施行スヘキ市街地ハ隆熙三年明治四十二年三月勅令ヲ以テ漢城府外二百七十八箇所ト定メタルモ稅法發布勿々ノ際ナリシヲ以テ施行地中ニハ間々市街地ト認メ難キ農村部落ヲ包含シ一方ニ於テハ市街地ニシテ施行地ナラザリシモノモアリタリ依テ本年四月之ニ追加及改正ヲナシ現今ノ施行地ハ漢城府外三百六十六箇所トナセリ

隆熙四年一月一日現在ノ全國課稅戶數及稅額ヲ示セハ左ノ如シ

課稅	家屋		稅		額
	種	計	甲	乙	
甲	種	計	種	種	計
一七、七〇六	一七、七〇六	一七、七〇六	三、八〇六	八、八〇六	一、一〇六

#### 四 酒稅及煙草稅

當國ノ租稅ハ皆古來ヨリ襲踏徵收シ來リタルモノニシテ總テ今日ノ所謂直接稅ノ性質ヲ帶ヒ間接稅ニ屬スルモノナシ其直接稅中ニ於テモ約六分

ノ五ハ地稅ナルカ故ニ當國ノ租稅額ハ殆ト地主即チ農民ノ負擔ナリト謂フモ不可ナキナリ斯ノ如キハ稅制統一上宜シキヲ得タルモノニアラサルヲ以テ租稅ノ負擔ニ偏重ナカラシメンニハ間接ニ消費者ノ負擔トナルモノヲ執ラサルヘカラス恰モ好シ酒及煙草ハ殆ト總テノ國民ニ依リテ使用セラレ居ルノミナラス其調査モ既ニ充分行ハレタルヲ以テ財源ヲ之ニ求メ同時ニ歲入ノ不足ヲ補充スルコト、ナセリ然レトモ間接稅ニ類スル租稅ハ當國ニ於テ創始ニ屬スルカ故ニ必ス之カ實施ハ困難ナルヘキヲ察シ尙ホ酒及煙草製造者ノ狀態ハ其多クハ自家用のノ幼稚ナルモノニシテ未ダ産業のニ發達セサルヲ以テ多額ノ課稅ハ到底其負擔ニ堪ヘサルヘキニ依リ極メテ稅率ヲ輕クシ課稅ノ傍ヲ斯業ノ改良發達ヲ促シ以テ財源ノ涵養ヲ圖リ主トシテ間接稅ノ基礎ヲ作ラレ隆熙三年明治四十二年二月酒稅法及煙草稅法ヲ發布施行セリ

一 酒稅 酒稅法ニ於テ酒類ト稱スルモノハ酒精ヲ含有スル強弱ト之カ製造方法ノ差異ニ依リテ釀成酒蒸餾酒及混成酒ノ三類ニ分テリ而シテ酒類ヲ製造セントスルモノハ其販賣用ナルト自家用ナルトナ間ハス製造所一

箇所毎ニ政府ノ免許ヲ受ケシムルコトトシ免許ヲ與ヘタルトキハ證票ヲ交付シ證票ハ製造場見易キ所ニ掲ケ置カシムルコトトセリ尙ホ酒類製造ノ免許ヲ受ケタル者ハ毎年十一月末日迄ニ翌年製造スヘキ酒類及造石數ヲ所轄財務署ニ申告セシム而シテ酒稅ハ酒類製造場一箇所毎ニ造石數ニ應シ五月及十一月ノ二期ニ分テ毎年納付セシムヘキモノニシテ前記第一類ニアリテハ稅額最モ少ナク第二類第三類ハ漸次多シトス

今本年一月一日現在ノ全國酒類製造場數及稅額ヲ示サハ左表ノ如シ

酒類製造場數				稅額			
第一類	第二類	第三類	計	第一類	第二類	第三類	計
一五八六	五〇六〇	四	二〇九〇	一〇九三	五〇六	八	一六〇七

二、煙草稅 煙草稅ハ之ヲ煙草耕作稅及煙草販賣稅ノ二種ニ區別シ煙草耕作者及煙草販賣者ニ課ス煙草耕作者ハ販賣ト自用トニ拘ラス耕作ヲ爲ス者ハ總テ政府ノ免許ヲ受ケシメ免許ヲ與ヘタル者ニハ證票ヲ交付ス

煙草耕作稅ハ植付根數九百以上、及以下トニ分テ稅額ヲ異ニシ前者ハ一箇年貳圓後者ハ五拾錢ヲ毎年十一月ニ於テ其年ノ稅額ヲ一時ニ徵收ス

今本年一月一日現在ノ全國煙草耕作者數及稅額ヲ示サハ左ノ如シ

煙草耕作者數			稅額		
第一種	第二種	計	第一種	第二種	計
二二五五	二八五	二五四〇	二二九三	四〇六	二七〇〇

煙草ノ販賣ヲ爲ス者ハ必ス政府ノ免許ヲ受ケシメ免許ヲ與ヘラレタル者ニハ證票ヲ交付ス證票ハ店前其他見易キ所ニ掲ケ置カシム

煙草販賣稅ハ卸賣ト小賣トニ區別シ前者ハ一箇年拾圓後者ハ貳圓トシ毎年一月其年ノ稅額ヲ一時ニ徵收ス

煙草販賣者數			稅額		
第一種	第二種	計	第一種	第二種	計
四八	一五〇八	一五五六	四八〇	四二九	九〇九

## 五 其他諸稅

一、鹽稅 製鹽ニ三種アリ土盆鐵釜重盆是レナリ從來ノ鹽稅ハ各大中小ノ差等アリテ其分等ニ依リ每壹圓ノ差ニシテ拾圓乃至壹圓ノ十等ニ分テ課

税セシモノナルカ光武十年(明治三十九年)十一月勅令ヲ以テ鹽稅規程ヲ制定シ製造斤量ノ多寡ニ依リ百斤ニ對シ六錢ノ率ヲ以テ賦課シ百斤未滿ノ端數ハ總テ百斤トシテ計算スルコト、セリ

本稅ハ開國當初ヨリ存在シ中葉ニ至リ均役廳ニ屬シ開國五百四年(明治二十八年)度支部ニ附屬シ光武五年(明治三十四年)又宮内府ニ移リ同八年(明治三十七年)再ヒ度支部ニ還付セラレタリ此稅法ニ依レハ鹽ノ製造ヲ爲サムトスル者ハ採鹹地方鹽田ノ面積等一定ノ事項ヲ記載シタル鹽製造免許申請書ヲ提出シテ免許ヲ受クヘク鹽稅ハ每三箇月ノ製造斤量ニ依リ四期ニ分テ納付スルモノトス

本稅一箇年ノ徵收額ハ約參萬圓ニ達ス

二、鹽稅 鹽稅トハ鹽區稅、鹽產稅及砂金採取稅ノ三者ヲ總稱シタルモノニシテ鹽區及鹽產稅ハ光武十年(明治三十九年)六月法律第三號鹽業稅法ニ依リテ賦課セリ

鹽區稅ハ鹽區一千坪毎ニ一箇年五拾錢ヲ課シ一千坪ニ滿タサル端數ハ一千坪トシテ計算ス但鹽業許可後滿一箇年間ノ鹽區稅ハ定率ノ半額トス

產稅ハ鹽物價格ノ百分ノ一トシテ砂金採取稅ハ採取許可區一千坪若ハ河床ノ延長毎一町ニ對シ一箇年金壹圓ヲ賦課シ一千坪未滿ハ一町、一町未滿ハ一町トシテ計算ス鹽區稅及砂金採取稅ハ毎年十二月中ニ翌年分ヲ前納セシメ鹽產稅ハ前年分ヲ毎年三月中ニ納付セシム

本年一月一日現在ノ鹽區許可人員ハ七百九十二人、鹽區數四百二十七坪、數十七萬八千六百三十四坪ニシテ砂金採取區數百三十七坪、數千百六十五萬八千坪、河床延長千八百二十町ナリ今國籍別ニ其許可人員等ヲ表示スレハ左ノ如シ

國籍別	鹽區		砂金採取區		延長町數
	許可人員	數	許可人員	數	
韓國人	二六八	二二	四八六	四	三三
日本國人	四六	二九	二九四六	二八	三三
其他ノ國人	三	三	七三三	一	一

三、人蔘稅 人蔘稅ハ隆熙二年(明治四十一年)七月法律第十五號人蔘稅法ニ依リ毎年收穫スヘキ蔘圃一間ニ對シ金拾錢ヲ人蔘耕作者ニ賦課ス但蔘苗

ノミヲ育成シ販賣スル者ニハ之ヲ課セサルモノトス人蔘ノ耕作ヲナス者ハ毎年蔘苗圃ノ位置間數成苗ヲ定植スヘキ蔘圃ノ位置間數及成苗ノ根數收穫スヘキ蔘圃ノ位置間數及人蔘ノ根數ヲ定メ政府ニ申告ヲ要ス政府ハ毎年收穫前ニ其ノ收穫スヘキ蔘圃ノ間數ヲ査定シ其ノ査定間數ニ依リテ課税ス而シテ納期ハ毎年十一月末日迄ナリトス

人蔘ニ對スル課税ハ古ヨリ行レシモノニシテ隆熙元年(明治四十年)十二月紅蔘專賣ノ收入ト共ニ宮内府ヨリ度支部ニ移屬セラレタルモノナリ蓋シ本税ハ紅蔘專賣法ト相待ツテ人蔘耕作ノ取締ヲ爲スニ在ルヲ以テ主トシテ人蔘ヲ耕作スル開墾地方即チ紅蔘專賣法第五條ニ依リ指定シタル特別耕作區域外ニ在ル人蔘ニ對シテ課スルモノトス

四 漁業税 本税ハ開國當初ヨリ存在シ中葉均役廳ヲ設ケテ所管セシメ開國五百四年(明治二十八年)度支部ニ附屬セシメ光武五年(明治三十四年)宮内府ニ移シ同八年(明治三十七年)再ヒ度支部ニ還付セラレタルモノナリ

從來本税ハ多クノ等級ニ分タレ徵收セラレシカ光武十年(明治三十九年)十二月水産税規則ヲ制定セラレ採收シタル水産物ノ賣買價格ニ依リ千分ノ

十ヲ課スルコトトセリ次テ隆熙三年(明治四十二年)三月法律第十號ヲ以テ漁業税法ヲ發布シ漁業税ハ漁業法ニ掲載シタル漁業種別ニ從ヒ毎年一定ノ税率ニ依リ徵收スルコトトシ水産税規則ハ之ヲ廢止セラレタリ

此漁業税ハ印紙收入ニシテ一定ノ納付書ニ收入印紙ヲ貼付シ免許狀許可狀又ハ鑑札ヲ交付シタル官廳ニ提出シ以テ納付ヲナスヘキ規定ナルヲ以テ一箇年ノ納税額ハ何程ナルヤ詳カサラサレトモ蓋シ拾萬圓以內ナルヘシ

五 船税 從來ニ於テハ船税ニ二種アリ一ハ光武三年(明治三十二年)七月勅令國內船税規則ニ依リ始メテ課税シタルモノト一ハ漁鹽養業者ノ使用船ニ對シ慣例ニ依リ徵收スルモノニシテ一時ハ兩者共ニ行ハレタリシカ徵税機關統一後ニ於テ後者ハ廢止セラレ專ラ國內船税規則ニ依リ課税シタリ然ルニ本年三月法律第一號ヲ以テ船舶法ヲ發布シ同年四月一日ヨリ同法ヲ實施スルヤ國內船税規則ハ之ヲ廢止セリ

船舶法ニ在リテハ船舶ヲ總噸數十噸又ハ積石數百石以上及以下トニ區別課税シ毎年十月其船籍港ヲ管轄スル税關ニ於テ之ヲ徵收スルコト、シ内

總噸數二十噸未滿又ハ積石數二百石未滿ノ船舶所有者ハ所轄財務署ニ申請シ船鑑札ノ交付ヲ受ケ其ノ船税ハ財務署ニ於テ之ヲ徴收スルコトトナレリ但總噸數五噸未滿又ハ積石數五十石未滿ノ帆船端舟其他之ニ準スヘキ小舟ハ本税ヲ課セサルナリ

## 六 徴收及其成績

徴税機關ノ統一セサル以前即チ郡守徴税時代ニ在リテハ外割ナルモノ行ハレタリ外割トハ郡守ニ對シ其徴收シタル税金ヲ國庫ニ納付スルニ先ダテ直接第三者ニ給付スヘキ度支部大臣ノ命令ヲ云フ此命令ハ之ヲ其ノ受クヘキ第三者ニ交付スルモノニシテ今此命令ヲ發スヘキ場合ハ通常左ノ如シ

一、國庫ニ一時借入金ノ必要アルトキ

二、地方官廳ノ經費ノ支出ヲ必要トスルトキ

三、商行爲上爲替送金ノ必要アル場合ニ於テ商人ヨリ之ヲ國庫ニ依頼シタルトキ

四、中央官廳ノ官吏地方出張ノ際旅費ノ必要アルトキ

右ノ外特別規程ニ依リ地方徴税金ニ對シ國庫ニ到ル里程及送納金額ニ應シ運搬費ヲ支給ス之ヲ駄價ト稱ス駄價ハ其現實ニ運搬セルト否トナ問ハス各郡ト國庫トノ距離ニ應シ限定セラル、力故ニ常ニ之ヲ送納金額中ヨリ控除シテ送納者ノ所得トナス是レ亦一種ノ外割ナリトス尙ホ外割制度ノ外差人ナルモノアリタリ差人トハ郡守力其徴收シタル税金ヲ國庫ニ納付スル以前ニ信用アル京城又ハ地方ノ商估ニ國庫納付ノ條件ヲ以テ税金ヲ貸付スルニ始マル而シテ右商估ハ之ヲ資金トシテ各地方ニ於テ商品ヲ買入レ京城ニ輸送販賣シ其代金ヨリ先ニ貸付セラレタル税金ヲ國庫ニ納付スルモノニシテ該商估ヲ普通差人ト稱ス

此外割制度ハ一般經濟事情未タ十分ニ發達セサル當國ニ於テハ第三者ヲシテ直接徴税事務ニ與ラシムルノ結果ヲ生シ其弊ヤ徴求ヲ下民ニ及ボシ不當ノ徴收ヲ敢行シテ更ニ怪ムナク又郡守等徴税ノ任ニ當ル者ハ常ニ私囊ヲ肥スニ汲々タルヲ以テ徴收シタル國庫金ノ多クハ駄價等ニ假託セラレテ彼等ノ私服スル所トナルノミナラス彼ノ差人制度ナルモノハ貨幣相場ノ高低商估ノ失敗等ニ依リ國庫ノ損失トナル場合少シトセス此ノ如キ

ハ當國財政ヲシテ紊亂甚ダシキニ至ラシメタル一大原因ナルヲ以テ光武八年明治三十七年十一月外割及差人ノ制ヲ嚴禁シ又賦價ニ關シテハ別ニ支給ノ規程ヲ定メテ從來ノ弊ヲ防止セリ翌光武九年(明治三十八年八月)歲入歳出處理順序ヲ實施スルヤ徴收金ハ總テ之ヲ金庫ニ納入スルノ外他ニ交付スルヲ得サルコトトシテ光武十年明治三十九年九月管稅官官制ヲ制定シ郡守ヲシテ徴稅ニ從事スルヲ得サシムルト共ニ同年十月勅令ヲ以テ租稅徴收規程ヲ發布シ徴稅ノ制度稍整頓シタリト雖多年ノ積弊ハ容易ニ芟除スルヲ得サリシカ日韓新協約締結ノ結果日本人官吏任命ノ端啓ケ次テ隆熙二年(明治四十一年)ニ至リ財務監督局及財務署官制ノ實施ニ及ヒ始メテ徴稅制度完備シ徴稅ノ成績亦大イニ面目ヲ改メタリ

隆熙三年明治四十二年二月法律第五號ヲ以テ國稅徴收法ヲ發布シ國稅ノ徴收ハ總テ本法律ニ依ラシメ國稅ノ滯納者ニ對シテハ一定ノ期間ヲ定メ督促書ヲ發シ指定期日內ニ納付セサルニ至リ始メテ財産ノ差押處分ニ著手スルコトト爲シ彼ノ郡守徴稅時代ニ於テ滯納者ニ對シ常ニ試ミラレタル笞杖刑ノ如キ未開時代ノ遺習ハ之ヲ嚴禁セリ

而シテ此國稅ノ徴收方法ハ鑛稅及漁業稅ヲ除クノ外面ニ於テ之ヲナシ面ニ對シテハ徴收稅金ノ百分ノ二ヲ徴收手數料トシテ交付スルコトトセリ由來當國ノ人民ハ納稅ノ觀念ニ乏シク且多年彼等ノ頭上ニ加ヘラレタル郡守等ノ壓抑ニ出テタル誅求ノ結果租稅ハ國家有用ノ經費ニ供セラレシ官吏ノ私消濫費ニ供セラル、モノト誤信スルニ至ラシメタリ從テ徴稅機關統一後ニ於テモ容易ニ彼等ノ疑惑ヲ氷解セシムルニ至ラス爲ニ納稅ノ成績ヲ好良ナラシムルニ就テハ當局者ノ苦心焦慮洵ニ尋常ナラザリシモノアリタリト雖モ今ヤ漸ク徴稅機關ノ整備ト相俟テ納稅義務ノ何タルヲ人民ヲシテ理解セシメタルニ因リ其成績大イニ好良ニ向ヒタリ左ニ光武十年度明治三十九年以降ノ收入額及隆熙三年度明治四十二年ニ於ケル調定額ニ對スル收入歩合ヲ表示セン

科 目	光武十年度 (明治三十九年)	隆熙元年度 (明治四十年)	隆熙二年度 (明治四十一年)	隆熙三年度 (明治四十二年)	同上調定額ニ對スル 收入歩合
地 稅	三九五、一五〇	六二五、四〇五	六四四、四七九	六四一、七五三	九三、五
戶 稅	二二、〇一〇	四三、九四〇	四六、一八九	六七、三八八	九二、五
家 屋 稅		四三、九四〇	四六、一八九	一一九、八四四	九六、八



#### 四 權利取得税

漢城府ニ限り課税ス其課率ハ土地家屋所有權取得税土地家屋ノ價格千分ノ四抵當權取得税債權金額千分ノ二

地方費賦課金ノ賦課徴收ハ國税ノ例ニ依リ財務署長ナシテ之ヲ行ハシムル規定ナルヲ以テ地稅附加税ハ各面長ナシテ地稅ト同時ニ之ヲ徴收セシメ市場稅ハ市場毎ニ市場管理者ナル者ヲ選任シ之ヲシテ開市日毎ニ其市場ニ於ケル貨物ノ放賣價格ヲ調査申告セシメ該申告ニ基キ市場管理者ニ納額告知書ヲ發シ徴收ス又屠獸稅ハ毎月ノ屠殺數ヲ營業者ヨリ申告セシメ該申告ニ基キ營業場所所在ノ面長ニ納額告知書ヲ發シ之ヲ徴收セシメ權利取得税ハ權利取得者ニ於テ土地家屋證明規則ニ依リ所有權又ハ抵當權ノ證明ヲ府尹ニ申請スル際豫メ土地家屋ノ價格又ハ債權金額ニ相當スル權利取得税ヲ財務署ニ納付セシム而シテ隆熙三年度明治四十二年ノ賦課金ハ同年十月ヨリ徴收ヲ開始セシナ以テ其稅額僅ニ六萬七千餘圓ニ過キサリシカ本年度ニ於ケル豫算ハ七拾貳萬壹千餘圓ニ達ス

### 第三節 諸收入

#### 一 印紙收入

國庫金ノ出納ヲ取扱フ金庫ノ設置充分ナラサル當國ニ於テハ小額ナル租稅及手數料ハ印紙ヲ以テ納入セシムルノ利便多キヲ認メ光武九年(明治三十八年)十一月勅令ヲ以テ政府ハ收入印紙ヲ製造シ或種ノ租稅及手數料ハ該印紙ヲ以テ納付セシムルコトヲ規定シ次々同年同月度支部令ヲ以テ收入印紙規程ヲ發布シ收入印紙ヲ以テ納付シ得ヘキ租稅及手數料ノ種類ヲ左ノ如ク定メタリ

#### 一 典當舖稅

#### 二 庖肆稅

#### 三 官設屠獸手數料

#### 四 家券手數料

翌光武十年(明治三十九年)二月土地家屋證明規程ノ實施ニ依リ土地家屋ノ證明ヲ請フ者ハ該規程ニ依リ收入印紙ヲ以テ手數料ヲ納付スルコト、ナリタル結果家券手數料ハ廢止トナリタリ又同年九月鑛業條例實施ト共ニ

鑛業者ノ或出願ノ手数料及同年十一月民事訴訟手数料規則ノ制定ニ伴ヒ民事訴訟ヲ提出スル者ノ手数料ハ孰レモ收入印紙ヲ以テ納付スルコト、ナリ其後隆熙三年(明治四十二年)二月酒稅法及煙草稅法ノ發布セラル、ヤ同法ニ依リ納入スル免許準牌料ヲ收入印紙ヲ以テ納付セシムルコト、セリ其他漁業稅船稅等モ亦收入印紙ヲ以テ納付シ得ルコト、セリ

收入印紙ノ種類ハ當初壹圓、五拾錢、拾錢、五錢ノ四種ナリシカ前記ノ如ク收入印紙ヲ以テ種々ノ租稅及手数料ヲ納付セシムルコト、爲シタル結果需用者益増加シ諸種ノ印紙ノ必要ヲ感シ光武十年(明治三十九年)十一月壹錢印紙ヲ同十一年(明治四十年)八月拾圓印紙五圓印紙ヲ、隆熙三年(明治四十二年)五月五厘印紙ヲ増加シ現時ハ八種トナリタリ

收入印紙ノ賣捌ハ光武九年(明治三十八年)十一月度支部令收入印紙賣下規程ニ依リ最初ハ原賣人ハ漢城府ニ若干人各道ニ一人宛テ設置スルノ規定ナリシカ交通機關ノ不備ナル當國ニ在リテハ印紙ノ供給上不便ナルヲ以テ分賣人ト共ニ原賣人モ之カ必要ニ應ジテ設置スルコト、改正セリ而シテ賣捌人ニ交付スル印紙ノ割引歩合ハ原賣人ニハ印紙額面ノ百分ノ七、分

賣人ニハ同百分ノ五ヲ控除セルモ經濟事情ノ發達セザル當國ニ在リテハ民間ノ金利高キカ爲メ比較的資金回轉ノ速カナラサル印紙ノ賣捌人ヲ希望スル者少ナク從テ印紙ノ供給全國ニ滿ツル能ハサルニ依リ光武十一年(明治四十年)四月割合歩合ヲ改正シ原賣人ニハ百分ノ十分賣人ニハ百分ノ七ヲ控除スルコト、セリ然レトモ尙賣捌人ヲ希望スル者少ナク需用者ノ不便ヲ遺憾トシ隆熙二年(明治四十一年)七月度支部令ヲ以テ財務署ニ於テ收入印紙ノ賣下ヲ爲サシメ次テ翌隆熙三年十一月度支部令ヲ以テ財務署ノ設置ナキ郡衙所在地ニハ郡衙ニ於テ收入印紙ノ賣下ヲ爲サシムルコト、セリ而シテ隆熙三年(明治四十二年)十二月三十一日現在ノ財務監督局別ノ原賣下人分賣下人等ノ印紙賣捌機關ハ左表ノ如シ

局名	原賣下人	分賣下人	財務署	郡	街
漢城	九	一六六	三四		一四
平壤	九	一一九	三三		一四
大邱	六	一〇五	一一		一
全州	二	七一	二八		九

元	公	州	山	計
八六	四三	二五	五二九	六
二二	二六	一六五	六	一四

次テ收入印紙ノ累年賣捌高ハ左表ノ如シ

年	度	賣	捌	印	紙	額	面	高
光武三十一年	度	七三	四五	〇				
明治三十九年	度	一六四	三八					
明治三十八年	度	一六〇	二二	九				
明治三十七年	度	三三	一	二				

## 二 其他收入

從來徴税機關ノ整頓セサル時代ニ於テハ租税外ノ諸收入モ亦租税ト均シク其收支紊亂ヲ極メ收入ハ國庫ノ歲入トナラス直ニ取扱官廳ノ經費ニ充當セラル、等其取扱モ各官廳區々ニ流レタルヲ以テ之カ統一ヲ謀ルト共ニ國庫ノ收入ヲ増進セムカ爲隆熙二年明治四十一年一月勅令ヲ以テ税外

諸收入收納取扱規程ヲ定メ租税外ノ收入金ハ特別ノ規程アルモノノ外總テ此規程ニ依ラシムルコト、セリ而シテ財務機關ノ取扱ニ係ル諸收入ノ主タルモノハ印紙收入ノ外驛屯賭收入、國有未墾地貸下料、未勘金整理收入ニシテ驛屯賭收入ハ別ニ述フヘキヲ以テ爰ニハ之ヲ省キ他ノ二收入ニ就キ聊カ述フル所アルヘシ

一、國有未墾地貸下料 國有未墾地貸下料ハ光武十一年明治四十年七月法律第四號ヲ以テ發布ニ係ル國有未墾地利用法ニ依リ國有未墾地ノ貸與ヲ受ケタル者ヨリ納入スル貸與料ニシテ隆熙元年明治四十年十二月農商工部大臣ノ協議ニ應シ財務機關ニ於テ徴收スルモノナリ本年一月一日現在ノ貸與許可人員ハ二百九十人、反別一萬千八百三十三町、筆數百六十五筆、貸與料五千九百拾六圓ニシテ其國籍別ノ許可人員等ヲ表示スレハ左ノ如シ

國	籍	別	許	可	人	員	反	別	筆	數	貸	與	料
韓	國	人				一七五			七八七四	九八		三九三七	
日	本	國	人			一一三			三九五九	六七		一九七九	

二、未勘金整理收入 國稅未勘金トハ郡守カ租税ノ徴收ヲ掌リシ當時郡守

其他ノ吏員等ノ欠通私消シタル國稅金ニシテ未タ國庫ニ納入ノ義務ヲ終ラサルモノヲ云フ之ニ就テハ往年屢々整理ヲ企畫セシト雖モ積年ノ情弊纏綿シテ一朝容易ニ解決ヲ見難ク整理事業モ幾度カ中途ニシテ挫折シ遂ニ其目的ヲ達セス特ニ開國五百三年明治二十七年官通吏通蕩減ノ特典アリシヲ以テ當國ノ官吏ハ欠通金ノ整理ハ云フヘクシテ到底行ヒ得ヘキモノニアラスト思惟シ官金ノ流用ヲ是レ事トシ其弊極マル所ヲ知ラス其結果ハ開國五百三年明治二十七年ヨリ隆熙元年明治四十年ニ至ル既往十三箇年間ニ於ケル欠通金額ハ概算參百八拾七萬餘圓ノ巨額ヲ算スルニ至レリ爰ニ於テカ度支部ハ財政改革ト共ニ之カ整理ニ著手シ諸種ノ文簿ニ依リ欠通額ヲ決定シ各財務監督局ヲシテ整理納入セシメツ、アリシカ欠通金ノ納入ヲ強制スルニハ一ニ之ヲ司法裁判所ニ訴求セサルヘカワス斯クテハ其手續煩雜ナルヲ以テ隆熙二年明治四十一年四月法律第十四號ヲ以テ國稅未勘金整理ニ關スル規定ヲ發布シ之ニ依リ整理ヲ遂行シ財務機關ヲシテ徵稅ニ當ラシメタリシカ今日迄ノ調査決定總額ハ參百貳拾萬圓ノ多キニ達セリ

## 第四章 關稅

### 第一節 條約

當國カ殆ント三百年ニ涉レル鎖國ノ主義ヲ脱却シテ通商條約ヲ結ビタルハ實ニ開國四百八十五年明治九年ノ日韓修好條規ヲ嚆矢トシ釜山港ノ外更ニ二箇所ノ海港ヲ開放スヘキコトヲ規定シタルニ始マル次テ開國四百九十一年明治十五年ニ米國ト條約ヲ結ビ翌開國四百九十二年明治十六年中日本人民貿易規則竝ニ海關稅目ヲ協定シテ船舶及貨物ニ關スル章程始メテ較ヤ詳ナルヲ得次テ英、獨、伊、佛、澳、清、白丁ノ諸國ト修好通商ヲ商議シ孰レモ現行ノモノニ係ル

### 第二節 開港

釜山ハ從來外國ニ對スル互市場タリシカ前記日韓間ノ條約ニ依リ更ニ開港ヲ約シタル結果元山竝ニ仁川ヲ以テ通商港トスルコト、シ前者ハ開國四百八十九年明治十三年後者ハ四百九十二年明治十六年ニ開キ次テ光武元年明治三十年甌南浦及木浦ヲ、光武三年明治三十二年群山、馬山浦及城津

ヲ開放シ隆熙二年明治四十一年ニハ北韓ニ於ケル物資ノ交通ニ資シ產業ノ進展ヲ促スノ目的ヲ以テ清津港ヲ開キ又新義州ニハ京義鐵道開通以來國境貿易ニ對シ光武十年明治三十九年稅關支署ヲ設置シ其他京城竝ニ平壤ニ於テハ主トシテ鐵道聯絡輸送及兩地ト開港間ニ回送スル貨物ノ取引ニ便テラシムル爲メ稅關出張所ヲ配置シ又鴨綠江口ノ通商ニ資スル爲龍岩浦ニ同シク稅關出張所ヲ配置シタリ

### 第三節 關稅制度

外國貿易ニ關スル法規ハ主トシテ條約竝ニ附屬章程ニ規定スルトコロニ依リ別ニ法規ノ存在スルモノナシ然ルニ爾來外國貿易ノ進展急ナルモノアリ從テ各種制度ノ改善ヲ施シタルモノ尠シトセス今其主要ナルモノヲ說述スレハ左ノ如シ

一、京義鐵道完成シタル後ハ釜山新義州間鐵道ニ依ル外國貨物ノ通過ヲ承認シ以テ貿易上ノ利便ヲ圖リタリ

二、清津港ヲ經テ間島及琿春地方ニ輸出入スル通過貨物ハ關稅ヲ免除スルコト、シ以テ北韓貿易ノ増進ヲ圖リタリ

三、輸入手數未濟貨物及輸出手數濟貨物ノ鐵道回送ヲ承認シ輸送上ノ利便ヲ圖リタリ

輸入貨物ノ保稅回送ハ光武十年明治三十九年京城ニ於ケル保稅市場及保稅倉庫ノ開設ニ依リ之カ端緒ヲ開キ次テ京城ニ於テハ光武十一年(明治四十年)總稅務司廳南大門出張所ヲ設置シ保稅貨物事務ヲ統一スルト共ニ總稅務司廳南大門出張所規則ヲ以テ開港經由輸出入貨物ノ回送手續ヲ定メ之ヲ實施セリ又之ト同時ニ日韓間鐵道聯絡貨物ニ對シテハ統監府鐵道管理局トノ間ニ特ニ簡便ナル回送手續ヲ協定シ先ツ南大門、大邱及仁川驛仕向ケノ貨物ニ之ヲ適用シ其後平壤、新義州及馬山驛仕向ケノ貨物ニ對シテモ亦之ヲ適用スルニ至リタリ次ニ平壤ニ於テハ光武十一年(明治四十年)保稅倉庫ヲ設置シ隆熙二年明治四十一年ニハ前記鐵道聯絡貨物ノ取扱ヲ開始セシカ隆熙三年(明治四十二年)鎮南浦稅關平壤出張所ヲ設置シ汎ク輸出入貨物ノ取扱ヲ開始シ順次回送貨物ノ範圍ヲ擴張スルコト、セリ

四、稅關事務ハ臨時ノ必要ニ迫マルコト多キヲ以テ休日其他規定ノ執務

時間以外ニ於テモ稅關ハ臨時開廳スルコト、シ以テ船舶及貿易業者ノ便益ヲ圖リタリ(光武三十年)

五稅關ノ指定シタル場所以外ニ於テモ貨物ノ派出檢査ヲ行フコト、ナシ一般貨主ノ便益ヲ圖リタリ(隆熙二年勅令第六十一號)

右派出檢査ニ關シテハ勅令發布前既ニ光武九年明治三十八年以來關釜聯絡船内ニ當時監吏ヲ派出シ旅客携帶品及新聞紙ノ二種ニ就テノ檢査ヲ實施シ來レリ

六保税倉庫ヲ設ケ低廉ナル敷料率ヲ以テ輸入手數未濟貨物ヲ保管シ且預證券ヲ發行シテ取引上ノ便宜ヲ圖リタリ

前述ノ如ク保税倉庫ハ光武十年明治三十九年十月京城南大門外ニ之ヲ建設シ保税倉庫假規則ヲ制定シタルヲ嚆矢トシ翌光武十一年明治四十年ニ至リ更ニ平壤大邱仁川釜山及鎮南浦ニ之ヲ設置シタリ

七稅關所屬上屋倉庫ノ外ニ外國貿易用上屋倉庫又ハ陸揚船積場ノ私設特許ノ制ヲ定メ以テ貿易上ノ利便ヲ増進シタリ(隆熙四年勅令第二十九號)

八稅關貨物取扱人ノ資格ヲ定メ從來ノ弊ヲ艾除シ貨物通關ノ敏速ヲ期シ貨主ノ利便ヲ圖リタリ(隆熙二年)

九金銀銅ノ鑛業ニ必要ナル機械器具等ノ輸入稅釐ニ金銀銅及鑛石ノ輸出稅ヲ免除シ斯業ノ發達ヲ圖リタリ(隆熙二年法律第二十一號)

十通商條約ニ依ル協定稅目ヲ對照查覈シテ比較稅率表及輸出入稅目類別表ヲ編纂シ輸出入稅率適用ノ統一ヲ期シタリ(光武十一年)

#### 第四節 關稅警察

關稅警察ハ從來殆ト其名ヲ存シテ實ヲ見ス環海到ル處密貿易行ハレ尙ホ國境豆滿鴨綠兩江ノ沿岸ニ在リテハ彼我往來頻繁ニシテ關稅ノ確保甚ダ困難ナリシヲ以テ漸次稅關吏ヲ増員シ樞要ノ地點ニ監視署ヲ設置シ若ハ監視船ヲ配置シテ之カ取締ニ努メタリ

次ヲ隆熙三年明治四十二年四月漁業法實施ニ伴ヒ年々清國沿岸ヨリ盛ニ侵來スル密漁船取締ノ勵行ヲ計畫シ同年十月從來ノ監視船ノ外ニ平安道及黃海道沿岸要所ニ石油發動機艇六隻ヲ配備シテ密漁船ノ掃蕩ニ努メ著々效果ヲ奏シツ、アリ



第五節 關稅官廳

關稅ノ機關ハ初メ外務衙門ノ管轄ニ屬シタリシカ開國五百四年(明治二十八年)衙門ヲ部ト改稱スルト共ニ度支部大臣ノ管轄ニ移リタリ爾後英人ブヲオン氏ノ總稅務司タルニ及ヒ度支部ヲ離レテ獨立シ中央機關ヲ京城ニ置キテ總稅務司廳ト稱シ地方ニ海關ヲ置キ稅務司ヲシテ事務ヲ司掌セシメタリ其後此事務ハ財政顧問ノ手ニ引繼カレシト雖總稅務司廳ノ名稱ハ尙ホ存シ隆熙二年(明治四十一年)一月各部官制改正ト共ニ廢セラレ關稅官署ハ新タニ度支部大臣管理ノ下ニ置カル、コトトナレリ

現今ノ配置左ノ如シ

仁川稅關

- 群山稅關支署
- 麻浦稅關監視署
- 龍塘浦稅關監視署
- 碧湖渡稅關監視署
- 仁川稅關南大門出張所

關稅局

釜山稅關

- 木浦稅關支署
- 城山浦稅關監視署
- 舊馬山稅關監視署
- 長承浦稅關監視署
- 統營稅關監視署
- 三千浦稅關監視署
- 多太浦稅關監視署
- 蔚山稅關監視署
- 浦項稅關監視署
- 馬山稅關支署

元山稅關

- 城津稅關支署
- 雄基稅關監視署
- 維基稅關監視署
- 新阿山出張所
- 清津稅關支署
- 會亭稅關監視署
- 慶興稅關監視署
- 新義州稅關支署
- 龍岩浦出張所
- 義州稅關監視署

鎮南浦稅關

- 鎮南浦稅關平壤出張所
- 望東浦稅關監視署
- 何日里浦稅關監視署
- 夢金浦稅關監視署

當國從來ノ關稅事務ハ專リ範ヲ清國ノ制度ニ採リタルカ爲外國貿易統計ノ如キモ其組織又之ト同一ニシテ一種特別ノ編成ニ係リ即チ商品ノ產地及運先ヲ示サスシテ單ニ韓國ニ輸入セル直接仕出地ト當國ヨリ輸出スル直接經由港ヲ掲クルニ止マレリ而シテ當國出入直航船舶ハ殆ト日本、清國露領沿海州トノ間ニ限ラレタルカ故ニ貿易統計ハ單ニ是等三國トノ輸出入ヲ示スニ止マリ事實歐米貨物ノ輸出入額尠カラサルニモ拘ハラス貿易表上其國別ヲ知悉スルヲ得サルカ如キ狀態ニ在リシヲ以テ隆熙元年明治四十年以降根本的ニ之カ組織ヲ改メ又輸出入貨物ノ統計ヲ詳密ナラシムル爲統計項目ヲ改定シタルカ本年ニ至リ更ニ精確ト迅速ヲ期センカ爲地方稅關ノ分掌ヲ關稅局ニ移シ「カード」式ヲ採用シテ中央ニ統一編製スルコト、シ貿易半月報貿易月別概表貿易月表貿易年表貿易彙報隔月發刊貿易要覽一箇年ノ狀況ヲ說明ス等ヲ調製シテ貿易狀態ヲ公ニ發表スルコト、ナセリ

## 第七節 關稅收入

關稅收入ハ當國外國貿易ノ發展ト終始シテ年々增收ヲ示セリ今既往十箇年ヲ比較スルニ左ノ如シ

年次	貿易總額	關稅收入額	貿易總額ト關稅收入額ノ百分比	關稅及雜收入
光武四年 (明治三十四年)	110,000,000 圓	1,000,000 圓	0.9%	2,000,000 圓
同 五 (明治三十五年)	115,000,000 圓	1,100,000 圓	0.95%	2,100,000 圓
同 六 (明治三十六年)	120,000,000 圓	1,200,000 圓	1.0%	2,200,000 圓
同 七 (明治三十七年)	125,000,000 圓	1,300,000 圓	1.04%	2,300,000 圓
同 八 (明治三十八年)	130,000,000 圓	1,400,000 圓	1.08%	2,400,000 圓
同 九 (明治三十九年)	135,000,000 圓	1,500,000 圓	1.11%	2,500,000 圓
同 十 (明治四十年)	140,000,000 圓	1,600,000 圓	1.14%	2,600,000 圓
同 十一 (明治四十一年)	145,000,000 圓	1,700,000 圓	1.17%	2,700,000 圓
同 十二 (明治四十二年)	150,000,000 圓	1,800,000 圓	1.20%	2,800,000 圓
同 十三 (明治四十三年)	155,000,000 圓	1,900,000 圓	1.23%	2,900,000 圓
同 十四 (明治四十四年)	160,000,000 圓	2,000,000 圓	1.25%	3,000,000 圓
同 十五 (明治四十五年)	165,000,000 圓	2,100,000 圓	1.27%	3,100,000 圓
同 十六 (明治四十六年)	170,000,000 圓	2,200,000 圓	1.30%	3,200,000 圓
同 十七 (明治四十七年)	175,000,000 圓	2,300,000 圓	1.32%	3,300,000 圓
同 十八 (明治四十八年)	180,000,000 圓	2,400,000 圓	1.33%	3,400,000 圓
同 十九 (明治四十九年)	185,000,000 圓	2,500,000 圓	1.35%	3,500,000 圓
同 二十 (明治五十年)	190,000,000 圓	2,600,000 圓	1.37%	3,600,000 圓
同 二十一 (明治五十一年)	195,000,000 圓	2,700,000 圓	1.39%	3,700,000 圓
同 二十二 (明治五十二年)	200,000,000 圓	2,800,000 圓	1.40%	3,800,000 圓

即チ關稅收入ノ平均率ハ總貿易額ニ比シ約五分五厘内外ニシテ一般貿易ノ進展ト共ニ收入亦著シク増加ヲ示セリ

## 第五章 紅蔘專賣

## 第一節 紅蔘專賣制度ノ經過

紅蔘專賣ニ關スル沿革ハ詳カナラスト雖既ニ百有餘年前ニ於テ政府ハ自ラ紅蔘ノ蒸造ヲ實施シタルヲ見ル其初メニ於テハ清國ニ派遣スル使節ノ人蔘ヲ携帶シ清廷ニ貢獻シ其殘餘ハ之ヲ販賣セリ是ヨリ當國人蔘ノ名聲漸ク顯ハレ紅蔘ハ全ク政府ノ製造ニ委シ之カ密造販賣ハ嚴禁セラレ其後光武三年(明治三十二年)ニ至リ紅蔘製造專賣權ハ宮内府ニ直屬シ爾來同府經理院ニ於テ專ラ之カ經營ヲ爲シ以テ帝室財産ノ一ト爲セシカ財政改革ノ際設立セラレタル帝室有及國有財産調查局ニ於テ調査ノ結果遂ニ隆熙元年(明治四十年)十二月勅令第三十五號ニ依リ蔘稅及專賣官蔘ノ事業收入ハ總テ國庫收入ト定メラレ之カ所管ヲ度支部ニ移屬スルコト、ナリタルヲ以テ翌隆熙二年(明治四十一年)一月一切ノ關係書類官有建物敷地及其前年ニ於ケル民間製造紅蔘ノ全部ヲ悉ク經理院ヨリ引繼テ受ケ茲ニ度支部ニ於テ紅蔘事業經營ノ端緒ヲ啓クニ至レリ

抑モ當國產人蔘ノ主タル需用地ハ清國ニシテ毎年製造ノ紅蔘ハ殆ト同國ニ輸出セラル而シテ當國產人蔘ノ清國ニ於ケル價格ハ比類ナキ高價ニシテ且幾十年間ノ久シキニ涉リ能ク其聲價ヲ維持セル原因ハ那邊ニ存スルヤ文記ノ徵スヘキモノナシト雖要スルニ宮内府ノ專賣制度其宜シキニ適シ需給ノ關係ニ注意シ一方耕作ヲ制限スルト同時ニ粗製濫造ノ弊ヲ防ミタルニ職由セスンハアラサルナリ然ルニ輓近制度ノ弛廢ハ是等財源ノ涵養ニ意ヲ用ユルコトナク只管收歛ノミナ事トシタルヲ以テ其間諸種ノ惡弊ヲ釀成シ加之病害類ニ蔓延セシノ結果蔘圃ハ日ヲ逐フテ荒廢スルノ慘狀ヲ呈スルニ至リ其他蔘賊ト稱スル十數人ノ匪徒ハ常ニ兇器ヲ持シ蔘圃ヲ徘徊シ蔘根ヲ掠奪スルモ之ヲ取締ルコト能ハサリキ爲ニ斯業ハ益衰微セントスルノ悲運ニ陥リタリ爰ニ於テカ之カ救済ハ實ニ焦眉ノ急務ニ屬シ政府ハ深ク劃策スル所ナカリヘカラス而シテ最良ノ救済方法トシテハ專賣制度ヲ實施シ諸種ノ弊害ヲ消除シ進ンテ學理ヲ應用シ實地ノ研究ヲ遂ケ以テ大イニ此財源ヲ培養スルニ在リ是レ紅蔘專賣法ヲ制定シタル所以ナリトス

紅蔘專賣法ハ隆熙二年明治四十一年七月法律第十四號ヲ以テ發布實施セラレタリ而シテ同法ノ要旨ハ紅蔘ノ製造ハ政府ノ專屬トシ紅蔘ハ政府又ハ政府ノ命ヲ受ケタル者ニアラサレハ之ヲ販賣又ハ輸出スルコトヲ得ス且人蔘ハ政府ノ免許ヲ受ケタル者ニアラサレハ之ヲ耕作スルコトヲ得ス而シテ此規定ニ違背スル者ハ拾圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處シ犯罪ニ係ル現品ハ之ヲ沒收スルノ制裁ヲ設ケタリ其他紅蔘製造ノ原料トナルヘキ水蔘ハ政府ニ沒收シ之ニ對シテハ賠償金ヲ交付スル等其主タルモノトス人蔘ノ主タル耕作地ハ開城ヲ中心トシ開城、長湍、豐德、金川、兎山、平山、瑞興、鳳山ノ八郡ニシテ該八郡ニ產スル人蔘ヲ普通開城人蔘ト稱ス政府ハ紅蔘製造ノ原料ニ充ツヘキ人蔘耕作地ヲ該八郡ニ限定シ之ヲ特別耕作地域トシテ指定セリ此ノ如クシテ紅蔘專賣ノ事業度支部ニ屬スルヤ事業施行ニ關スル諸般ノ調査準備ニ盡スモノ六個月紅蔘專賣法及其施行細則ノ發布ト同時ニ紅蔘專賣ニ關スル一切ノ事項ハ之ヲ司稅局ノ管掌トシ蔘政課ヲ設置シテ之ニ當ラシメ唯從來ノ例ニ依リテ此事業ハ原產地タル開城ニ於テ取扱ハシムルヲ便トシ蔘政課ハ之ヲ同地ニ分置シタリ

然リト雖蔘業事務ハ普通ノ行政事務ト全ク其趣ヲ異ニセルノミナラス其會計ヲ特別トスルノ必要アルヲ以テ獨立ノ一局トシテ事業ノ施設經營ニ當ラシムルヲ便宜ト認メ本年一月勅令第三號ヲ以テ蔘政局官制ヲ制定シ從來司稅局内ノ蔘政課ハ之ヲ廢シテ獨立ノ一局タル蔘政局ヲ置キ度支部大臣ノ管理ノ許ニ紅蔘專賣ノ管理及取締ニ關スル一切ノ事務ヲ掌ラシメタリ

## 第二節 蔘業ノ經營及施設

### 一 蔘圃ノ取締

專賣法ニ依ル人蔘特別耕作區域ハ京畿、黃海ノ二道八郡ニシテ蔘圃植付濟ノ間數約十五萬間ノ廣キニ亘リ而モ蔘圃ノ所在ハ點々散在セルカ故ニ其取締ハ最モ困難ナリ殊ニ人蔘ハ高價ナル農產物ナルヲ以テ冬期氷結ノ時ヲ除クノ外常ニ賊徒ノ窺フ所トナリテ從來盜難ノ害頗ル多シ故ニ其初メニアリテハ軍隊ヨリ蔘圃監視兵ヲ駐派シ又蔘圃主ヨリハ傭入番人ヲ付シ雙方ニ於テ監視シタル時代アリ以テ如何ニ當路者ハ之ヲ取締ニ苦心セシカヲ知ルニ足ラン今ヤ紅蔘ハ政府ノ專賣事業トシテ最モ有利ナルモノナ

レハ私力ニ製造スルコトヲ嚴禁セシニ依リテ利ヲ見ルニ敏ナル人民ノ密造密賣ヲナス者隨テ多ク故ニ之カ取締ニ關シテハ特ニ警務局内ニ監視部ヲ置キ部長以下監視員數名ヲ常置シ又一方ニ於テ内部警務局ニ交渉シ多數ノ警部巡查ヲ要所ニ配置シ常ニ警備ヲ監視セシメ相俟ツテ犯行ノ豫防及檢舉ニ努メ且探堀運搬製造等ノ取締ニ當ラシメタリ  
斯ノ如ク其用意ノ周到ナリシ結果幸ニシテ警備ノ被害ハ年々其數ヲ減シ今ヤ被害ノ頻繁ナリシ往年ニ比スレハ云フニ足ラス斯クシテ警備ノ取締ハ遺憾ナキ狀態ニ達セリ

## 二 病害ノ研究

人蔘耕作區域内ニ於ケル隆熙元年(明治四十年)以前六箇年間ノ人蔘生産ノ消長ヲ調査スルニ實ニ左表ノ如ク歲ヲ逐フテ衰態ノ狀況顯著ナリ

年 別	採掘間數	收納斤數	收納根數	一間當斤數	同上根數
光武十六年 (明治三十五年)	三三〇、二七	一三八、一三九	一、四二八、五四四	六、二七	六、五
同 (明治三十六年)	一五三、四八一	一〇〇、六〇四	一、〇〇〇、四七七	六、五五	六、五

## 備考

蔘圃ハ其廣サヲ示スニ間ヲ以ラス而シテ一間トハ日覆材料ノ大小長短アリテ一定セサルモ一間當リノ當初栽植根數ハ二十八本乃至三十二本ヲ通例トス

同 (明治三十七年)	同 (明治三十八年)	同 (明治三十九年)	同 (明治四十年)	同 (明治四十一年)	同 (明治四十二年)
三二八、四九八	一、九六、六〇〇	一、九一、七八三	一、九一、七八三	六、二七	六、〇
一一〇、七四三	四六、八二二	四八〇、八四三	四七三、四二二	三、八八	四、〇
五五、二七二	四三、一九	四七三、四二二	四七三、四二二	七、八〇	八、六
七五、三三四	三六、六八六	四七八、九九八	四七八、九九八	四、七四	六、四

右ノ如キハ是レ從來ノ制度其宜シキヲ得ス政府ハ耕作ノ改良獎勵等ニ就テ多クノ注意ヲ拂ハサリシコト又其一因ナリト雖其主タルモノハ近年人蔘ノ生存ヲ危クスル病害ノ著シク劇増シタルニ因ラズンハアラス  
抑モ人蔘ハ其栽培ノ期間五年乃至七八年ノ長期ニ涉リ其間克ク旱雨風雪ノ變異ヲ凌キ長年月ノ後初メテ收穫スルモノナルヲ以テ常ニ病蟲其他災害ノ豫防救済ノ途ヲ講セスシテ之ヲ自然ニ放任スルトキハ忽チ各種ノ病

害ヲ蒙リ多年ノ辛苦空シク水泡ニ歸スルコトアルハ敢テ怪ムニ足ラス專賣官蔘事業ノ度支部ニ移屬セラル、ヤ茲ニ見ル所アリ直ニ蔘圃ニ就キ

實地ヲ調査セシニ病害ニ罹ラサル麥圃ハ殆ト皆無ノ狀態ニシテ洵ニ寒心ニ堪ヘサルモノアリ故ニ當局者ハ其病源ヲ探究シ以テ豫防治療ノ方法ヲ講スルノ緊急ナルヲ認メ當該技術者ヲシテ之カ研究ニ從事セシムルト共ニ理學博士三宅驥一農商務省技師上田榮次郎ノ兩氏ニ病源及豫防治療法ノ研究ヲ囑託セリ兩氏ハ數回當國ニ出張シ實地ヲ觀察シ種々研究ノ結果略其病源ヲ究メ目下適當ノ豫防治法ヲ施行シツ、アルモ凡ソ農作物ノ病害豫防ハ官民戮力之ニ當ラサレハ其效ヲ奏シ難シ然ルニ農民ノ通弊トシテ徒ニ舊慣ヲ墨守シ改良進步ノ趨向ニ乏シク殊ニ目睹スヘカラサル細菌作用ニ基ク病害ノ如キハ容易ニ之ヲ理解スルノ能力ナキヲ以テ學理研究ノ結果ニ應シテ施設セムトスル適當ノ豫防治法モ未タ全般ノ麥圃ニ實行セラレサルハ遺憾トスル所ナリ

### 三 人蔘ノ耕作試驗

人蔘ハ當國古來最モ著名ナル農產品ノ一ニシテ其栽培法ハ他ノ百般ノ農耕ニ比シ遙ニ進歩セルノ現狀ニ在リ然ルニ輓近麥圃ノ病害歲々逐フテ益猖獗ヲ極メ耕作者ノ損害頗ル多大ニシテ倒産者相踵キ遂ニ人蔘耕作ヲ

以テ一種ノ投機的事業視スルニ至リ爲ニ年々產額減退シ其結果或ハ著名ナル此產業ヲ滅絶スルニ到ラムトスルノ虞ナシト云フヘカワス又其耕作ノ方法ハ敍上ノ如ク他ノ農耕ニ比シ出色アリト雖日本ニ於テハ四五年ニシテ收穫シ當國ニ比シ一年又ハ二年ノ歲月ヲ短縮セルニ見レハ以テ學フヘキノ點ナシトモ又近年米國ニ於テハ盛ニ之ヲ栽培シ大規模ニ耕作セリト聞ク亦以テ範ヲ取ルニ足ルモノアラン爰ニ於テ政府自ラ耕作ヲ試ムテ調査研究ヲ爲シ模範ヲ一般ニ示スハ最モ緊要ノ事ニ屬スルヲ以テ隆熙二年明治四十一年中先ツ小規模ノ試作圃ヲ設置シ選種播種肥料種類竝ニ病害豫防治法等ニ就キ二百有餘種ノ試驗ヲ實施シ其結果得ル所尠少ナラザリキ依テ隆熙三年明治四十二年ニ至リ開城附近ニヶ所ニ本圃約千間苗圃約五百間ノ試作ヲ爲シタリ其成績ハ未タ之ヲ發表スルノ時機ニ至ラザレトモ蓋シ耕作ノ改良病害ノ豫防等ニ關シ裨益スル所大ナルモノアルヘシ

### 四 人蔘耕作ノ獎勵

人蔘耕作ノ衰態ハ上來既ニ述フルカ如シ人蔘產額ノ減退ハ當ニ國庫ノ收入ヲ減スルノミナラス國家產業上多大ノ影響ヲ及ボスモノアルヲ以テ斯

業ノ保護獎勵ハ一日モ忽諸ニ附ス可カラス依テ一方ニ病害ノ豫防研究ヲ講スルト共ニ他方ニ耕作者ヲ激勵シ斯業ノ進歩改良ニ意ヲ注ガシメサルヘカヲサルヲ以テ隆熙二年明治四十一年九月度支部令ヲ以テ人蔘耕作者褒賞規程ヲ定メ耕作ノ成績良好ニシテ他ノ模範ト爲スニ足ル者ニ對シテハ耕作ノ成績及政府ニ收納シタル人蔘ノ品位數量等ノ優劣多寡ニ依リ褒賞ヲ授與スルコト、セリ然ルニ人蔘ノ耕作ハ之ヲ他ノ農耕ニ比シ巨額ノ資金ヲ要スルノミナラス其回收ニハ播種ヨリ收穫ニ至ル迄五年乃至七年ノ長年月ヲ要スルヲ以テ耕作者ハ勢ヒ資金ノ固定ニ窮セサルヲ得ス殊ニ近年蔘圃ノ病害劇甚ナルヨリ延ヒテ多數ノ倒産者ヲ續出シ蔘業者間ニ於ケル金融益逼迫ヲ告ケ遂ニ高利ヲ願ミス外國人ニ融通ヲ求ムル者アルノ狀況ナルヲ以テ耕作獎勵上之カ救済ノ途ヲ講セサルヘカラス依テ隆熙二年明治四十一年十月法律第二十五號ヲ以テ水蔘賠償金先交規程ヲ制定シ人蔘耕作者ニ對シ耕作資金ニ充當セシムル爲水蔘賠償金ノ前渡ヲ爲スコトヲ得セシメ以テ耕作者ヲシテ其職ニ安ンセシムルノ途ヲ開ケリ

### 第三節 紅蔘賣下ノ成績

隆熙元年度明治四十年ニ於テ開城蔘業者ノ製造シタル紅蔘本蔘一萬千八百四十五斤、尾蔘二千三百六十九斤ハ專賣官蔘ノ事業ト共ニ度支部所管ニ移屬セラレタルヲ以テ從來三井物産會社ヲシテ販賣事業ノ一切ヲ擔當セシメタル販賣ノ方法ヲ變更シ廣ク内外營業者ニ對シ指名競争入札ニ附シ最高入札者ニ賣下ヲ爲スノ方針ヲ執リ一般ニ公告シ買受希望者ノ内四名ヲ指名シ隆熙二年明治四十一年八月二十五日入札ヲ決行シ最高入札者清商同順泰ニ金五拾六萬壹千圓ニテ賣却セリ

隆熙三年度明治四十二年以以降製造ノ紅蔘ニ就テハ毎年之ヲ競争入札ニ附シ公賣スルハ蓋シ銀貨相場ノ昂低、製品需供ノ關係等ニ於テ却テ不利ナルヲ認メ同年度ヨリ同七年度明治四十六年迄五箇年間製造ノ紅蔘ハ一時ニ之ヲ指名競争入札ノ方法ニ依リ拂下クルコト、ナシ日本三井物産合名會社外一名ヲ指名シ隆熙三年明治四十二年七月二十三日入札ヲ決行シタルニ最高入札者三井物産合名會社ニ紅蔘各片級ヲ通シ毎斤八拾貳圓ノ價格ニテ賣下ノ契約ヲ締結セリ

紅蔘賣下ノ價格ハ宮内府經營時代ハ本蔘毎斤參拾圓以內ナリシカ度支部

所管ニ歸スルヤ敍上ノ如ク隆熙元年度明治四十年製品ハ一斤約五拾圓、同三年度明治四十二年以降ハ一斤八拾貳圓ノ未曾有ノ高價ニ賣下スルヲ得タルハ其賣下方法ノ公明ニシテ且一面ニ於テ販路ヲ調査シ廣ク賣下希望者間ノ競争ヲ誘致セシト、製品品質ノ優良ニ歸セシトニ因ラズンハアツス而シテ從來當國ニ於テ製造セラレタル紅蔘ハ專ラ清國ニ輸出セラル、モ未タ販路ニ就キ充分ナル調査ヲ遂ケシコトアツサルヲ以テ當局官吏ヲ芝罘大連天津北京漢口南京蘇州上海等ノ各地ニ派遣シ人蔘販路ノ狀況人蔘ノ市價人蔘ノ用途及使用方法、當國紅蔘ニ對抗セル滿州及米國產人蔘ノ賣行狀況其他ノ事項ニ就キ親シク調査セシメツ、アルヲ以テ將來蔘業政策上貢獻スル所尠少ニアラサルヲ信スルナリ

## 第六章 驛屯土

### 第一節 驛屯土ノ起原

本章ニ於テ驛屯土ト稱スルハ普通ノ驛屯土ノ外各宮庄土陵園墓附屬土地等ノ國有地ヲ包含セルモ國有地中ノ大部分ヲ占ムルモノハ驛屯土ナルト是等ノ土地ハ普通之ヲ驛屯土ナル名稱ノ下ニ概括セラルルヲ以テ茲ニハ普通ノ稱呼ニ從フコト、セリ

驛屯土トハ驛土及屯土ノ總稱ニシテ驛土トハ高麗朝ノ頃ヨリ公事上ノ文書遞傳ト公務ニ因リ旅行スル官吏ノ馬匹其他食料ヲ供給スルカ爲驛站ヲ設テ驛卒、驛馬ヲ配置シ之カ給養ニ充ツルノ目的ヲ以テ給付セラレタル田畝ヲ謂フ屯土トハ往昔邊塞荒地ニ於ケル戍卒ノ啖食セシモノ竝ニ中葉以降軍營以外中央各司及地方道郡ノ經費ヲ補フカ爲閑曠地ノ起墾、犯罪人所在地ノ沒收等ニ依リ設置シタル田畝ヲ謂フ而シテ是等ノ制ハ開國五百三年明治二十七年廢止セラレ爾來其土地ヲ人民ニ耕作セシメ之ヨリ小作料ヲ徵收スルコト、ナリ農商工部軍部宮内府ニ轉帳管理セラレタルモノナリ

リ又各宮庄土トハ一司七宮内需司及龍洞於義壽進明禮毓祥宣禮景祐ノ七宮所有ノ田番ニシテ陵園墓附屬土地トハ皇室ニ屬スル陵園墓ノ香資及管理人ノ衣食ニ供スルカ爲附屬セシメタル土地ヲ謂フ而シテ以上ノ土地ハ隆熙二年(明治四十一年)六月勅令第三十九號ヲ以テ宮内府所管及慶善宮所屬ノ不動產宮殿太廟ノ基址及本朝ノ陵墓園ノ内核字内ヲ除クノ一切國有ニ移屬セシメラルルト共ニ同勅令第四十號ヲ以テ驛屯土ハ度支部ニ於テ管理スヘキモノト規定セラレタリ

## 第二節 驛屯土ノ管理

前叙ノ如ク驛屯土ハ度支部ニ於テ之ヲ管理スヘキモノトナリタルヲ以テ從來小作ノ契約ハ含晉ト稱スル小作料徴收ノ事務ニ從事シタルモノノ任意締結變更シタル弊害ニ鑑ミ財務監督局長ヲシテ小作契約ノ當事者タラシメ小作期間ハ五年以内ニ於テ適宜之ヲ定メ滿期後之ヲ更新スルコトヲ得セシメ又從來小作人ト政府トノ中間ニ在リテ不當ノ利得ヲ占メタル元小作ヲ認メサルコト、シ一面ニ於テハ農事ノ改良發達ヲ企圖スルノ方針ヲ採リ之カ管理ニ關シテハ隆熙二年(明治四十一年)七月度支部令ヲ以テ驛

屯土管理規程ヲ制定シ小作契約ヲ締結シタル者ニハ財務監督局長ヨリ小作認許證ヲ交付シ其小作權ハ之ヲ本人ニ限り他ニ讓與スルヲ許サス且小作料ハ通常定額金納トシ土地ノ慣例ニ依リテ粳大豆粟ニ限り代納スルヲ得セシムルコト、シ天災ニ依リ收穫ナキ場合ハ五箇年以内ノ小作料ヲ免除スルコトヲ規定セリ尙ホ各宮庄土及其他ノ國有田番モ驛屯土ト同一ノ方法ヲ以テ管理スルヲ相當ト認メ同年十月度支部令ヲ以テ驛屯土以外ノ國有田番ノ管理ニ就テモ驛屯土管理規程ヲ準用スヘキ旨規定シタリ而シテ驛屯土ヲ耕作セシムル小作人ノ農事ノ改良發達ヲ計ルハ國庫收入ヲ増進スル上ニ就キ必要ナルヲ以テ政府ハ各地ニ國有地小作人組合ヲ設立セシメントシ模範定款ヲ頒布シテ成ルヘク組合ノ設立ヲ勸奨シ以テ農事ノ改良資金ノ融通生産物ノ委託販賣及勤儉貯蓄ノ美風ヲ養成セシムルコトニ努メ既ニ組合ノ設立ヲ認可シタルモノ二十一箇所ニ及ヒ尙今後續々設立セラレントス

以上ノ如ク農事ノ改良發達ヲ謀リ小作人ノ利益ノ増進ニ努ムルト共ニ小作人ニシテ組合定款又ハ小作契約ヲ遵守シ納期ヲ愆ワスシテ小作料ヲ完

納シ尙ホ農事ニ勤勉シ成績優等ナル者及國有地農事ノ改良又ハ小作料ノ徵收ニ關シ特ニ功勞アリト認ムル者ニ對シテハ之ニ相當ノ金品ヲ施賞シ一般小作人ノ模範タラシムルハ國有地ノ管理上最モ機宜ヲ得タル處置シ認メ本年五月度支部令ヲ以テ國有地小作人褒賞規程ヲ制定シ以テ驛屯土ノ管理上遺憾ナキ時期セリ

### 第三節 驛屯土小作料徵收ノ成績

驛屯土ノ小作料モ亦驛屯土ノ國有ニ移屬セラレタル結果當然國庫ノ收入ニ歸シタリ蓋シ國有移屬ノ發布セラルル前年即チ隆熙元年明治四十年十一月五日內閣總理大臣ノ上奏ニ依リ宮内府經理院收租官ノ廢止ト共ニ同年度ノ收租ハ之ヲ度支部ニ托スルコト、ナリタルヲ以テ同月二十日度支部訓令第十九號ヲ以テ驛屯土及各宮田番閭林租徵收內規ヲ定メ徵收ニ著手シタルモ元來驛屯土小作料ノ徵收ハ每年秋收ノ際之ニ著手シ遅クモ陰曆十二月申ニハ完了ノ慣例ナルヲ以テ前記ノ如ク十一月ニ至リ徵收ノ委託ヲ受ケタルハ時期稍遅レタルノ感アルモ一時ノ權宜方法トシテ從來ノ慣例ヲ踏襲シ經理院收租官ニ於テ使用セシ派員又ハ含蓄ナル者千三百四

人ニ收租事務ノ一部ヲ囑託シ稅務員ノ辭令及證票ヲ交付シ若干ノ月手當ヲ支給シ不當ノ徵收其他ノ不正行為ハ嚴ニ之ヲ戒飭シ徵收ニ從事セシメタリ此ノ如クシテ同年分ノ小作料ハ徵收ノ時期ヲ逸シ既ニ宮内府派員ノ徵收濟ニ係リタルモノアリタルト地方暴徒ノ尙ホ未タ鎮定セザリシ等諸種ノ障礙アリタルモ其小作料徵收額ハ實ニ金五拾四萬八千餘圓ニ達シ宮内府收租時代ニ於テ曾テ見サル所ノ良成績ヲ呈セリ而シテ該徵收金額ハ徵收ニ要シタル經費及帝室債務ノ支拂ヲ要スルモノ等ヲ控除シ金四拾五萬圓ヲ宮内府ヘ交付セリ

前述ノ如ク隆熙二年度明治四十一年以降ノ小作料ハ國庫ノ收入トナリタルニ依リ同年七月度支部訓令ヲ以テ驛屯土小作料徵收規程ヲ定メ國稅ト殆ト同一ノ手續ニ依リ各面ヲシテ徵收セシムルコト、シ面ニ對シテハ徵收費用トシテ徵收額百分ノ二ノ交付金ヲ支出セリ又驛屯土ノ地稅ハ宮内府ニ於テ管理セシ當時ニ在リテハ小作料ノ外別ニ小作人ヨリ之ヲ納付セシメシカ之ヲ小作料ニ包含セシメ徵收スルヲ便利且事理ニ適スルモノト認メ

隆熙二年明治四十一年七月度支部訓令ヲ以テ驛屯土其他ノ國有地ハ地稅

免除ノ旨發調セリ

驛屯土ノ面積ハ概算十萬三千七百七十九町步ニシテ韓國田畝總面積ノ約二十分ノ一ヲ占メ密ニ面積ノ尠大ナルノミナラス其所在ハ亦殆ト全國各郡ニ亘レリ隨テ之カ小作人モ各面各里ニ散在シ其數實ニ二十九萬八千餘人ノ多數ヲ算スルヲ以テ小作料徵收ノ難事タルヤ言ヲ俟タス且小作料ハ歲ノ豐凶ニ因リテ決定スルモノト否ラサルモノトノ別アリ其徵收ノ困難ハ他ノ租稅徵收ト同日ニ論スヘカラサルモノアルモ幸ニ隆熙二年度明治四十一年ニ於テ約七拾萬圓同三年度ニ於テハ百拾五萬六千餘圓ニ達シ非常ノ好成績ニシテ之ヲ元年度ニ比スレハ二年度ハ米價ノ下落及旱害ニ因リ收穫皆無ノ爲小作料徵收不能ノモノアリタルニ拘ハワス尙二割五分ヲ増加シ三年度ハ實ニ十割七分ノ増加歩合ヲ示セリ

#### 第四節 驛屯土ノ實測

驛屯土其他ノ國有地管理ニ關シテハ既ニ國有地臺帳ヲ調製シ略其基礎ヲ定メ小作料徵收上ニ於テモ亦大ナル支障ヲ見スト雖從來面積ノ稱呼ハ下落數又ハ日耕數ニ依リシヲ以テ國有地臺帳亦之ニ依リ其面積ヲ揭記セリ

而シテ其斗落數又ハ日耕數ハ廣狹一ナラサルカ爲確實ナル面積ヲ知ルニ由ナク從テ土地ノ欺隱冒耕アルモ之カ弊ヲ防止ズルヲ得サルノミナラス進ンテ農事ノ改良發達ヲ策セムトスルモ不便尠カラス又舊來ノ小作料ハ果シテ公平ヲ得タルモノナルヤ甚ダ疑ナキ能ハス故ニ是等ノ事項ヲ調査シ確實ナル管理ノ下ニ公平ナル收租ヲ爲サムトセハ勢ヒ國有地每筆ノ實地調査ヲ遂行セサルヘカラス之ヲ以テ隆熙三年明治四十二年六月以降約一箇年間ニ調査完了ノ計畫ヲ立テ之カ調査ニ著手スルコトセリ

國有地ノ實地調査ハ土地各筆ニ就キ其所在地番地目面積四標舊名稱實納小作料等級及詮定小作料小作人ノ住所氏名ヲ調査スルヲ以テ其目的トシ各財務監督局ヲ通シテ調査班六十ヲ置ク其調査班ハ日人主事一名韓人主事又ハ雇員一名測量技術ニ從事スル韓人技手一名ヲ以テ組織シ日人主事ハ班長トナリ主トシテ境界ノ査定小作料標準地ノ撰定等級小作料ノ詮定隠土ノ調査等技術以外ノ事務ニ從事シ韓人主事又ハ雇員ハ專ラ通譯ニ從事ス測量ハ每筆測板測量ヲ以テシ縮尺千二百分ノ一ヲ圖解法ニ依リ施行ス而シテ面積ハ求積器アラニメートルヲ用ヒ算出セシメタリ又調査班ノ

就業時間ハ一日十時間以上トシ一日ノ調査筆數ヲ三十筆以上トセリ  
國有地實地調査ノ著手ハ平壤財務監督局管内ノ隆熙三年明治四十二年六月十三日ヲ始メトシ最モ遅キハ全州財務監督局管内ノ同年八月六日トス而シテ各財務監督局ニ於ケル當初組織ノ班數ハ漢城八平壤十二大邱十四全州八元、公州十三ナリシカ全州局ハ隆熙三年十二月中公州局ハ本年六月中ニ外業務全部終了シ目下内業務ニ轉掌セリ今財務監督局別ニ本年六月一日現在ノ外業務調査済ノ功程ヲ表示スレハ左表ノ如シ

局	名	班數	府郡數	面數	筆調查數	濟調查數	未一日當調查筆數	從事日數	見隱面土發
漢	城	二五	三	五九	一七七一	一八〇六	六	一七九	四八二〇
平	壤	二六	四	五三	一三六〇	三九一〇	四	一七二〇	二〇三六
大	邱	二二	六	五二	二二六九	一〇〇〇	四	一七七一	四八八六
全	州	二二	六	二六	二九七三	二九九九	四	一七七八	二九八六
元	山	二二	三	二〇	四二五五	二九九九	二	一〇三八	七九六六
公	州	二二	三	六三	六六四三	六六四三	二	二〇三八	四一四八〇
光	州	二二	三	三〇	四〇九一	七九	二	四九六	二九八六

又同日マテニ於ケル内業務調査済ノ功程ヲ示サハ左表ノ如シ

局	名	郡數	筆確數	定面數	地積	臺帳記入済筆數	臺帳地圖筆數
漢	城	二五	四九一六	一一、五一六、二八一	四、九一六	三、四三七	三、四三七
平	壤	二五	八八九一	八、七六四、九九二	八、八九一	八、八九一	八、八九一
大	邱	二五	九九四二	三、四一七、六〇六	九九四二	九九四二	九九四二
全	州	二五	二九七九	二、七五四、六二二	二九七九	二九七九	二九七九
元	山	二五	二七五四	一、五八七、四五六	二、四九三	一、七四八	一、七四八
公	州	二五	六〇四九	三、四七二、六三九	六〇四九	六〇四九	六〇四九
光	州	二五	一九九一	七、八五三、七二〇	二九八六七	二六、一三九	二六、一三九
計			三三、一〇二	二〇五、六三九、一一一	三三、一〇二	三三、一〇二	三三、一〇二

備考

確定地ノ面積二億五百六十一萬三千九百二十一坪ヲ反別ニ換算スレハ六萬八千五百三十七町九反七畝十一歩トナル  
内外事業トモ本年八月中ニハ完了ノ計畫ナルヲ以テ完了ノ上ハ精確ナル

國有地ノ面積ヲ知リ得ルト共ニ小作料ノ公平ヲ期スヘク爰ニ於テ初メテ管理上遺算ナルヘク隨テ國庫ノ收入モ亦確實ナルヲ得ヘキヤ必セリ

## 第七章 會計検査

### 第一節 沿革

古來當國ニ於テハ一國ノ會計事務ヲ検査監督スヘキ獨立官廳ヲ缺キタリシカ光武九年明治三十八年二月勅令第十九號ヲ以テ度支部官制ヲ改正シ司計局ニ於テ諸經費決算ノ審査ニ關スル事項ヲ分掌シ同局ニ監査課ヲ置キ各廳ノ經費ニ關スル證憑書類ヲ調査スルコト、ナセリ是レ實ニ當國ニ於ケル會計検査ニ關スル規定ノ濫觴ナリトス次ニ光武十年(明治三十九年)三月勅令第十一號ヲ以テ度支部官制ヲ改正シ検査局ヲ獨立シタル一局トシテ設置シ其管掌事務ヲ定ム即チ左ノ如シ

#### 一、總決算ノ検査ニ關スル事項

二、各官廳及各官立諸營造ノ收支及官有物決算ノ検査ニ關スル事項

三、政府ニ於テ補助金又ハ特約保證ヲ與フル團體其他諸營造ノ收支決算

ノ検査ニ關スル事項

四、歳入徴收官吏、收入官吏其他出納官吏ニ對スル検査監督及其責任ノ審

## 判ニ關スル事項

五、國庫會計上ニ關スル一切ノ訴願ノ審判ニ關スル事項

六、前兩項審判ノ執行及其執行ニ必要ナル處分ニ關スル事項

次テ光武十年明治三十九年四月度支部分課規程ヲ制定シ検査局ニ中央檢

査課、地方検査課、審理課ヲ置キ事務ヲ分掌セシメタリ而シテ職員ハ局長一

人、課長三人、主事六人ニシテ財政顧問部員一人、其事務ヲ監督スルコト、ナ

レリ

次テ隆熙元年(明治四十年)十二月勅令第六十八號ヲ以テ會計検査局官制ノ制定セラル、ヤ之ニ依リテ當國會計監査事務ハ初メテ獨立シタル一官廳ニ依リテ執行セラル、コト、ナレリ即チ會計検査局ハ度支部大臣ノ管理ニ屬シ官金ノ收支、官有物及國債ニ關スル會計ヲ監督スヘキ職權ヲ有スルコト、ナレリ而シテ左ノ事項ハ必ス會計検査局ノ検査ヲ要スヘキコト、セラレタリ

## 一、總決算

一、各官廳及諸營造ノ收支及官有物ニ關スル決算

## 三、政府ヨリ補助金又ハ特約保證ヲ與フル團體及諸營造ノ收支決算

尙ホ之カ組織ハ長官一人、度支部次官兼任次長專任一人(韓人)検査官專任二人、主事專任十人ヲ以テス之ヲ從來ノ官制ニ比スレハ其初ハ検査局ハ度支部ノ一局タリシヲ以テ検査事務モ度支部大臣ノ名ニ於テ執行セルモノナリシカ本官制ニ於テ検査事務ハ専ラ長官ノ決スル所トナレリ是レ從來ノ官制ヨリ著シク進歩發達シタル點ナリトス

隆熙二年(明治四十一年)三月該局ノ分課規程ヲ制定シ庶務課、検査課ノ二課ヲ設置シ又検査事務規程、行務年度規程、行務監査規程等ヲ改正セリ

隆熙三年(明治四十二年)二月勅令第十一號ヲ以テ官制ヲ改正シ検査官一人

(日人)副検査官三人(韓人二人)主事十人(日人五人)ヲ増員セリ

次テ本年(明治四十三年)一月勅令第六十六號ヲ以テ官制ヲ改正シ全國地方

費ニ屬スル收支及官有物ニ關スル決算ヲ検査スルコト、ナリタルヲ以テ

茲ニ初メテ會計事務ノ監督指導ヲ完全ニ執行シ得ルノ端緒ヲ啓クニ到レ

## 第二節 事務成績

# 概説

會計検査事務ハ前項沿革中ニ述ヘタルカ如ク既ニ光武九年明治三十八年ヨリ開始セラレタリト雖隆熙元年明治四十年十二月ノ官制發布前ニ於テハ名實是ニ伴ハス即チ同年十二月ノ新官制發布前ニ於テ提出セラレシ書類ハ僅ニ計算書二百五十五冊證憑書類二萬五千餘枚ニシテ其書類ハ形式編纂等頗ル亂雜チ極メ殆ト證憑書類トシテ觀ルヘカラサルモノ多キノ狀態ニ在リタルヲ以テ新官制發布後直チニ執務上須要ナル各種ノ規程ヲ改正制定スルト同時ニ各官廳ニ對シ證明書類ノ提出ヲ促シ併セテ書類整理上ノ注意ヲ與ヘ提出書類ノ検査ヲ執行スルト共ニ一面吏員チ各地ニ派遣シ實地検査ヲ爲サシメタル等種々其事務上ニ努メタルノ結果歲々遂フテ好良ナル成績ヲ舉クルニ至レリ以下項チ分チ之ヲ説述セントス

## 二 書類検査

前述ノ如ク新官制發布當時ニ於ケル證憑書類ノ提出ハ其數多カラサリシモ隆熙二年明治四十一年ノ終ニ於テハ計算書千九百餘冊證憑書二十九萬二千餘枚ヲ算スルニ至レリ然レトモ其主タルモノニ關スル證憑書類ニシ

テ歲入ニ關スルモノハ僅ニ千餘枚ニ過キス依テ嚴ニ其提出ヲ促シタルノ結果翌三年明治四十二年ニ於テハ七十五萬餘枚ノ提出セラル、アリ支出ニ關スルモノ、外歲入物品歲入歳出外現金ニ關スル證憑書類モ漸次其數増加スルニ至レリ本年度ニ於テハ一月ヨリ六月ニ至ル迄既ニ約七十萬枚ニ及ヒ検査局開設以來今日迄ノ計百八十三萬餘枚ノ多數ニ上レリ而シテ該局ニ於テ既ニ検査ナリシタルモノハ隆熙二年明治四十一年約十三萬枚、同三年明治四十二年約四十四萬枚本年一月ヨリ六月迄五十九萬餘枚合計約百二十萬枚ニシテ提出書類ノ三分ノ二以上ニ達セリ検査中推問シタル件數ハ隆熙二年明治四十一年ニ於テ四百六十七件、同三年明治四十二年ニ於テ千九百五十三件、本年六月迄千百十七件ノ多キニ達セリ

## 三 實地検査

當國今日ノ如キ經理思想幼稚ナル時代ニ於テハ會計ニ從事スル職員ヲ監督スルト同時ニ指導ヲ爲スハ最モ必要ナルコト、認メ其實績ヲ舉ゲンニハ實地検査ニ若カサルヲ以テ検査局ニ於テハ隆熙元年明治四十年ノ新官制發布以來專ラ此方針ニ依リ職員ノ數少キニモ拘ラス年々實地検査ニ力

ヲ用ヒタリ今試ニ實地検査ヲ爲シタル廳數ヲ掲クレハ隆熙二年(明治四十一年)ニ於テハ九十箇所同三年(明治四十二年)ニ於テハ百八十六箇所本年六月ニ至ル迄ノ分八十四箇所ナリ

## 第三節 會計検査ノ狀況

## 一 歳入

政府ノ會計實際ノ證明ハ光武十年(明治三十九年)十二月頒布セツレタル收入支出證明規則ニ依リテ同年度ヨリ之ヲ爲スヘキモノタルニ拘ハラシ隆熙二年(明治四十一年)ニ至ルモ之カ證明ヲ爲シタルモノ始トアツシテ同三年(明治四十二年)ニ至リ漸ク收支ノ證明ヲ爲スニ至リタルカ其數未ダ多カラザリキ即チ之ヲ數次ノ實地検査ニ徵スルニ隆熙二年(明治四十一年)ニ於テハ税關、財務署ノ如キ徵收ヲ本務トスル官廳ニハ手續帳簿證憑書類等略整理シアリタルモ其他ノ官廳ニ於ケル徵收事務ハ極メテ幼稚ナルモノニシテ整理ノ緒ニ就カサルモノ多ク從テ帳簿書類ノ不完全ナルハ勿論存在セサルモノモ尠カラザリシカ同三年(明治四十二年)ニ至リテハ多少不完全ナル點ヲ除キ手續帳簿等設備セサルモノ無キニ至リ頗ル面目ヲ改メタ

リ敘上ノ狀態ナルヲ以テ規定ノ如ク光武十年度(明治三十九年)ヨリ之カ證明ヲナスハ到底不可能ト認メタルヲ以テ隆熙二年度(明治四十一年)ヨリ正確ニ證明ナスヘキ旨各廳ニ通牒シ且ハ嚴ニ其提出ヲ促シタルニ其効果著々顯ハレ爾今正確ニ之カ證明ヲ爲スモノ漸次増加スルニ至レリ

## 二 歳出

歳出モ亦歳入ト同シク光武十年度(明治三十九年)ヨリ證明ヲ爲スヘキ規定ナルモ隆熙元年(明治四十年)迄ニ證明シタルモノハ極メテ少數ナリシカ同二年(明治四十一年)ニ二十九萬二千餘枚同三年(明治四十二年)ニ六十七萬五千餘枚本年(明治四十一年)ヨリ六月迄ニ於テ既ニ五十三萬四千餘枚ノ提出ヲ見ルニ至レリ而シテ其内容ヲ觀ルニ隆熙二年度(明治四十一年)迄ハ各廳概ネ完全ナル帳簿ノ設備アルナク證憑書類ノ不備又ハ實質不法不當ノ支出ト認ムヘキモノ其數尠カラス特ニ道府郡ノ如キハ此事務ニ關シ頗ル幼稚ナルノミナラス且韓國舊時ノ惡習尙ホ存スルアリ地方官廳ニ屬スル特別財産ノ如キモノ、收入ヲ豫算外ニ支出シタルモノ尠カラス又豫算經費ノ使

用方ニ於テモ豫算ハ總テ拂切ノ如ク即チ決算ノ如キ觀アリテ事實ト認メ難キモノ夥カラシシカ隆熙三年度明治四十二年以降ニ於テハ大イニ改善セラレ帳簿證憑書類等形式ニ屬スルモノモ頗ル進歩シ實質ニ於テモ漸次弊害ヲ矯正シテ大ニ面目ヲ改ムルニ至レリ然レトモ尙ホ非違ノ行為ヲ爲スモノ往々出現スルハ大イニ遺憾トスル所ナルヲ以テ検査監督ヲ益嚴ニ施行スルコト、ナセリ

### 三 物品

物品會計規則ハ光武九年(明治三十八年)七月物品出納證明規則ハ同十年(明治三十九年)十二月之カ發布ヲ見前者ハ即日後者ハ同年度ヨリ施行ノ規定タルニ拘ラス隆熙二年(明治四十一年)迄ハ勵行セラル、ニ至ラス延ビテ之カ證明ヲ爲シタルモノ皆無ノ狀態ナリ然レトモ隆熙二年(明治四十一年)以降數次ノ實地検査ニ依リ其實況ヲ觀察シタルニ從來當局者ハ之カ整理ヲ等閑ニ付シタルカ如シ即チ光武十一年兩年度ノ如キハ全ク暗黒ニシテ帳簿書類ナキヲ以テ概ネ現品ハ勿論其出納ヲ知ルコトヲ得サルカ如キ狀

態ナルニ依リ嚴ニ其整理ヲ促シタルニ其後各廳トモ漸次整理ニ著手シ現今ニ於テハ概ネ帳簿書類ヲ備ヘ大イニ面目ヲ改メ其整理ノ觀ルヘキモノアリト雖大體ニ於テ未タ以テ完全ナリト云フ能ハス右ノ如キ狀態ナルヲ以テ到底規定ノ如ク光武十年度明治三十九年ヨリ證明シ能ハサルモノト認メタルニ由リ隆熙二年度(明治四十一年)ヨリ正確ニ證明スヘキ旨ヲ各廳ニ通牒シ且整理ヲ促シ之ニ依リテ検査ヲ施行スルコト、ナセリ

### 四 歳入歳出外現金

各種ノ保證金拾得金刑事被告人ノ所持金等政府ノ保管ニ屬スルモノ、出納ニ關シテハ當國ニ未タ其規定ヲ見スト雖モ之カ整理ヲ等閑ニ付スヘキモノニアラサルハ言ヲ俟タス然ルニ隆熙二年明治四十二年迄ハ各廳孰レモ漠然ト只從來ノ慣例ニ由リ會計掛ニ於テ之ヲ處理シ來リタリ從テ帳簿證憑書類等モ存スルアリ存セサルアリ或ハ記帳シ或ハ記帳セス頗ル幼稚ナルモノナリシカ實地検査ノ際ヨリ之カ注意ヲナシ指導ニ務メタルヲ以テ漸次整理ニ著手シ現今ニ至リテハ帳簿書類等ヲ設備シ出納ヲ明ニシ大ニ

用方ニ於テモ豫算ハ總テ拂切ノ如ク即チ決算ノ如キ觀アリテ事實ト認メ難キモノ尠カラサシカ隆熙三年度明治四十二年以降ニ於テハ大イニ改善セラルレ帳簿證憑書類等形式ニ屬スルモノモ頗ル進歩シ實質ニ於テモ漸次弊害ヲ矯正シテ大ニ面目ヲ改ムルニ至レリ然レトモ尙ホ非違ノ行為ヲ爲スモノ往々出現スルハ大イニ遺憾トスル所ナルヲ以テ検査監督ヲ益嚴ニ施行スルコト、ナセリ

### 三 物品

物品會計規則ハ光武九年(明治三十八年)七月物品出納證明規則ハ同十年明治三十九年十二月之カ發布ヲ見前者ハ即日後者ハ同年度ヨリ施行ノ規定タルニ拘ラス隆熙二年明治四十一年迄ハ勵行セラル、ニ至ラス延ビテ之カ證明ヲ爲シタルモノ皆無ノ狀態ナリキ然レトモ隆熙二年(明治四十一年)以降數次ノ實地検査ニ依リ其實況ヲ觀察シタルニ從來當局者ハ之カ整理ヲ等閑ニ付シタルカ如シ即チ光武十、十一兩年度ノ如キハ全ク暗黒ニシテ帳簿書類ナキヲ以テ概ネ現品ハ勿論其出納ヲ知ルコトヲ得サルカ如キ狀

態ナルニ依リ嚴ニ其整理ヲ促シタルニ其後各廳トモ漸次整理ニ著手シ現今ニ於テハ概ネ帳簿書類ヲ備ヘ大イニ面目ヲ改メ其整理ノ觀ルヘキモノアリト雖大體ニ於テ未タ以テ完全ナリト云フ能ハス右ノ如キ狀態ナルヲ以テ到底規定ノ如ク光武十年度明治三十九年ヨリ證明シ能ハサルモノト認メタルニ由リ隆熙二年度明治四十一年ヨリ正確ニ證明スヘキ旨ヲ各廳ニ通牒シ且整理ヲ促シ之ニ依リテ検査ヲ施行スルコト、ナセリ

### 四 歳入歳出外現金

各種ノ保證金拾得金刑事被告人ノ所持金等政府ノ保管ニ屬スルモノ、出納ニ關シテハ當國ニ未ダ其規定ヲ見スト雖モ之カ整理ヲ等閑ニ付スヘキモノニアラサルハ言テ俟タス然ルニ隆熙二年明治四十二年迄ハ各廳孰レモ漠然ト只從來ノ慣例ニ由リ會計掛ニ於テ之ヲ處理シ來リタリ從テ帳簿證憑書類等モ存スルアリ存セサルアリ或ハ記帳シ或ハ記帳セス頗ル幼稚ナルモノナリシカ實地検査ノ際ヨリ之カ注意ヲナシ指導ニ務メタルヲ以テ漸次整理ニ著手シ現今ニ至リテハ帳簿書類等ヲ設備シ出納ヲ明ニシ大ニ

改善ノ實ヲ舉ゲタリ而シテ證明ヲ施行スヘキモノモ漸ク増加スルニ至レリ

### 五 國有財産

國有財産ノ管理ニ關シテハ既ニ光武十年明治三十九年七月勅令第三十二號ヲ以テ國有財産管理規程ヲ發布シアリト雖モ從來之カ整理ヲ爲サ、リシニ昨年度ヨリ漸次之カ整理ニ著手シ現今ニ於テハ其歩ヲ進メ各廳ニ屬スル土地家屋ノ如キ其大部分ハ判明スルニ至リタリ然レトモ未ダ以テ完美ノ域ニ至リタリト云フヲ得サルヲ以テ尙ホ之カ整理ヲ促セリ

### 六 地方費

地方費ハ隆熙三年(明治四十二年)後半期ヨリ地方公共事業ノ爲メニ徴セシモノニシテ之カ收支ノ監査ニモ亦特別ノ注意ヲ要スヘキヲ以テ本年一月勅令第六十六號ヲ以テ實地檢査ニ依リ檢査スルコト、ナレリ本年一部ノ實地檢査ヲ行ヒ其狀況ヲ觀察シタルニ其收支ハ國庫金ニ準シ收入ハ財務署之ヲ徴收シ支出ハ道府ニ於テ出給命令ヲ發セリ而シテ目下ノ事業トシテ著手シタルモノハ教育及農工業ノ獎勵、道路ノ修繕等其主タルモノナリ

然レトモ日尙ホ淺キヲ以テ支出金額ハ概テ僅少ナリトス  
地方費ノ檢査ハ國庫金ノ檢査ト異ナリ實地檢査ノ一方法アルノミナルヲ以テ檢査監督ニハ特ニ注意ヲ要スルモノト認メタリ

### 第四節 檢査ニ關スル諸表

#### 一 隆熙四年六月末檢査書類受領及查了總數表

年度別	證明別	書類別	受		領		查		了		殘
			二年	三年	四年六月末	計	二年	三年	四年六月末	計	
光武十年	月證明	計算書	七	一	八	一六	三〇〇	六	一	一	一〇〇
同十一年	同	同	一	一	二	二	一	一	一	一	一〇〇
隆熙二年	同	同	一	一	二	二	一	一	一	一	一〇〇
同三年	同	同	一	一	二	二	一	一	一	一	一〇〇
同四年	同	同	一	一	二	二	一	一	一	一	一〇〇
光武十年	年證明	同	一〇	七	一七	一七	一〇	七	一七	一七	一〇
同十一年	同	同	一	一	二	二	一	一	一	一	一〇〇

備考	合計	同四年	同三年	隆熙二年
		同	同	年證明
		同	同	計算書

[illegible]

備考

二 檢 查 金 額 明 細 表 (一般會計)

## 二 檢査金額明細表（一般會計）

歲入

年 度	豫 算 額	檢 査			計 額	檢 査 未 済 額
		隆 熙 二 年	同 三 年	同 三 年		
光 武 十 年	七 百 五 十 兩 〇 〇		三 百 三 十 兩 〇 〇	三 百 三 十 兩 〇 〇	七 百 五 十 兩 〇 〇	
同 十 一 年	一 千 六 百 六 十 兩 〇 〇		三 百 三 十 兩 〇 〇	三 百 三 十 兩 〇 〇	一 千 六 百 六 十 兩 〇 〇	
隆 熙 二 年	一 千 七 百 五 十 兩 〇 〇		一 百 〇 兩 〇 〇	一 百 〇 兩 〇 〇	一 千 七 百 五 十 兩 〇 〇	
同 三 年	一 千 六 百 一 十 兩 〇 〇		一 〇 〇 〇	一 〇 〇 〇	一 千 六 百 一 十 兩 〇 〇	
計	六 千 九 百 一 十 兩 〇 〇		一 千 六 百 一 十 兩 〇 〇	一 千 六 百 一 十 兩 〇 〇	六 千 九 百 一 十 兩 〇 〇	

歲出

所管	年度	豫算額	檢査	濟	額計	檢査未済額
度	光武十年	四三二五四四三	八八四九五一二	—	八八四九五一二	四二七五九九〇
支	同 十一年	四〇三六五五三三	四二二七五九九	四八二〇〇〇〇	其二三九七五九九	其一二二六八六〇
部	隆熙二年	二五五九〇五三	—	三二五六一八八	其九三四六〇六	八八六二二四三
内	同 三年	二六六九〇〇〇〇	—	九八八七四八	九八八七四八	其三〇二二九九
部	光武十年	二六九四四四四	右七四八四四四	—	右七四八四四四	二〇六三五一二
部	同 十一年	三三三四三二九	一三四一七七九九	一九八八八八〇	三三三三三三三	一〇二二九九九九
部	隆熙二年	五八八八八八八	五〇九七四七八	二二五一一八八	二四九五八八八	三四四二二〇〇
部	同 三年	六〇九六八八〇〇	—	一一〇〇〇〇	一一〇〇〇〇〇	六〇四七五九九
軍	光武十年	一四六八八八八五	一四〇六二八八八	—	一四〇六二八八	三七八八六八八
部	同 十一年	一七四一八八八六	四八八七九〇〇	二二八八八八八	一五七六八七七	一四四〇六四四
部	隆熙二年	一〇三七七〇〇〇	二八五五七元	八八八八八八四	一〇四四〇〇〇〇	三六六八八八〇
部	同 三年	一〇〇九七〇〇〇	—	四四七七八八八	三四三七八八八	三四三九九七
法	光武十年	六八六七〇五	二五三六〇〇〇	七七七七〇〇	三四三六三〇〇	三二二二二二
同	同 十一年	五八四四四四	五八四四四四	一八二〇〇〇〇	二九六八七五元	其九八八八八
隆熙	二年	二二六四〇〇〇	一〇三三三三三	八八八八八八八	九〇八八八八八	五八四四四四

[illegible]

### 三 檢 查 金 額 明 細 表 (特別會計)

歲入

所管年度		豫算額		檢査額		檢査未済額	
年度	豫算額	檢査額	未済額	年度	豫算額	檢査額	未済額
光武十一年	三〇、九八〇、〇〇〇			光武十一年	三〇、九八〇、〇〇〇		
隆熙二年	一〇〇、二九〇、〇〇〇			隆熙二年	一〇〇、二九〇、〇〇〇		
同三年	一九八、九三〇、〇〇〇			同三年	一九八、九三〇、〇〇〇		
計	四〇〇、二〇〇、〇〇〇			計	四〇〇、二〇〇、〇〇〇		
農商部	二、四九七、〇〇〇			農商部	二、四九七、〇〇〇		
隆熙二年	三八六、六六〇、〇〇〇			隆熙二年	三八六、六六〇、〇〇〇		
同三年	三八六、六六〇、〇〇〇			同三年	三八六、六六〇、〇〇〇		
計	七七三、三二〇、〇〇〇			計	七七三、三二〇、〇〇〇		
内部	四〇〇、二〇〇、〇〇〇			内部	四〇〇、二〇〇、〇〇〇		
隆熙二年	四〇〇、二〇〇、〇〇〇			隆熙二年	四〇〇、二〇〇、〇〇〇		
同三年	四〇〇、二〇〇、〇〇〇			同三年	四〇〇、二〇〇、〇〇〇		
計	八〇〇、四〇〇、〇〇〇			計	八〇〇、四〇〇、〇〇〇		
合計	四〇〇、二〇〇、〇〇〇			合計	四〇〇、二〇〇、〇〇〇		

歲出

度	所管	度	豫	檢	計	檢査未済額
光武十一年	年	算額	隆照二年	査	三年	
		三〇四、九二〇	同	濟	二五、五八〇	
					七〇、五八〇	
					二五、五八〇	
						七〇、五八〇



計	全	全	忠	慶	慶	咸
	羅	羅	清	清	尙	尙
	北	南	北	南	北	北
	道	道	道	道	道	道
<div style="display: flex; justify-content: space-between; border-top: 1px solid black; border-bottom: 1px solid black; height: 20px;"> <span>八</span><span>六</span><span>七</span><span>六</span><span>七</span><span>八</span><span>七</span> </div>						
<div style="display: flex; justify-content: space-between; border-top: 1px solid black; border-bottom: 1px solid black; height: 20px;"> <span>二</span><span>六</span><span>七</span><span>六</span><span>七</span><span>二</span><span>三</span> </div>						
<div style="display: flex; justify-content: space-between; border-top: 1px solid black; border-bottom: 1px solid black; height: 20px;"> <span>八</span><span>六</span><span>七</span><span>六</span><span>七</span><span>八</span><span>七</span> </div>						

咸鏡南道	平安北道	平安南道	黃海道	江原道	京畿道	京畿道	道別
九	九	二九	一	一	二〇	三	隆熙二年中
一	九	二九	六	八	二六	四	同三年中
二四	一	一	一	二六	六	二	同四年六月迄
七	一八	四四	六	二四	四四	六	計

五 實地檢查箇所調  
査箇所

[illegible]

## 第二編

### 第一章 貨幣

#### 第一節 概況

當國ノ幣制ハ從來幾多ノ變遷ヲ重ネ開國五百三年明治二十七年ニ至リ銀貨本位制ヲ採用セシト雖尙ホ全ク空文ニ屬シ其實本位貨ナキ狀態ニシテ葉錢及白銅貨ノ二種各地方ヲ異ニシテ專ラ流通シ殆ト本位貨ニ代ルノ觀ヲ呈シタリキ而シテ葉錢ノ鑄造發行ハ根源遠ク數百年前ニアリテ民衆ノ最モ慣熟愛用セル所ナリト雖其容積徒ニ大ニシテ價格之ニ伴ハス運搬ノ不便、需要ノ不調和ハ經濟交通ノ發展ト共ニ漸次貨幣トシテノ本能ヲ欠絮セシムルニ至リタリ而モ尙ホ其價格ハ實價ヲ標準トセルヲ以テ未タ一概ニ惡貨トシテ排斥スヘキニアラス反之白銅貨ハ元來補助貨トシテ發行セラレシモ偶其造幣利益ノ大ナルヲ見ルヤ政府ハ恰モ財政窮乏ノ機ニ際セシヲ以テ其性質如何ヲ辨セス濫リニ鑄造發行ヲナスヤ其聲價漸次失墜シ殆ト銘價ノ二分ノ一以下ヲ以テ流通スルニ至レリ茲ニ於テ私鑄偽造滔然

トシテ起リ貨幣ノ信用ハ殆ト地ニ墜テ物價ノ變動極リナク其財政及經濟上ニ及ホシタル影響ハ甚タ深酷ヲ極メタリキ  
通貨ノ狀態如此カリシヲ以テ幣制ヲ更革シ本位貨ヲ定メ物價ノ基準ヲ確立スルハ蓋シ財政經濟ノ健全ナル發展上最先ノ急務ナリキ之ヲ以テ光武八年明治三十七年財政顧問就職ノ劈頭貨幣制度ノ整理ニ著手セシカ其整理案ノ梗概左ノ如シ

### 一 整理ノ要點

- 一、本位貨幣制度ヲ確立シ價格ノ標準ヲ定ムルコト
- 二、白銅貨ヲ廢止シ之ニ更フルヘキ補助貨ヲ發行スルコト
- 三、葉錢ハ其流通額夥多ニ失セルヲ以テ之カ引上ヲ爲シ適當ノ分量ニ收縮シ準補助貨トシテ流通セシムルコト

### 二 整理方法

當時ノ資力及國際貿易ノ關係ニ鑒ミ左ノ方策ヲ採ルコト  
一、貨幣ノ本位ハ韓國ト通商及交通上密接ノ關係アル日本國ト同一ニスルコト

二、韓國ノ貨幣制度ノ整否ニ最モ利害關係深キハ日本國ナレハ日本政府若ハ日本政府ノ保證ヲ以テ整理資金ヲ借入ル、コト

### 三 整理ノ順序

- 一、光武五年明治三十四年勅令第四號貨幣條例ノ實施ヲ宣言スルコト
  - 二、日本貨幣ノ流通ヲ認メ政府ノ收支ニ使用セシムルコト
  - 三、貨幣條例中ノ補助貨ノ樣式ヲ改定シ之ヲ公布スルコト
  - 四、舊白銅貨ノ通期限ヲ定メ交換及引上ヲ爲スコト
  - 五、青銅貨及葉錢ハ一定ノ期限及其流通制限額ヲ限定スルコト
- 以上ノ如ク貨幣整理ノ大方針決定セルカ故ニ先ツ從來白銅貨ノ濫鑄ヲ以テ幣制攪亂ノ源泉ヲ爲シタル典圖局ノ閉鎖ヲ斷行シ貨幣濫發ノ根原ヲ絶ナタリ

恰モ好シ光武五年明治三十四年發布ノ貨幣條例ハ金貨本位制ニシテ國際上最モ密接ノ關係アル日本國貨幣條例ト殆ト同一ナリシカ光武九年明治三十八年一月勅令ヲ以テ之カ實施ヲ宣告シ之ト同時ニ舊貨幣訂期交換ニ關スル勅令ヲ發布シ愈貨幣整理ノ著手セラルヘキヲ中外ニ聲明シ新計畫

ニ對スル新タナル信用ヲ喚起セリ

之ト同時ニ政府ハ勅令ヲ以テ形體量目ヲ同フスル日本通貨ノ流通ヲ公認スルト共ニ株式會社第一銀行ト國庫金取扱ニ關スル契約ヲ締結シ以テ中央金融機關タルノ衝ニ當ラシメ其發行ニ係ル銀行券ノ公私一切ノ取引ニ無障流通スヘキコトヲ公認シ一面本位貨ニ代ルヘキ兌換券ノ效力ヲ有セシメタリ斯クテ第一銀行ト貨幣整理ニ關スル契約及整理資金借入契約ヲ締結シ同行ヨリ參百萬圓ヲ借入レ之ヲ整理資金トシテ同行ニ交付シ整理事務ヲ委託セリ

而シテ之ヨリ先キ既ニ典國局ハ閉鎖セラレタリト雖貨幣整理ニ伴フ新貨ノ必要ハ益急速セルヲ以テ鑄造ハ專ラ之ヲ日本國造幣局ニ委嘱シ極力急造ヲ求メ以テ改正制度ノ實施ニ支障ナカラシメンコトヲ期シタリ

此ノ如ク法令ノ實施手續規定ノ準備既ニ成リシヲ以テ愈々舊貨ノ引上及新貨ノ發行ニ著手シ以テ貨幣制度ノ整理ヲ計レリ以下節ヲ分ナテ之ヲ述ベシ

## 第二節 舊貨幣ノ整理

### 一 舊白銅貨ノ引上

舊白銅貨ノ引上ハ最も急速ヲ要セシヲ以テ國庫收納ニ依リテ還收セシムルノ外特ニ京城其他地方ニ交換所ヲ設置シ光武九年(明治三十八年七月一日)ヨリ之カ交換ヲ開始セリ然ルニ從來繰返サレタル貨幣ノ引上交換等カ徒ニ私財沒收ノ嫌アリシヲ以テ交換ニ先々種々ノ流言行ハレ該貨ノ價格一層下落ヲ來タシ政治的暗流ト相呼應シテ一部商民ハ金融ノ梗塞ヲ絶叫シ喧擾ヲ極メタリ由テ政府ハ金融流通ノ應急手段ヲ講シ各種金融機關ノ創設ニ努メタルト共ニ愈々交換ノ開始セラル、ヤ其取扱ノ極メテ公平確實ナリシヲ以テ迷夢漸ク醒メ一時ノ喧擾モ忽チニ鎮靜シ整理ノ事務ハ著々進捗セリ斯クシテ整理ノ進捗ト交換ノ確實公平トハ漸次舊白銅貨ノ信用ヲ恢復シ光武九年(明治三十八年)十一月以來ハ從來變動ヲ極メタル價格モ殆ト一定ニ歸スルニ至リ隆熙元年(明治四十年)ニハ既ニ大部ノ還收ヲ了セシカ故ニ翌隆熙二年(明治四十一年)二月度支部令ヲ以テ同年十一月末日ヲ期限トシ其交換ヲ停止シ以後其通用ヲ禁止スルト共ニ右期限後六箇月間ニ公納ニ使用スルヲ得ル旨ヲ公布シ金庫ノ外各農工銀行、地方金融組合ヲ

シテ買収ヲ行ハシメ又地方商人ヲシテ交換組合ヲ組織セシメ手數料ヲ給シテ集收スルノ方法ヲ講スル等出來得ル限り右期間内ニ回收シ無智ノ民衆ニ不測ノ損害ヲ蒙ラシメサルコトニ努力セリ而モ其期限ニ至リ尙ホ市場ニ殘存シ流通スルモノ尠カラザリシヲ以テ隆熙三年(明治四十二年)五月勅令ヲ以テ更ニ公納使用ノ期間ヲ同年十二月末日迄延期シ次テ度支部大臣ハ諭告ヲ發シ該貨交換ノ趣旨ヲ普ク民衆ニ知悉セシメ專ラ地方金融組合ヲシテ交換ノ衝ニ當ラシメ尙吏員ヲ地方ニ派シテ交換ニ努メタル結果期間終了迄ニハ殆ト全部ノ還收ヲ決セリ而シテ交換開始以來還收シタル額ハ實ニ九百六拾萬八千六百參拾六圓六拾四錢ヲ算ス

## 二 葉錢ノ還收

葉錢ハ其弊害舊白銅貨ノ如ク甚シカラザリシト地方民衆ノ葉錢ヲ愛惜スル事過大ナリシトニヨリ急激ニ之ヲ整理スルハ反テ財界ヲ攪亂セシムルノ虞アリシヲ以テ光武九年明治三十八年七月度支部大臣ハ國庫ノ收納ニ依リテ之ヲ還收スヘキ旨ヲ布告シ公定價格ヲ時ノ相場ニ鑑ミ葉錢一枚ニ付一厘五毛ト定メ漸次ニ還收ヲ圖リタリシカ其後銅相場ハ公定價格ヨリ

モ常ニ上騰シ公定價格ヲ以テ收納スルモノ殆ト無カリシト雖別ニ銅相場ノ昇騰ニ伴ヒ海外ニ流出スルモノ夥シク爲ニ流通額著シク減少シ該貨ノ整理上好箇ノ機運ヲ招致セリ是ニ於テ政府ハ隆熙二年(明治四十一年)六月勅令ヲ以テ葉錢ノ公定價格ヲ二厘トシ一圓ヲ限り法貨ト定メシニ公定價格ト市價漸ク近ツキ國庫收納ニ依リ還收額モ漸次増加セシヲ以テ政府ハ更ニ積極的ニ買上ヲ行ヒタリ斯クテ市價ハ公定價格ニ一致シ茲ニ該貨整理ニ關スル當初ノ目的ノ如ク準補助貨トシテ市場ニ流通セシムルヲ得タリ而シテ引上開始ヨリ葉錢ノ還收シタル高ハ參百貳拾七萬八千九百五拾八圓六拾八錢九厘ナリ

## 三 舊銀貨及舊銅貨

舊銀貨及舊銅貨ノ回收ハ亦光武九年明治三十八年二月勅令ヲ以テ制定セツレ舊貨貳元ニ對シテ新貨壹圓ノ比例ヲ以テ政府ノ便宜ニ依リ還收スヘキコトヲ定メタルモ舊銀貨ハ其鑄造額ノ甚タ少ナカリシト白銅貨下落ノ結果自然ニ市場ヨリ驅逐セラレタルカ爲流通甚タ稀ニシテ本年五月末日迄ニ於ケル該貨ノ還收高ハ四拾萬七拾貳圓五拾錢ニ達セリ舊銅貨モ亦其

鑄造額ノ少カリシト銅價騰貴ニ依リ鑄解セラレタルモノ多キヲ以テ市場流通高著シク減少シ本年五月末日迄ノ還收高ハ八萬參千貳百八拾貳圓五錢ニ過キス

#### 四 還收舊貨ノ處置

還收シタル舊貨中銀貨銅貨白銅貨ハ總テ龍山中央金庫鑄解部ニ送付シ切斷又ハ鑄解シタル後銀貨ハ大阪造幣局ニ送付シ新貨製造ノ材料ニ供シ銅貨ハ之ヲ賣却セリ白銅貨ハ新白銅貨鑄造ノ材料ト爲サムトシタルモノ多量ノ亞鉛其他雜物ヲ含有セルヲ以テ到底之カ材料ニ適セス又葉錢ハ龍山鑄解部ニ於テ切斷ノ上銅相場ノ騰貴ヲ待テ賣却スルノ方針ナリシモ相場ノ下落ハ容易ニ恢復スルノ見込ナキニ依リ速ニ處分スルノ有利ナルヲ認メ此二者ハ共ニ競爭入札ニ附シ之ヲ賣却セリ而シテ本年五月末日迄ノ舊貨賣却貫數ハ百參拾九萬五千六百四拾參貫參百貳拾七匁ニシテ其代金ハ貳百貳拾四萬貳千七百四圓七拾六錢ナリ

#### 第三節 新硬貨

##### 一 新貨ノ製造及發行

新貨ノ種類及其品位量目ハ光武五年明治三十四年二月勅令第四號貨幣條例及光武九年明治三十八年十月勅令第四十二號ヲ以テ之ヲ制定シ其種類ハ金貨貳拾圓拾圓五圓銀貨半圓貳拾錢拾錢白銅貨五錢青銅貨壹錢半錢ノ九種ニ分テ金貨ヲ以テ本位貨ト定メ他ハ之ヲ補助貨ト爲ス等始ト日本貨幣法ト同一ナリ而シテ新貨ノ鑄造ニ關シテハ典圖局廢止セラレタルヲ以テ凡テ之ヲ日本大阪造幣局ニ依頼セリ其後銀及銅相場ノ騰貴ハ補助貨ノ價格以上ニ達セントシ輸出及鑄造ノ虞生セシヲ以テ隆熙元年(明治四十年)八月勅令第四號ヲ以テ貨幣條例ニ改正ヲ加ヘ品位量目ヲ上昇セシメタリ是カ爲メ舊來ノ銀貨青銅貨ハ漸次還收シ大阪造幣局ニ於テ新貨幣ニ改鑄セリ而シテ本年五月末日迄ノ新貨鑄造額ハ九百四拾七萬五千七百圓ニシテ改鑄額ハ六拾九萬參千八百圓ニ及ヘリ

#### 二 新貨ノ散布

光武九年(明治三十八年)貨幣整理ニ著手シ舊貨ノ還收ヲ行フト同時ニ政府ハ新貨ヲ發行シ其普及ヲ圖リシカ民衆未タ新貨ノ何タルヲ知ラス又耳目ニ慣レサルカ故ニ其授受ヲ拒ミ容易ニ市場ニ流通セサリシヲ以テ各農工

銀行及金融機關ニ無利息ヲ以テ新貨貸付ノ途ヲ開キシニ其結果極メテ良好ナルヲ見隆熙三年明治四十二年一月更ニ度支部大臣ハ命令ヲ以テ各地方金融組合ニ對シ舊貨交換基金及散布資金ノ名目ノ下ニ新貨貸下ヲ開始シ又舊貨流通地方ニハ特ニ貸下ヲ開始シ又舊貨流通地方ニハ特ニ貸下ノ範圍ヲ擴張シ確實ナル會社及商人ニ及ホシ米穀等ノ買出ニ使用セシムル等直接間接ニ極力散布ニ努メタリシニ依リ新貨ニ對スル地方民ノ感想一變シ由來新貨ヲ喜ハサリシ葉錢使用地方ニ於テモ漸次之ヲ歡迎スルノ風ヲ生シ到ル所圓滿ニ流通スルニ至レリ本年五月末日ニ於ケル新貨ノ流通額ハ四百參拾五萬八千四百八拾七圓ニシテ新貨貸付額ハ參拾壹萬六千九百圓ナリ

#### 第四節 銀行券

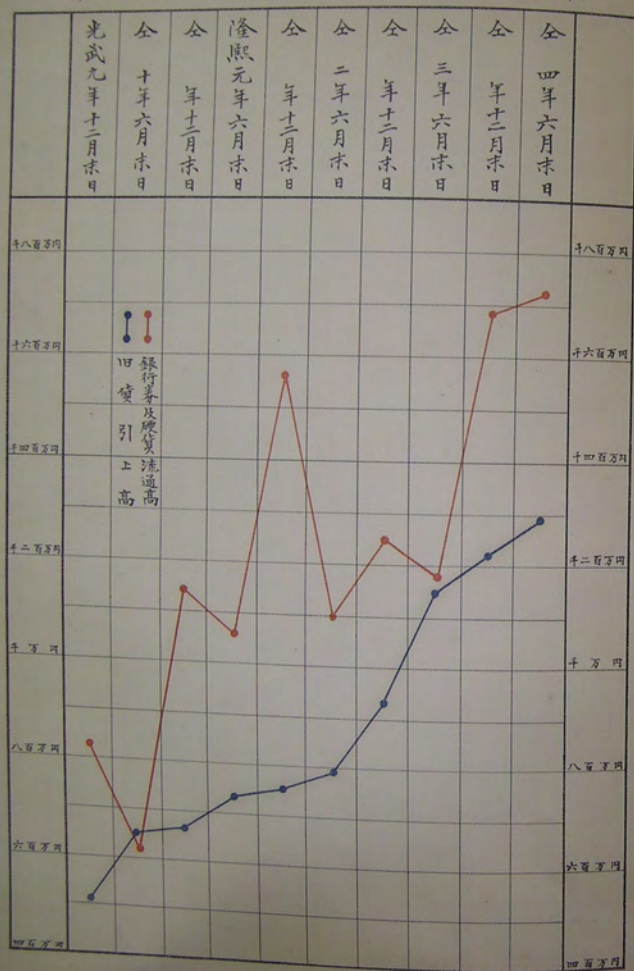
韓國ノ銀行券ハ光武五年(明治三十四年)株式會社第一銀行ヲシテ初メテ發行セシマシカ光武九年(明治三十八年)一月ニ至リ政府ハ其公私取引上之カ無制限ノ通用ヲ公認セリ而シテ當時發行シタル銀行券ハ拾圓券、五圓券、壹圓券、五拾錢券、貳拾錢券、拾錢券ノ六種ニシテ善ク當國ノ經濟狀態ニ適應セ

シカ其後補助銀貨ノ鑄造完成シ之ヲ發行スルニ及ヒ五拾錢以下ノ小銀行券ハ其發行ヲ停止セリ次テ壹圓券、五圓券、拾圓券ノ形式ヲ改造シタルヲ以テ銀行券ハ一層多大ナル信用ヲ得テ圓滑ニ流通セリ其後客年十一月韓國銀行設立セラレ第一銀行ヨリ業務一切ヲ引繼クニ當リ發行銀行券モ之ヲ繼承シタリシカ尙同行銀行券未ダ製造ノ運ニ至ラザリシヲ以テ第一銀行未發行券ヲ韓國銀行券トシテ發行セリ而シテ近時貨幣整理ノ進捗及財政經濟ノ膨脹ニ伴ヒ銀行券ノ市場流通高モ著シク増加セリ最近四箇年間ノ流通高左ノ如シ

年	次	市	場	流	通	額
隆熙元年	六月末					八、一六九、八〇九
同 二 年	六月末					七、七七八、九三五
同 三 年	六月末					九、〇九六、二二六
同 四 年	六月末					一二、五九七、二四六

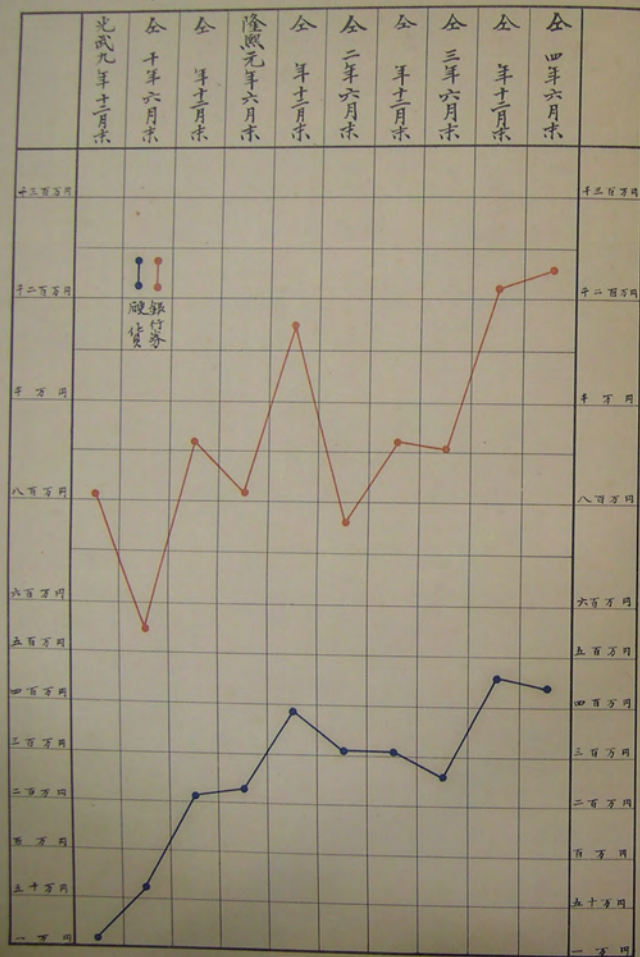
#### 第五節 結 論

銀行券新貨市場流通高及舊貨回收高比較表

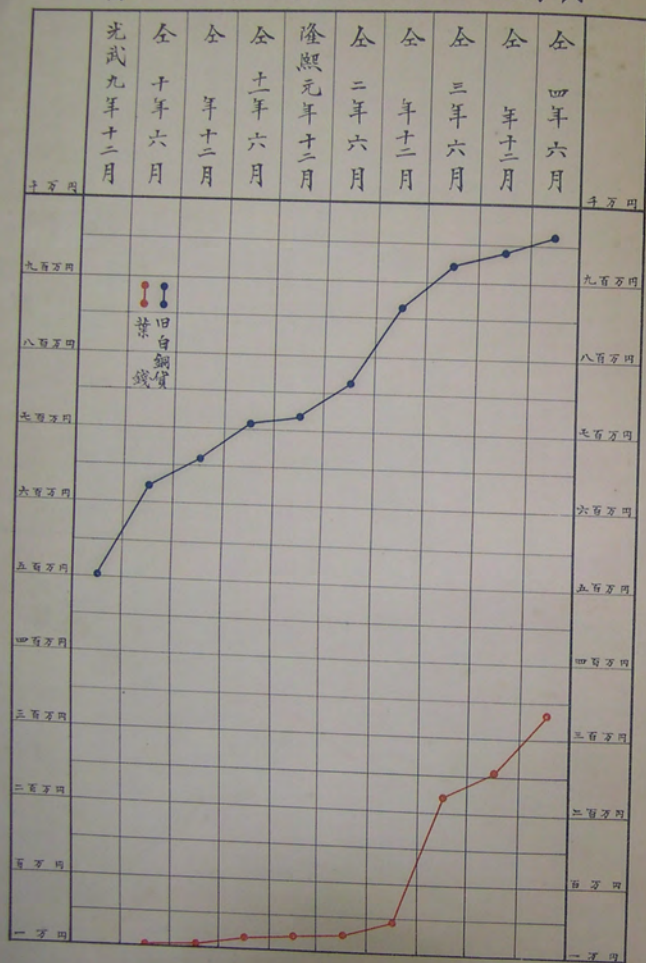


斯ノ如ク今ヤ新貨及銀行券ハ普ク流通シ舊白銅貨ハ市場ニ其跡ヲ絶テ葉  
 錢ハ準補助貨トシテ小取引ヲ圓滑ナラシムルノニ通貨ノ信用ハ半平トシ  
 テ抜クヘカラス物價ハ平準適正ヲ維持スルニ至リ紛糾錯雜ヲ極メタル幣  
 制モ此ニ整理確立ノ實ヲ擧ゲ得タリト云フ也過官ニアラス試ニ新貨及銀  
 行券ノ發行額竝ニ舊貨引上高ノ變遷ヲ表示セン

# 硬貨及銀行券市場流通高表



表高回收末期錢幣及貨銅白舊



## 第二章 金庫

### 一 金庫設置

從來百弊ノ根源ヲ爲シタル國庫收支ノ紛糾錯雜ヲ匡革スヘク會計法規ノ整備ヲ計リタルト共ニ金庫制度ヲ確立センカ爲メ光武八年十二月明治三十七年(金納出納役ノ制ヲ定メ次テ翌光武九年一月株式會社第一銀行ト國庫金取扱ニ關スル契約ヲ締結シ同行ナシテ金庫出納役ノ地位ニ立タシメ金庫出納ニ關スル一切ノ事務ヲ委託シ同行京城支店ヲ以テ中央金庫トシ各地ノ支店出張所十箇所ヲ支金庫トシテ國庫歲入金ハ總テ之ヲ同行ニ預入スルコトニ定メタリ

### 二 通信官署國庫金事務取扱委託

然ルニ支金庫未タ少數ニシテ國庫金ノ收支ニ不便尠ナカラザリシニ依リ政府ハ光武十年明治三十九年(四月)統監府通信管理局ト協定シ取扱手數料毎年貳拾五萬圓ヲ提供シテ韓國歲入歲出出納事務取扱ヲ委託シ同年七月ヨリ金庫未設地方ニ於ケル郵便局所ニ於テ國庫金出納事務ヲ開始セリ之

カ爲通信管理局ニ於テハ官制ヲ改正シ郵便局所ヲ増設シ現今ニ於テハ國庫金取扱ヲ爲ス郵便局所全國ニ涉リ百五十箇所ヲ數フルニ至レリ

### 三 農工銀行等支金庫事務取扱

此ノ如ク金庫及通信官署ニ於テ國庫金出納ニ執掌セシモ財務ノ發展ニ伴ヒ國庫金ノ收支繁劇ヲ加ヘ益支金庫増設ヲ要セシカ爲更ニ漸次各農工銀行漢城銀行及十八銀行ヲ以テ第一銀行ノ代理店トナシ支金庫事務ヲ取扱ハシメタリ而シテ現在金庫ノ數ハ全國ヲ通シテ二十八箇所ナルカ客年韓國銀行設立セラルルヤ同年十一月ヲ以テ從來第一銀行ノ取扱ヒタル國庫金出納事務ハ舉ケテ同行ニ繼承セシメタリ

今國庫金出納事務取扱所現在ヲ表示スレハ左ノ如シ

道 別	中央金庫	支金庫	通信官署	計
京 畿	—	—	一	一
忠 清 南 道	—	—	一	一
忠 清 北 道	—	—	一	一
全 羅 南 道	—	—	一	一
全 羅 北 道	—	—	一	一
計	—	—	五	五

道 別	中央金庫	支金庫	通信官署	計
全 羅 北 道	—	—	一	一
慶 尙 南 道	—	—	一	一
慶 尙 北 道	—	—	一	一
江 原 道	—	—	一	一
黃 海 道	—	—	一	一
平 安 南 道	—	—	一	一
平 安 北 道	—	—	一	一
咸 鏡 南 道	—	—	一	一
咸 鏡 北 道	—	—	一	一
計	—	—	九	九

### 第三章 國債

#### 第一節 國債種類及使途

從來韓國ニ於テハ國債ナルモノナカリシカ財政顧問就職ノ翌年光武九年(明治三十八年)六月國債證券ヲ發行セシヲ以テ本邦ニ於ケル國債ノ嚆矢トナス其以後起債セラレタル各種國債ノ種類及使途等ヲ舉グレハ左ノ如シ

##### 一 國庫證券

光武九年度明治三十八年ニ於テ國庫ノ償還ヲ要スルモノ及其他臨時經費ヲ合シテ約貳百萬圓ノ支出ヲ要セシカ之ニ應スルノ財源ナキヲ以テ同年六月國庫證券條例ヲ發布シ短期公債貳百萬圓ヲ第一銀行ヲシテ引受ケシメ東京ニ於テ之ヲ發行セリ然ルニ昨隆熙三年明治四十二年六月償還期ニ入リシ際偶日本興業銀行ヨリ借入金契約成立シタルニ依リ之カ資金ヲ繰替ヘ百萬圓ヲ限リ抽籤ヲ以テ償還ヲ爲シ本年六月一日同シク公債金ヲ以テ繰替ヘ更ニ殘額百萬圓ノ償還ヲ完了シタリ

#### 二 貨幣整理資金債

政府ハ貨幣整理ヲ爲スニ當リ多大ノ經費ヲ要スヘキヲ以テ該資金ニ充用センカ爲メ光武九年(明治三十八年)一月株式會社第一銀行ト借入契約ヲ締結シ參百萬圓ヲ借入レタリ

#### 三 金融資金債

金融市場救済ノ目的ヲ以テ政府ハ銀行其他金融機關ヲ創設シ之ニ補助ヲ與ヘ京城及地方農商民ノ金融ヲ謀リ又一面ニハ地方倉庫ヲ建設スルノ計畫ヲ立テ光武九年(明治三十八年)十二月日本政府ト契約ヲ結ビ金融資金百五拾萬圓ヲ無利子ヲ以テ借入レタリ

#### 四 一起業資金債

本邦ノ利源ヲ開發シ農工商ノ發達ヲ期スルノ必要上各種起業ノ資途ニ充ツル爲メ光武十年(明治三十九年)三月政府ハ日本興業銀行ヨリ起業資金壹千萬圓ノ借入ヲ約シ差向五百萬圓ハ同年三月ニ受領シ殘額ハ必要ノ時ニ於テ受領スルコトトセルモ其後之ヲ見合セ第二起業資金ヲ同行ヨリ借受クルコト、セリ

#### 五 第二起業資金債

第二起業資金ハ土地調査其他財源啓發ノ爲日本興業銀行ヨリ借入レタルモノニシテ既ニ借入契約ヲ爲シタル第一起業資金ノ殘額五百萬圓ノ借入ヲ見合セ之ヲ加ヘテ隆熙二年明治四十一年十二月同銀行ト交渉ノ上英佛兩國ニ於テ各壹百萬磅宛ノ興業債券ヲ發行セシメ該募集金千七百九拾六萬參千九百貳拾圓ヲ借入レタリ而シテ右ノ内五百萬圓ハ第一起業資金借入契約ニ基ク貸上金五百萬圓ノ還付ト同時ニ之ヲ受入ルルコト、セリ

#### 六 起業公債

統監府通信官署取扱ニ係ル韓國ニ於ケル日韓人預入ノ郵便貯金ハ漸次其額ヲ増加シ將來ニ於テ著シキ金額ニ達スルノ趨勢ナリ然ルニ右貯金ハ日本大藏省預金部預金ニ組入レラレ日本銀行ニ於テ運用利殖セラル、モ右資金ハ當國ニ放資スルヲ以テ適當トス仍テ大藏省ト交渉ノ上百萬圓ノ起業公債ヲ發行シ同省預金部ヲシテ應募セシムルコト、シ隆熙二年明治四十一年十一月勅令第八十一號ヲ以テ起業公債條例ヲ發布シ之ヲ募集セリ而シテ右公債金ハ各種金融機關ヲ通シテ放資ノ途ヲ開ケリ

#### 七 日本政府借入金

日韓新協約ノ實施ニ伴ヒ施政改善ニ必要ナル經費支辨ノ爲メ隆熙二年明治四十一年三月政府ハ日本政府ト借入契約ヲ締結シ壹千九百六拾八萬貳千六百貳拾參圓ヲ限リ六箇年間ニ隨時借入ルルコト、セリ而シテ本年迄ニ借入レタル金額ハ壹千百六拾八萬貳千六百貳拾參圓ナリ

#### 八 貨幣整理資金借越

當國貨幣整理ニ關シテハ實ニ多大ナル費用ヲ要シ前記ノ整理資金參百萬圓ノミニテハ到底悉皆之ヲ支辨スルコトヲ得サルヲ以テ貨幣整理事務取扱銀行ヨリ經費借越ノ約定ヲ以テ立替ヲ爲サシム而シテ五月末日ニ於ケル現在額ハ八百五拾六萬四千八百拾八圓參拾七錢四厘ナリ

#### 國債現在高表

隆熙四年(明治四十一年)五月末現在

區分	發行高及 借入高	償還高	差引現在高	利率 (年率)	發行入 入年月日	借入 年限	償還年月	借入先
國庫證券	11,000,000,000	1,000,000,000	10,000,000,000	七厘	分光武九年六月三箇年	隆熙四年六月三箇年	日本國內募	集
貨幣整理資 金債	10,000,000,000	1,000,000,000	9,000,000,000	六厘	同前	同前	同前	第一銀行
金融資金債	10,000,000,000	1,000,000,000	9,000,000,000	六厘	同前	同前	同前	大日本政府
第一起業資 金債	10,000,000,000	1,000,000,000	9,000,000,000	六厘	同前	同前	同前	興業銀行

第二起業資	二、三六〇、〇〇〇	三、三六〇、〇〇〇	同上	上條昭和十二年十月十箇年 （明治三十九年） 同（昭和十六年）	同	上
金債	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	六分	同上	大日本大藏省預金部	上
起業公債	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	六分	同上	大日本大藏省預金部	上
日本政府借入金整理實資	二、八六五、〇〇〇	二、八六五、〇〇〇	無利子	同上	大日本大藏省預金部	上
貨金借越	八、八四八、五三三	八、八四八、五三三	六分	同上	大日本大藏省預金部	上
金債	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	無利子	同上	大日本大藏省預金部	上
國庫金借越	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	無利子	同上	大日本大藏省預金部	上
計	四、七二六、五三三	四、七二六、五三三	同上	同上	大日本大藏省預金部	上

## 第二節 公債金特別會計

從來前記ノ營業資金融資金等ハ之ヲ資金會計シ各別ニ整理シ來リシ  
カ其收支取扱上種々手數ヲ要シ又資金ノ運用ニ不便尠カラリシヲ以テ  
之等ノ資金ヲ合同シ整理スルノ便宜ナルヲ認メ隆熙三年明治四十二年法  
律第七號ヲ以テ公債金特別會計法ヲ設ケ之等ノ資金ニ關稅收入ヲ以テセ  
ル工事資金ヲ合併シ從來ノ各會計ヲ閉鎖シ公債金特別會計トシテ之ヲ整  
理セリ而シテ本年五月末日現在公債金特別會計ノ受入額及支出額ハ左記  
ノ如クニシテ其收支差引現在高ハ大藏省預金部韓國銀行及香港上海銀行  
ニ預入ヲ爲セリ右支出濟金ノ重ナル費目ハ治道費水道工事費金融組合資

金韓國銀行株式引受金、同貸付金、地方倉庫建築費、印刷局擴張費、海關工事費、鹽田築造及廳舍新營設備費等ナリ

公債金特別會計資金收支額表

隆熙四年(明治四十三年)五月末現在

受		入		支		出	
別	金	額	區	別	金	額	額
起業公債募集金	1,000,000.00		公債金ヲ財源ト		七三九,二二九.一		
起業資金繰入	11,777,777.00		スル經費ノ支拂				
工事資金繰入	2,222,222.00						
金融資金繰入	四八五,000.00						
三年度利子收入	111,111.00						
四年度利子收入	三六六,666.66						
計		12,000,000.00	差引現在金				一六〇,〇八八.四〇

## 第四章 金融機關

## 第一節 緒 說

現今當國ニ於ケル金融機關ハ概ネ光武八年明治三十七年以降財政整理ノ結果創設セラレタルモノナリトス

從來當國ニ於ケル産業中農業ハ多少ノ發達ヲナセシト雖商工業ハ一トシテ見ルニ足ルモノナク文化ノ程度低ク交通極メテ不便ナリシカ爲經濟狀態ハ近世ニ至ル迄極メテ幼稚ニシテ物々交換ノ域ヲ脱セザリキ加之多年收歛ノ結果人民勤儉貯蓄ノ美風ヲ缺キ偶々家財アレハ悉ク之ヲ土中ニ埋藏シテ厚生利用ノ途ヲ知ラス且地方行政機關ハ同時ニ徵稅事務ヲ掌リ租稅其他ノ公金ハ直ニ中央政府ニ上納セラル、コトナク郡守又ハ觀察使ハ或期間之ヲ商人ニ貸與シテ商業資金ニ使用スルコトヲ許シ中央政府モ亦國庫ニ一時借入金ノ必要アルトキハ其金額ヲ商人ヨリ借入レ同時ニ外劃制度ニ依リ地方行政官ニ對シテ其徵收シタル稅金ヲ直接第三者債權者タル商人ニ給付スヘキ命令ヲ發セリ此ノ如キ制度ハ信用機關ノ缺乏セル

當國ニ於テハ中央ト地方トノ間ノ資金流通ノ便ヲ與ヘシモノナレ共其實害ノ及フ所大ナルコト多言ヲ要セス又當國ニ於ケル商取引ハ於昔ト稱スル極メテ不完全ナル約束手形ノ受授ニ依リテ行ハレタルモノナルカ往々濫發ニ陷リ易ク且貨幣制度ノ紊亂ハ益取引關係ヲ錯雜不安ナラシメ遂ニ光武八九年明治三十七八年ノ交ニ至リテハ白銅貨ノ濫造於晉濫發ノ爲京城商人間ニ一大恐慌ヲ起シ商民ノ閉店又ハ遁逃スルモノ續出シ人心恟々當路者ニ對シテ救済ヲ求ムルノ聲囂シキニ至レリ

事情此ノ如クナルヲ以テ光武八年明治三十七年十月財政顧問其職ニ就カル、ヤ宿弊ヲ一掃スルト共ニ財界ノ急ヲ救フノ方針ヲ採リ一方ニ於テハ歲計豫算ヲ正シクシ貨幣制度及徵稅制度ノ統一ヲ圖リ全然外劃ヲ廢止シ他方ニ於テハ京城ニ於ケル恐慌ニ對シテ健全ナル救済ノ方法ヲ講ニ又外劃廢止ノ爲ニ起ルヘキ地方金融ノ梗塞ヲ緩和シ併セテ産業ノ興起小農民ノ發達ヲ期スルノ施設ヲ爲セリサレハ現在金融機關ハ之等ノ方針ニ依リテ設置セラレタルモノナリトス以下當國ニ於ケル金融機關ヲ概說セントス

## 第二節 漢城共同倉庫株式會社及手形組合

一 漢城共同倉庫株式會社

前ニ達ヘタル光武八年(明治三十七、八年)ノ交ニ於ケル京城商人間ノ恐慌ハ其及フ處甚タシク當時韓民倉庫相集リテ金融ノ逼迫ヲ疾呼シ商人ハ空シク貨物ヲ擁シテ資金融通ノ途ヲ失ヒ共ニ政府ノ扶助救済ヲ瞻望セリ此ニ於テ政府ハ從來ノ例ニ倣フヲ妄リニ一時ノ下賜金ヲ下附スルコトヲ爲サス光武九年(明治三十八年)九月共同倉庫章程ヲ發布シ同年十二月拾五萬圓ノ資金ヲ貸下ケ政府ノ特別監督ノ下ニ漢城共同倉庫株式會社ヲ設立セシメ貨物ノ寄託ヲ引受ケ預證券ヲ發行シ主トシテ商品擔保貸付ヲナスト共ニ財界ノ急ニ應スル爲メ商業手形ノ割引竝ニ不動產擔保貸付後ニ至リ不動產擔保貸出ハ中止セシメタリ)ヲ兼營セシメタリ爾後政府ヨリ多大ノ補助ヲ與ヘタルト共ニ同社ハ仁川、江景、平澤ニ出張所ヲ設ケ業務歲ト共ニ發達セリ現今同社ノ使用セル倉庫ハ本店及出張所ヲ合シテ十八棟、建坪千二百坪餘ニ及ヘリ今本會社ノ營業一覽表ヲ示サハ左ノ如シ

漢城共同倉庫株式會社一覽表 隆熙四年(明治四十三年)六月末現在

公稱資本金	拂込資本金	政府貸下金	積立金及繰越金	貸出金	支店及出張所數
1,000,000圓	5,000,000圓	28,000,000圓	5,000,000圓	11,000,000圓	出張所 三

二 手形組合

當國ニ於テハ從來金融ノ媒介者トシテ於晉ナルモノ流通セシハ前述ノ如シ然リト雖モ於晉ノ信用手形トシテ不完全ナリシト且之カ濫發ノ弊トハ白銅貨ノ濫造ト相俟ツテ經濟界ニ大恐慌ヲ起シタルヲ以テ於晉ノ撲滅ヲ計リ之ニ代テ完全ナル商業手形ノ流通ヲ企圖セサルヘカラストナシ光武九年(明治三十八年)九月手形組合條例及約束手形條例ヲ發布シ翌年十一月手形條例ヲ制定シ光武九年(明治三十八年)十二月京城ノ有力ナル商民ヲ網羅シテ手形組合ヲ組織セシメ組合員ノ發行スル手形ニハ組合カ支拂保證ヲ爲スコト、シ以テ手形ノ流通ヲ獎勵セリ爾後平壤、大邱、晉州、全州、光州、各銀行ニ於テ最モ低歩ニ割引セラレ人民ナシテ真正ノ手形ノ效用ヲ周知セシムルニ至レリ今左ニ手形組合事業一覽表ヲ示セハ左ノ如シ

各手形組合一覽表

隆熙四年(明治四十三年)六月末現在

一六六

手形組合名	基 本 金	政府貸下金	積立金及 前期繰越金	借 入 金	保證現在高
漢城手形組合	1,000,000		1,000,000		1,000,000
平壤手形組合	800,000		800,000		800,000
大邱手形組合	800,000		800,000		800,000
全州手形組合	800,000		800,000		800,000
晉州手形組合	800,000		800,000		800,000
光州手形組合	800,000		800,000		800,000
計	5,000,000	5,000,000	5,000,000	5,000,000	5,000,000

第三節 普通銀行

當國ニ於ケル普通銀行ハ天一銀行、漢城銀行、韓一銀行ノ三行ニシテ皆京城ニ本店ヲ有ス

一 天一銀行

天一銀行ノ創立セラレタルハ開國五百四年(明治二十八年)ナリシモ其理事者ハ經營ノ方法ニ通曉セス常ニ政客ノ勢力ニ利用セラレ且ツ貨幣制度混

亂シテ韓貨ノ相場日々亂高下ヲ呈シ業務ノ執行次第ニ困難トナリ遂ニ光武九年(明治三十八年)京城ノ恐慌ニ際シテ閉店セントスルノ悲境ニ陥リシヲ以テ政府ハ貳拾四萬圓ノ貸下金ヲ交附シテ度支部ノ監督ノ下ニ整理ヲ了セシメ爾後資本金ノ増加ヲ爲シ業務ノ發展ト共ニ一昨年南大門ニ出張所ヲ設ケ益盛大ニ赴キツ、アリ

二 漢城銀行

光武三年(明治三十二年)第一銀行監督ノ下ニ設立セラレタルモノナレトモ同九年(明治三十八年)ノ恐慌ニ逢ヒ資金固定シ營業困難ヲ告ケシヲ以テ政府ハ拾萬圓ノ貸下ヲ爲シ今や度支部監督ノ下ニ業務逐年繁忙トナリ水原及東幕ニ支店、出張所ヲ設クルニ至レリ

三 韓一銀行

光武十年(明治三十九年)八月ノ開業ニシテ元來財政顧問ノ財政々策ニ對抗セル京城韓人實業家ノ創設ニ係ルモノナレ共時運ノ進歩ト共ニ漸次政府ノ方針ニ對スル誤解ヲ去リ現今度支部ノ監督ノ下ニ天一銀行、漢城銀行ト相並ンテ京城及其附近ノ金融ノ疏通ニ便益ヲ加フル處大ナリトス而シテ

同行ハ全然韓人ノミニ依リテ組織經營セラル、ト雖モ營業ノ狀況近來大  
 イニ見ルヘキモノアリテ東幕ニモ出張所ヲ有スルニ至レリ今之等諸銀行  
 ノ營業ノ狀況ヲ表示スレハ左ノ如シ

## 普通銀行一覽表

陸曆四年明治四十三年六月末現在

銀行名	公積資本金	拂込資本金	政府貸下金	預立金及 前期繰越金	預メ金	貸出金
天一銀行	800,000,000	118,000,000	1,000,000,000	6,400,000,000	6,800,000,000	6,800,000,000
漢城銀行	800,000,000	100,000,000	1,000,000,000	6,400,000,000	6,800,000,000	6,800,000,000
韓一銀行	800,000,000	118,000,000	1,000,000,000	6,400,000,000	6,800,000,000	6,800,000,000
計	1,100,000,000	336,000,000	1,000,000,000	19,200,000,000	19,200,000,000	19,200,000,000

## 第四節 農工銀行

財政整理以前ニ在リテハ前述ノ如ク觀察使、郡守等ハ皆公金ヲ融通シテ地  
 方金融ヲ緩和セシモ其弊害甚大ナリシヲ以テ外割ヲ廢止シタルカ政府  
 ハ之ニ依リテ起ルヘキ地方金融ノ逼迫ヲ慮リ先ツ全國樞要ノ地ニ政府倉  
 庫ヲ建設スルノ計畫ヲ立テ米穀擔保貸付ヲ主トシテ特別事情アル處ニテ

ハ不動産擔保貸付ヲ許スノ方針ナリシカ倉庫ノ建設ニハ時日ヲ要スルヲ  
 以テ之カ設備ヲ俟タスシテ資金ヲ全國樞要ノ地ニ駐在セル財務官ニ交付  
 シ貸出ヲ開始セリ然レトモ是レ一時ノ急ヲ濟ハントスルノ施設ニ外ナラ  
 サリシヲ以テ人心ノ漸ク靜平トナルニ及ヒ地方產業ノ興起竝ニ金融ノ疏  
 通ニ對スル根本の方策ヲ確立シ光武十年明治三十九年三月農工銀行條例  
 ナ發布シ翌月ヨリ之カ設立ニ著手シ或ハ政府ニ於テ株式ヲ引受ケ又ハ無  
 利子貸下金ヲナシ全國各觀察道所在地ニ一箇所宛ノ本店ヲ設置セシカ後  
 ニ至リ經濟交通ノ點ヲ斟酌シテ併合ヲ行ヒ現今全國ヲ通シテ本店ハ京城、  
 平壤、大邱、全州、光州及元山ノ六箇所ニ置カレ之カ支店出張所ハ二十七箇所  
 ナ有スルニ至レリ其業務ノ要項左ノ如シ

- 一、年歩又ハ定期償還ノ方法ニ依リ不動産ヲ典當トシテ貸付ヲ爲ス
- 二、法令ヲ以テ組織セラレタル公共團體ニ對シ無擔保ニテ前項ノ貸付ヲ  
爲ス

三、二十人以上ノ農業者又ハ工業者カ申合ヒ連帶責任ニテ借用ヲ申出ダ  
 ルトキハ其信用確實ナル者ニ限り五箇年以内ニ於テ定期償還ノ方法

ニ依リ無典當ニテ貸付ヲ爲ス  
尤モ前數項ノ貸付ハ開墾排水灌溉及耕地土質ノ改良殖林事業等ノ農工業  
ノ爲ニ使用スルモノナルコトヲ必要トス尙ホ農工銀行ハ當國ノ現狀ニ應  
スル爲メ商業手形ノ割引竝ニ爲替預金等普通銀行業務ヲ兼營スルコトヲ  
得セシメタリ

農工銀行ノ設立ト共ニ前記政府倉庫ノ殘務ハ概ネ之ニ引繼カシメ尙ホ政  
府ハ貨物集散ノ要地ニ倉庫ヲ建設シテ之ヲ農工銀行ノ貸付ケ倉庫ノ兼營  
ヲモ許可スルコト、セリ今農工銀行ノ營業狀況ト農工銀行貸下倉庫ノ一  
覽表ヲ示セハ左ノ如シ

一 農工銀行一覽表

隆熙四年(明治四十二年)六月末日現在

銀行名	所在地	公稱 資本金	拂込 資本金	積立金	預金	貸出金	農工銀行 券發行高	政府 貸下金	支張所 數
漢湖農工銀行	京 畿 廣 城 府	200,000 圓	140,000 圓	20,000 圓	80,000 圓	150,000 圓	100,000 圓	30,000 圓	七
平安農工銀行	平安南道平壤府	100,000 圓	100,000 圓	30,000 圓	20,000 圓	100,000 圓	100,000 圓	30,000 圓	六
慶尚農工銀行	慶尚北道大邱府	100,000 圓	100,000 圓	20,000 圓	20,000 圓	100,000 圓	100,000 圓	30,000 圓	五

全州農工銀行	全羅北道全州府	100,000 圓	100,000 圓	20,000 圓	20,000 圓	100,000 圓	100,000 圓	30,000 圓	二
光州農工銀行	全羅南道光州府	100,000 圓	100,000 圓	20,000 圓	20,000 圓	100,000 圓	100,000 圓	30,000 圓	三
咸鏡農工銀行	咸鏡南道元山	100,000 圓	100,000 圓	20,000 圓	20,000 圓	100,000 圓	100,000 圓	30,000 圓	四
合 計		1,000,000 圓	1,000,000 圓	200,000 圓	200,000 圓	1,000,000 圓	1,000,000 圓	300,000 圓	二七

二 農工銀行貸下倉庫一覽表 隆熙四年(明治四十二年)六月末日現在

所在地	棟 數	坪 數	貸 付 銀 行
平 壤	三	一六四	安 行
大 邱	三	二四〇	慶 行
光 州	一	八〇	尙 行
榮 浦	三	八〇	農 行
開 城	一	三一	湖 行
沙 利	一	三六	平 行
全 州	一	五〇	安 行
計	一三	六八〇	農工銀行

第五節 地方金融組合

地方小農民間ノ金融ヲ緩和シ農業ノ發達ヲ企圖スルハ何レノ國ニ於テモ必要トスル處ナルカ殊ニ當國ノ如キ數十年來稅政ノ下ニ困憊セル細民ヲシテ生計ノ餘裕ヲ得セシメ地方生産力ノ發達ヲ計ルハ經濟發展上最モ急務トスル所ナルヲ以テ光武十一年明治四十年五月地方金融組合規則ヲ制定シ爾後豫算ノ許ス限リ各地ニ地方金融組合ヲ設立セシムルコト、シ政府ハ各組合ニ對シテ基本金壹萬圓ヲ無利子ニテ貸下ケ理事ヲ推薦シ二三組合ヲ通シテ農業技手一名宛ヲ配付シ其監督指導ニ當ラシム同組合ハ一郡或ハ二三郡ヲ其區域トシ域内ニアル韓人ニシテ農業ヲ營ム者ヲ以テ其組合員トシ組合員ニ對シテハ一人五拾圓ヲ限度トシテ農工業小資金ノ融通ヲ與ヘ其他生産物ノ委託販賣必需品ノ共同購入ヲ取扱ヒ尙貨物集散ノ地ニアル組合ハ政府補助ノ下ニ倉庫ヲ建設セシメテ米穀擔保貸付ヲ獎勵セリ現今既設組合百箇所ニシテ設立計畫中ノモノ三十箇所アリ業務ノ成績歲ト共ニ大イニ見ルヘキモノアリテ當初ノ目的ハ著々トシテ現實セワレツ、アリ而シテ將來組合ノ發達ト共ニ各地農工銀行トノ聯絡ヲ密ニシ爲替並ニ預金等ヲ取扱ハシムルノ計畫ニテ目下之カ調査中ナリトス今各

地方金融組合ノ狀況ヲ表示スレハ左ノ如シ

地方金融組合一覽表

隆熙四年(明治四十三年)四月末日現在

道名	組合數	組合員數	貸付金現在高	共同購入高	委託販賣高
京 畿 道	八	三三、四九六	五、三三三、三三〇	—	—
江 原 道	七	三三、二一六	四、〇九八、九〇〇	—	—
忠 清 南 道	一〇	三〇、〇八四	六、〇四九、四〇〇	五、九二〇	八、八八〇
忠 清 北 道	一〇	一七、七〇〇	三、〇三三、〇〇〇	七、四〇〇	一、〇〇〇
全 羅 南 道	一〇	二五、〇一七	九、九八八、八〇〇	三、四四〇	二、四〇〇
全 羅 北 道	九	三三、四九六	九、一八八、八〇〇	—	三、四四〇
慶 尙 南 道	九	三三、四九六	四、〇四九、四〇〇	八、八八〇	三、四四〇
慶 尙 北 道	一〇	三〇、〇八四	六、〇四九、四〇〇	一、四四〇、二五〇	一、〇〇〇
咸 鏡 南 道	一〇	二五、〇一七	五、一八八、八〇〇	—	一、〇〇〇
咸 鏡 北 道	一〇	二五、〇一七	五、一八八、八〇〇	—	一、〇〇〇
平 安 南 道	一〇	二五、〇一七	五、一八八、八〇〇	—	一、〇〇〇
平 安 北 道	一〇	二五、〇一七	五、一八八、八〇〇	—	一、〇〇〇
黃 海 道	七	三三、四九六	五、三三三、三三〇	二、八八〇	—

第六節 韓國銀行

當國ニ於ケル國庫金ノ出納、銀行券ノ發行其他中央銀行業務ハ從來株式會社第一銀行京城總支店ヲシテ之ヲ取扱ハシメタルモ近年財政ノ膨脹、經濟ノ發展ニ伴ヒ金融ノ中樞タル中央銀行設立ノ必要甚タ切ナルモノアルヲ以テ遂ニ隆熙三年明治四十二年初秋韓國銀行ヲ設立シ十一月ヨリ業務ヲ開始セシメタリ是ニ於テ當國金融機關ノ施設ハ漸ク大成セラレタリト云フヘシ

韓國銀行ハ中央銀行トシテ國庫金ノ出納、銀行券ノ發行ヲナスノ外尙左ノ營業ヲ爲ス

- 一、爲替手形其他商業手形ノ割引
- 二、平常取引スル諸會社、銀行又ハ商人ノ爲手形代金ノ取立
- 三、爲替及荷爲替
- 四、確實ナル擔保アル貸付
- 五、諸預り金及當座貸越勘定

六、金銀貨貴金屬及諸證券ノ保護預り

七、地金銀ノ賣買及貨幣ノ交換

尙ホ政府ノ認可ヲ受クルトキハ公共團體ニ對シ無擔保貸付ヲ爲スコトヲ得營業ノ都合ニ依リテハ國債證券地方債券其他確實ナル有價證券ヲ買入ル、コトヲ得ルモノトス

今ヤ韓國銀行ハ京城ニ本店ヲ有シ全國各樞要ノ地ニ於ケル支店出張所ヲ合シテ十三箇所アリ益其業務ヲ擴張シ金融機關ノ中樞トシテ全國經濟界ヲ緩和スヘキ任務ヲ遂行シツ、アリ今韓國銀行業務ノ狀況ヲ表示スレハ左ノ如シ

韓國銀行一覽表

隆熙四年(明治四十三年)六月末日現在

公積資本金	拂込資本金	積立金	政府貸下金	預金	貸付金	銀行券發行高	支店出張所
100,000,000 圓	100,000,000 圓	1 圓	100,000,000 圓	100,000,000 圓	100,000,000 圓	100,000,000 圓	2 支店

第七節 日本側銀行

以上述べタル各種金融機關ハ悉ク當國政府又ハ人民ノ創設ニ係ルモノナルカ之等ノモノ、外尙ホ特ニ記述セサルヘカクサルハ日本側ニ屬スル各銀行ナリトス現今當國ニ於ケル日本側銀行ハ第一銀行十八銀行第百三十銀行、周防銀行及密陽銀行ニシテ獨リ密陽銀行ハ貯蓄銀行ニシテ慶尙北道密陽ニ其本店ヲ設置セルモ其他ノ銀行ハ皆普通ノ商業銀行ニシテ日本ニ本店ヲ有シ韓國ニ在ルモノハ其支店又ハ出張所ナリ元來之等ノ銀行ハ其初京城及各開港地ニ在ル在留日本人ノ金融ヲ計ル爲メ設置セラレタルモノナレ共今ヤ韓國人、清國人等ニモ廣ク取引先ヲ有シ且當國各開港地ノ啓發ハ實ニ之等日本側各銀行ニ負フ所大ナリト云フ得ヘシ尙ホ日本興業銀行ハ韓國國債ノ引受、民團ニ對スル貸付、農工債券ノ應募等ノ爲メ京城ニ支店ヲ設ケタリシモ韓國銀行ノ設立ト共ニ業務ヲ之ニ委託シ該支店ヲ撤去スルニ至レリ

日本側銀行中特種ノ沿革ヲ有スルモノハ第一銀行ナリ同行ハ開國四百八十七年明治十一年五月釜山ニ初メテ支店ヲ設ケ爾後元山仁川京城等ニ支店又ハ出張所ヲ設ケシカ日清戰爭中ハ日韓兩政府ノ爲メニ功績少ナカラ

ス次テ光武九年(明治三十八年)一月ヨリ韓國政府ノ委託ニ依リテ國庫金ノ出納貨幣整理事務ノ取扱ヲ爲シ韓國政府ハ同行ノ發行スル銀行券ノ法貨タルコトヲ認メ同年三月日本政府ハ特ニ勅令ヲ以テ第一銀行京城支店ノ銀行券發行ノ特權ヲ認メ韓國ニ於ケル中央銀行タルノ任務ヲ遂行スヘキコトヲ命セリ翌年五月京城支店ヲ韓國總支店ト改稱スルニ至リ日韓兩國ノ爲ニ財政及金融ノ上ニ貢獻スル處尠カラサリシカ隆熙三年(明治四十二年)韓國銀行ノ創設ト共ニ中央銀行業務ヲ全ク之ニ引繼ギタリ今日日本側諸銀行ノ狀態ヲ表示スレハ左ノ如シ

日本側銀行一覽 △印ハ借

隆熙四年(明治四十三年)六月末現在

銀行名	韓國ニ於ケル支店出張所數	公積資本	資本金又ハ韓國支店元金	預金	貸出金	所有物	借入金及爲替貸借	遊金	金
第一銀行	八	10,000,000	1,000,000	1,200,000	1,200,000	1,112,000	2,600,000	2,600,000	2,600,000
十八銀行	二	100,000,000	1,700,000	17,200,000	2,500,000	3,000,000	2,500,000	2,500,000	2,500,000
第百三十銀行	五	100,000,000	1,000,000	1,700,000	2,500,000	3,000,000	2,500,000	2,500,000	2,500,000
周防銀行	一	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
密陽銀行	一	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000



[illegible]

輸出貿易ハ光武七年明治三十六年即チ戰役前ニ在テハ主トシテ米大豆人  
參等農產物ノ豐凶如何ニ依リテ増減シ光武八九年明治三十七八年ハ戰役  
ノ爲稍々減退ヲ示シタルモ同十年明治三十九年ハ著シク恢復ノ緒ニ就キ  
而シテ隆熙元年明治四十年以後ハ連年農產ノ豐作ナリシト海外販路ノ擴  
張農鑛水產等ノ發達ニ伴フ輸出貨物ノ増加京義鐵道ノ輸送開始港灣ノ改  
良沿岸航路ノ發達道路ノ改築等ニ依リ輸出額ニ激増シ之ヲ光武十年明治  
三十九年以前ニ比スレハ隆熙元年明治四十年以後ハ各年殆ト二倍以上ニ  
達スルノ好況ヲ呈セリ

輸入貿易ハ光武六年明治三十五年以前ノ三箇年ハ鑛山用品京仁間鐵道用品及日本人其他居留外國人ノ需用品ヲ含ムモ其大部分ハ韓人向綿布等ノ

布帛竝ニ飲料品等ニシテ千百萬餘圓ヨリ千四百餘萬圓ノ間ニブリシカ  
光武七年明治三十六年ハ巨額ノ京釜鐵道材料ノ輸入セラレタルト米ノ主  
產地タル南韓地方凶作ノ爲米雜穀ヲ併セテ百五拾餘萬圓ノ輸入アリタル  
等ニ依リ前三箇年ニ比スレハ數百萬圓ヲ増加シテ千八百萬圓臺ニ上リ次  
テ光武八年明治三十七年以降ハ日露戰役ニ繼キ韓國ノ施政改善竝ニ產業  
ノ狀態革マリ輸入貿易ノ増進著シク今之カ原因ヲ區別説明スレハ仍テ(一)  
鐵道敷設電信電話ノ架設水道港灣竝ニ海陸聯絡ノ設備等ニ件フ材料及消  
耗品ノ輸入増加シタルコト(二)日韓官衙ノ新設日本軍隊ノ駐屯ニ件フ建築  
材料及需要品ノ増加シタルコト(三)在住日本人ノ激增ニ件フ食料品衣類其  
他輸入ノ増加シタルコト(四)海陸交通機關ノ發達ニ依リ著シク需要ヲ増進シ  
國品ノ購買ヲ容易ナラシメ一面勞銀ノ增收等ニ依リ著シク需要ヲ増進シ  
タルコト(五)日韓間鐵道聯絡線開通開始其他關稅制度ノ改善竝ニ清津港ヲ開  
放シタルコト等輸入貿易ヲ促進セシムヘキ幾多重要ノ原因相繼ギシ爲連  
年非常ノ増加ヲ來シ戰役以前ノ輸入年額壹千萬圓臺ノモノ一躍シテ參千  
萬圓以上四千百萬圓ニ達スルノ好況ヲ呈セリ

第二節 金銀及正貨ノ輸出入

輸出ハ專ツ當國ニ探掘セラル、金塊又ハ砂金ニシテ年額約四百萬圓乃至六百萬圓ヲ示シ輸入ハ金銀貨幣並ニ銀塊馬蹄銀並ニ日本舊圓銀ヲ含ムヲ主トシ其價額ハ銅貨ヲ併スルモ尙ホ貳參百萬圓ヲ出テス即チ年々流出超過ノ趨勢ナリトス左ニ既往十箇年ノ輸出入額ヲ掲ケテ參考ニ資ス

年次	輸出	輸入
光武四年 (明治三十三年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 五年 (明治三十四年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 六年 (明治三十五年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 七年 (明治三十六年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 八年 (明治三十七年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 九年 (明治三十八年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 十年 (明治三十九年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 十一年 (明治四十年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 十二年 (明治四十一年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 十三年 (明治四十二年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 十四年 (明治四十三年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 十五年 (明治四十四年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 十六年 (明治四十五年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 十七年 (明治四十六年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 十八年 (明治四十七年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 十九年 (明治四十八年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 二十年 (明治四十九年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 二十一年 (明治五十年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 二十二年 (明治五十一年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 二十三年 (明治五十二年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 二十四年 (明治五十三年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 二十五年 (明治五十四年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 二十六年 (明治五十五年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 二十七年 (明治五十六年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 二十八年 (明治五十七年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 二十九年 (明治五十八年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 三十年 (明治五十九年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 三十一年 (明治六十年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 三十二年 (明治六十一年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 三十三年 (明治六十二年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 三十四年 (明治六十三年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 三十五年 (明治六十四年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 三十六年 (明治六十五年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 三十七年 (明治六十六年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 三十八年 (明治六十七年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 三十九年 (明治六十八年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 四十年 (明治六十九年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 四十一年 (明治七十年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 四十二年 (明治七十一年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 四十三年 (明治七十二年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 四十四年 (明治七十三年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 四十五年 (明治七十四年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 四十六年 (明治七十五年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 四十七年 (明治七十六年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 四十八年 (明治七十七年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 四十九年 (明治七十八年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 五十年 (明治七十九年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 五十一年 (明治八十年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 五十二年 (明治八十一年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 五十三年 (明治八十二年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 五十四年 (明治八十三年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 五十五年 (明治八十四年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 五十六年 (明治八十五年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 五十七年 (明治八十六年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 五十八年 (明治八十七年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 五十九年 (明治八十八年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 六十年 (明治八十九年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 六十年 (明治九十年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 六十年 (明治九十一年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 六十年 (明治九十二年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 六十年 (明治九十三年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 六十年 (明治九十四年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 六十年 (明治九十五年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 六十年 (明治九十六年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 六十年 (明治九十七年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 六十年 (明治九十八年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 六十年 (明治九十九年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇
同 六十年 (明治一百年)	金銀及正貨 四九、〇〇〇、〇〇〇	金銀及正貨 二八、〇〇〇、〇〇〇

同 三十二年 (明治五十二年)	四二、二二五、六六六	一、二四四、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇	四二、二二五、六六六	一、二四四、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇
-----------------	------------	-----------	-----------	------------	-----------	-----------

第三節 貿易額ノ開港別

當國各開港ノ貿易上ニ於ケル地位ヲ觀察スルニ輸出貿易ニ在テハ首位ヲ占ムルモ、ハ釜山港ニシテ總額ノ三割二分ニ當リ仁川、鎮南浦、群山等之ニ次ギ輸入ニ在テハ仁川港首位ニシテ常ニ總額ノ三割乃至四割ニ當リ釜山、ハ二割二分内外ニシテ京城、鎮南浦、元山等之ニ次ク今其比較ヲ明カニスル爲左ニ最近兩年ノ比數千分ノ按分比ヲ掲ク

港名	輸出	輸入	計	輸出	輸入	計
仁川	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇
釜山	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇
鎮南浦	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇
京城	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇
群島	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇
木浦	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇

馬	清	城	新	合
山	義	義	義	計
浦	津	津	州	計
九	二	二	五	一
六	九	三	三	一
二	六	九	三	一
〇	六	九	三	一
〇	六	九	三	一
〇	六	九	三	一
〇	六	九	三	一
〇	六	九	三	一

第四節 貿易額ノ通商國別

當國トノ通商各國ニ於テ最モ關係ノ密接ナルモノハ日本ニシテ常ニ總額ノ六割五分内外ヲ占メ支那英吉利之ニ次キ各一割三四分ニ當リ其他北米合衆國露領亞細亞等ハ併セテ二割内外ニ相當ス今最近隆熙二三兩年明治四十一、二二年ニ就キ其割合ヲ比數千分ノ按分比表示スレハ左ノ如シ

國名	隆熙三年(明治四十二年)	隆熙二年(明治四十一年)
日本	七四四	六六六
支那	二七二	二四四
英吉利	二二二	二二二
北米合衆國	一七二	一七二
露領亞細亞	一六六	一六六
其他	一六六	一六六
總計	一六六	一六六

國名	隆熙三年(明治四十二年)	隆熙二年(明治四十一年)
日本	七四四	六六六
支那	二七二	二四四
英吉利	二二二	二二二
北米合衆國	一七二	一七二
露領亞細亞	一六六	一六六
其他	一六六	一六六
總計	一六六	一六六

更ニ主要通商國ニ就キ輸出入品ノ内容ヲ記述スレハ左ノ如シ  
日本へ輸出重要品、米、大麥、小麥、大豆、小豆、荳胡麻子、魚類、牛

脂、棉花、鐵礦、黑鉛、石炭、無煙炭、銅、牛皮、生牛、海羅、肥料、用、乾魚等

日本ヨリ輸入重要品、食鹽 果實 醬油 砂糖及精糖 清酒 麥酒 打  
綿 綿織絲 シーナンヅ 天竺布 木綿 肌衣 洋紙 半紙及美濃紙  
書籍雜誌 煙草 石炭 陶器及磁器 鐵道枕木 木材及板 齒以 セ  
メント マツナ 洋傘等  
支那へ輸出重要品、米 大豆 魚類 海參 人蔘 石炭無煙炭 牛皮  
木材類 薪材 紙 生牛等  
支那ヨリ輸入重要品、食鹽 支那酒 縹綿 麻布 絹布 紙卷煙草 石  
炭 木材類等  
北米合衆國へ輸出重要品、金鑽其他  
北米合衆國ヨリ輸入重要品、小麥粉 煉乳 鹹魚 石油 蠟燭 シーナ  
ンヅ 熟鐵 軌條 鐵道機關車、客車及貨車 紙卷煙草 其他  
露領亞細亞へ輸出重要品、米 生牛 其他  
露領亞細亞ヨリ輸入重要品、鹹魚 石油等  
英吉利ヨリ輸入重要品、シーナンヅ 生金巾 晒金巾 雲齋布 綿縐子  
綿イタリアンス 寒冷紗 畝織綿布 羅紗及セルヂス 鐵條及竿 鐵

板 鐵管 鐵道機關車、客車及貨車 紙卷煙草其他  
佛蘭西ヨリ輸入重要品、バター 葡萄酒 化粧用品等  
獨逸ヨリ輸入重要品、砂糖及精糖 アニリン染料 熟鐵 鋼條竿及板  
鐵道機關車其他

蘭領印度ヨリ輸入重要品、砂糖及精糖 石油其他  
白耳義ヨリ輸入重要品、蠟燭 膠玻璃片其他  
香港ヨリ輸入重要品、砂糖及精糖 セメント其他  
英領印度ヨリ輸入重要品、蠟燭 錫 其他  
露西亞ヨリ輸入重要品、更紗 毛綿交織布等  
而シテ以上ノ内歐米諸國ヨリ輸入スルモノハ未タ是等ノ諸國ト當國間ニ  
直航ノ船便ナキヲ以テ石油等ヲ除ケハ他ハ概ネ一旦上海長崎橫濱神戸門  
司等ニテ仲繼セラレ若ハ日本ニテ納稅輸入後當國ニ再輸セラル、モノニ  
係ル

### 第三編

#### 第一章 財産整理

前述ノ如ク當國財政ノ紊亂ハ宮中府中ノ混同ニ淵源シタルモノ多ク就中宮中財政ノ紊亂ハ實ニ其素因ヲ爲シタルモノト云フヘキナリ今本章ニ於テ敘述スル所ノモノハ宮中財政整理ノ一部ニ屬スル帝室有不動産ノ整理及帝室債務整理ノ梗概ナリトス

##### 第一節 帝室有不動産ノ整理

開國五百四年(明治二十八年)宮内府官制發布セラル、ヤ新ニ内蔵司ナルモノヲ置キ帝室世傳莊園其他ノ財産ヲ管掌セシムルコト、ナリタリ内蔵司ハ後内蔵院又經理院ト改稱シ其管掌事項漸次擴張セラレ幕政、管稅、文應種牧、鑛業等ノ各般ニ涉ルコト、ナリタリ經理院管掌事項ノ擴張ハ帝室收入ノ増加ヲ意味シ帝室收入ノ増加ハ即チ國庫收入ノ減少ヲ意味ス加之一面ニ於テハ宮中ニ幾多無用ノ機關ヲ設置シテ徒ニ冗費ヲ増加シ又祀祭費、交際費等ヲ濫費シテ經費ヲ膨脹セシメタル爲倍々收入増加ノ必要ヲ生シ或

ハ薄弱ナル根據ニ依リ世襲ノ民田ヲ掠奪シ或ハ改量ト稱シテ莊園中ニ附近ノ民田ヲ混入スル等苛察暴虐唯收入ノ増加ニノミ是レ努メタルモノ、如シ然レトモ其局ニ當ル官吏ノ忠實ヲ缺キタルト經營方法其宜シキヲ得ナル爲メ煩ヲ國庫ニ及ホシタル外帝室ニ於テモ亦爲ニ著シキ收入ノ増加ヲ得ルニ至ラザリシカ如シ故ニ光武九年(明治三十八年)十二月宮内府ニ帝室ニ關スル一切ノ財用及經濟事業ヲ審議講究スル爲メ帝室財政會議ノ制度ヲ立テ光武十年(明治三十九年)二月ニハ制度局職務章程ヲ制定シテ帝室財政會議ニ提出スヘキ議案編製ノ事務ヲ掌ル機關ヲ設ケ又光武十一年(明治四十年)六月ニハ宮内府令第三號ヲ以テ帝室財産ヲ整理スル爲メ制度局ニ臨時整理部ヲ設置シ以テ之等無謀ノ經營ヲ矯正セントセリ

又帝室ノ内需及祭享ノ資ニ充ツル爲メ帝室特別ノ機關トシテ内需司明禮宮、壽進宮龍洞宮於義宮、景祐宮毓祥宮宣禮宮ノ所謂一司七宮ナルモノアリ内需司ハ開國ノ當初ヨリ其他ハ開國以後漸次増置セラレタルモノナルカ經理院ト併立シテ各獨立ノ財産ヲ管理シ帝室所要ノ物品供進及祭享ヲ司リタルモノナリ一司七宮ノ管理シタル財産ハ田畝ヲ主トシ該田畝ハ宮庄土

ト唱ヘ開國五百三年(明治二十七年)以前ニアリテハ國稅ヲ免除セラル、特典ヲ有シタリ宮庄土ノ秋收ニ關シテハ各宮ヨリ直轄シタルモノト導掌ト稱スル特種ノ機關ヲ設ケ間接ニ之ヲ徵收シタルモノトアリ又宮庄土中ニハ投託ト稱シ一個人カ其所有ニ係ル田畑ヲ勢家ノ掠奪ヲ免カレ或ハ免稅ノ目的ヲ以テ宮ニ請託シ宮庄土ノ如ク粧ヒタルモノアリ斯ノ如ク宮庄土ナルモノハ其關係甚ダ錯雜ナ極ムルノミナラス經理院ト同シク民田ノ掠奪混入其他種々ナル弊害ヲ生スルニ至リタレハ遂ニ光武十一年(明治四十年)二月宮内府内ニ各宮事務整理所ヲ置キ一司七宮庄土ノ處理及宮穀上納等ノ事務ヲ管理セシメ宮庄土ノ徵稅上ノ特種機關タル導掌ハ追テ其處分方法ヲ定ムルコト、ナシ先ツ光武十一年(明治四十年)六月ヲ以テ之ヲ廢止セリ

此ノ如ク宮中財産ニ關スル制度錯雜ナ極メ帝室有財産ト國有財産トハ其所屬判明ナラサルヲ以テ之ヲ分離整理スルノ必要ニ迫ラレ光武十一年(明治四十年)七月臨時帝室有及國有財産調查局官制發布セタル該局ハ委員ヲ以テ組織セラレ内閣總理大臣ノ監督ニ屬シ帝室有財産及國有財産ヲ調査

シテ其所屬ヲ判定シ其他之等財産ノ整理ニ關スル凡テノ事務ヲ掌ルヘキ組織及權限ヲ有セリ而シテ其委員ハ各部及宮内府ヨリ任命セラレタリ此機關設置ノ結果宮内府ニ於テ財政ニ關與スヘキ多クノ機關ヲ存置スルノ不必要ヲ認メ先ツ經理院各宮事務整理所及帝室制度局ハ隆熙元年明治四十年十一月限り之ヲ廢止シ同時ニ宮内府ニ帝室財産整理局ヲ設置シ以テ

臨時帝室有及國有財産調査局ニ於テハ隆熙元年明治四十年八月以降十數回ノ委員會ヲ開キ大要左ノ事項ヲ議決セリ

一、宮内府所管ノ土地中明カニ民有ト認ムヘキモノ四十餘件ニ對シ還給處分ヲナスコト

二、宮庄土ノ導掌ハ其性質ヲ判定シ投託導掌ニハ該投託地ヲ還給シ其他ノ導掌ニハ其純收入高ノ三箇年分ヲ交付スルコト

三、宮内府所管及慶善宮所屬ノ一切不動産ハ宮殿太廟ノ基址及本朝陵園墓ヲ除ク外之ヲ國有ニ移屬スルコト

四、漁磯派稅其他宮内府ノ諸稅ノ徵收權ハ一切國庫ニ歸屬スルコト

而シテ前記第三及第四ノ事項ハ隆熙二年明治四十一年六月勅令第三十九號ヲ以テ公布セララル此勅令ニ依リテ帝室債務ノ整理ニ關スル事務ハ宮内府ヨリ分離シ之ヲ舉ケテ度支部大臣ニ委任セラレシカ此主旨ニ基ツキ同年七月勅令第五十五號ヲ以テ臨時財産整理局官制ハ發布セラレ度支部大臣ノ管理ノ下ニ(一)國有ニ移屬セラレタル財産ノ調査及整理(二)之カ爲ニ生スル不動産上ノ權利ニ關スル異議申立ノ審理(三)帝室債務整理及之ニ加ヘテ土地測量ニ關スル事務ヲ處理スルコト、ナリ之ニ依リテ臨時帝室有及國有財産調査局ハ同年六月帝室財産整理局ハ同年八月孰レモ廢止セラレタリ

斯クノ如クシテ度支部内ニ設置セラレタル臨時財産整理局ニ於テハ直ニ宮内府ヨリ事務ノ引繼ヲ受ケ大要左ノ方針ニ基キ之カ調査ニ著手セリ

一、宮内府所管及慶善宮所屬ノ不動産ハ文簿闕如シ所在明確ナラサルモノアルヲ以テ制度變革ノ際ニ乘シ是等ノ不動産ヲ冒認シ又ハ其他ノ不正行爲ヲ豫防スル爲漢城府及各道觀察使ニ對シ其取締方ヲ通牒シ又帝室財産ハ元來原簿ノ設ケナキヲ以テ秋租成冊ニ記載シアル以外

ノ土地家屋等ニ對シテハ局員ヲ派遣シ實地調査ヲ行ヒ悉ク先ツ度支部所管ノ標札ヲ立テ以テ整理上遺漏ナカラシムルコトヲ勵ムルコト  
二、田畑、蘆田及草坪ノ類ハ之ヲ地方財務機關ニ家舍宅地ノ類ハ之ヲ度支部ニ引繼クコト但田畑ノ大部分ハ宮庄土ニシテ其内既ニ隆熙元年明治四十年ヨリ其收租方ヲ度支部ニ委託シタルモノアルヲ以テ宮内府ヨリ引繼ヲ受ケタル收租成冊ヲ整理シテ之ヲ引繼キ以テ秋收上脫漏ナカラシムルコトヲ期スルコト

三、山林原野ハ農商工部ニ引繼クコト但山林原野ニ對シテハ其所在面積ヲモ知ルコト能ハサル現況ナルヲ以テ各財務監督局ニ委嘱シテ其概況ヲ調査シ一面農商工部ニ對シテハ引繼以前ニ於テ山林原野ノ利用ヲ必要トスル場合ハ臨時財產整理局ニ打合ササスコトヲ協議シ漸次之カ引繼ヲ爲スコト

四、陵園墓ノ位土ニ關スル成冊等ハ宮内府ニ存置セサルヲ以テ地方財務機關ヲシテ陵園墓事務所ニ就キ直接受授サナサシムルコト

五、漁磯稅ハ漁磯其ノモノカ帝室有タルニアラスシテ帝室ハ單ニ一種ノ

免許稅ヲ徵收シタルニ過キス其課稅ノ根據モ甚タ明確ナラサルヲ以テ直ニ地方財務機關ニ引繼クコト

六、汰稅ハ堤堰築造ノ費用ヲ帝室ヨリ支出シ用水ノ供給ヲ受クル者ヨリ之ヲ徵收スルモノナリ是亦地方財務機關ニ引繼クコト

七、帝室財產整理局ニ於テハ帝室所屬不動產調査ノ一便法トシテ廣ク賃貸ノ請願ヲ許シ既ニ賃貸契約ヲ結ビタルモノ及請願ヲ受理シ未タ其手續ヲ履行セサルモノアリ之等ハ新規請願ノ受理ヲ中止シテ之ヲ整理スルコト

八、不動產上ノ權利ニ關スル請願ハ或ハ地方財務機關ニ照會シ或ハ直接局員ヲ實地ニ派遣スル等最モ鄭重ナル調査ヲ爲シ還給スヘキモノト否ラサルモノトヲ判定シテ之ヲ處分スルコト

九、不動產上ノ權利ニ關スル請願ノ一部ニ屬スル導掌ノ處分ニ關シテハ證據書類及實地ヲ調査シ臨時帝室有及國有財產調查局ノ決議ヲ以テ閣議ヲ經タル決定ニ基キ之ヲ處分スルコト

大體前記ノ方針ニ依リ爾來著々整理ノ進捗ヲ圖リ既ニ田畑蘆田等約二萬

五千八百町步、山林原野約一萬九千四百町步、家舍約百九十戸、宅地約五十町步ノ引繼ヲ了シ又投託地及混奪入地ニシテ還給スヘキモノ約六百十町步ヲ處分シ尙ホ投託導掌以外ノ導掌ニシテ賜金ヲ交付スヘキモノニ關シテハ數回ノ審理及實地檢査ノ後件數百二十三此金額拾壹萬六千八百九圓ト決シ之ニ就テハ特別ニ導掌資金公債ヲ發行シテ之ヲ下給シ悉ク之カ處分ヲ了セシニ依リ因襲ノ久シキ錯綜シタル帝室財產ノ整理モ今ヤ全ク其終了ヲ告グルニ至レリ

## 第二節 帝室債務整理

光武十一年明治四十年内需司、明禮宮、壽進宮於義宮、龍洞宮、毓祥宮及景祐宮ノ廢止セラルルヤ之等各宮ノ債務ハ宮内府各宮事務整理所ニ於テ整理スルコト、ナリシカ一方從來帝室ヨリ發行セラレタル啓單又準單ニ對シテ支拂ヲ要求スル者及宮殿ノ建築費納付物品ノ代金等ノ支拂ヲ求ムル者續出シタルヲ以テ隆熙元年(明治四十年)十一月宮内府ニ設ケラレタル帝室財產整理局ニ於テ之等一切ノ債務ヲモ整理スルコト、ナリタリ然ルニ帝室ノ負擔ニ屬スヘキ債務ニハ債務ノ原因、金額及債務者ノ不明ナルモノアリ

テ債務ノ總額ヲ知ルヲ得サルト又之等債務ノ中ニハ債務ノ原因タル事實ノ發生、拾數年以前ニ屬シ現在ニ於テハ到底正確ナル證據ヲ蒐集スル能ハサルモノ多キコト判然セシ爲爰ニ特別法制定ノ必要ヲ生シ隆熙二年明治四十一年四月三十日法律第九號ヲ以テ帝室債務ニ關スル件ヲ公布シ本債務ニ關シテハ會計法ノ期滿免除ノ規定ヲ准用シ其出給スヘキ年度經過後滿三箇年內ニ債主ヨリ支出或ハ出給ヲ請求セサレハ政府ハ其義務ヲ免ルルコト、ナシ尙ホ該法施行前ニ生セシ本債務ニ關シテハ同年九月三十日內ニ請求スヘク其請求スヘキ期限ノ到來セサルモノハ其事由ヲ申告スルニアラサレハ其債權ハ效力ヲ失フコト、ナセリ是レ蓋シ受領書又ハ支拂書等ニ關スル證書ノ完備セサリシ時代ニ於ケル舊債務ニ關シ打切計算ヲナス上ニ於テ寔ニ止ムヲ得サル處ナリトス

斯クノ如クシテ宮内府ニ於テハ銳意債務ノ整理ニ著手シタリシモ其未ダ整理ノ緒ニ著カサル前即チ隆熙二年(明治四十一年)六月宮内府所管及慶善宮所屬ノ不動產ヲ國有ニ移屬スルコト、ナリタル結果帝室債務ノ整理モ併セテ之ヲ度支部ニ移スコト、ナリタリ

度支部ニ於テハ國有ニ移屬シタル宮内府所管及慶壽宮所屬不動産並帝室債務ヲ整理スル爲臨時財產整理局内ニ特ニ隆熙二年(明治四十一年)九月勅令第六十八號ヲ以テ帝室債務審査會ヲ設ケ其委員ハ宮内府法部度支部臨時財產整理局勅奏任官及判事檢事ヲ合セテ七名トシ臨時財產整理局長官ヲ委員長トシ幹事及書記ヲ置キ會務ヲ處理セシメ帝室債務ノ審査決定ニ對シテハ必ス審査會ノ決議ヲ經ヘキコト、セリ

元來帝室債務ノ内容ハ物品費工事費下賜金、貸上金及立替金等ナルカ之ヲ大別スレハ各宮債務準單債務雜債務ノ三種ト爲スコトヲ得ヘシ

### 一 各宮債務

各宮債務トハ帝室所要ノ物品供進及祭享ヲ司リシ所ノ内需司、明禮宮審進宮龍洞宮於義宮景祐宮毓祥宮及順和宮ノ債務ノ總稱ナリ元來宮ハ獨立ノ財產ヲ有シ其財產ヨリ生スル收入ヲ以テ總テノ經費ヲ支辨スル制度ナルモ當局官吏ノ經營其宜シキヲ得ザリシト又一面ニ於テ帝室ノ需要逐次増加セシカ爲遂ニ其收入ニ依リ供御調進ノ費用ヲ辨スルコト能ハス年々多額ノ負債ヲ生スルニ至リタルモノナリ

## 二 準單債務

準單債務トハ帝室ニ於テ發行セラレタル所ノ一種ノ手形債務ナリ準單發行權ヲ有セラレシ者ハ皇帝陛下ニシテ仕拂者ハ宮内府ノ財政機關タリシ經理院之ニ當レリ準單ノ形式ハ一定セラレトモ概ネ金額發行年月日仕拂者ヲ明記シ之ニ準字又ハ啓字ノ黑印ヲ押捺セリ稀ニハ債權者ノ氏名ヲ記入シ又ハ債務ノ原因ヲ記入セルモノアルモ之等ハ極メテ少數ナリ而シテ準單債務ノ原因ハ(一)物品ノ納付(二)金錢ノ貸上(三)下賜金ノ三種ナリトス

### 三 雜債務

雜債務トハ各宮債務及準單債務ヲ除キタル其他ノ債務ヲ指シタル總稱ナルカ其主タルモノハ物品納付代金ノ未拂ニ屬スルモノ、宮殿建築工事受負代金、手数料、給料ノ未拂契約不履行ニ基ク損害賠償等ナリトス

帝室債務ノ請求件數ハ總テ六十件ニシテ金額ハ

各宮債務 金六拾萬八千七百貳拾圓貳錢參厘

準單債務 金拾四萬壹千九百六拾五圓四拾七錢

雜債務 金百六拾參萬六千六百拾圓五拾六錢九厘

## 合計

金貳百參拾八萬七千貳百九拾六圓六錢貳厘

ナルカ諸願人ハ單ニ自己ノ有スト稱スル債權額ヲ請求スルニ止マリ其債權原因ノ發生事實及證據ヲ明示セサルノミナラス諸願者本人ヲ召喚シテ推問スルモ答辨甚タ要領ヲ得サルモノ多ク加フルニ宮内府ニ在リテハ之等債務ニ關スル記錄書類ノ殘存セルモノ僅少ナリシト又當國舊時ノ慣習トシテ會計ニ關スル事務ハ賤劣ナル吏輩ノ分掌セシモノナリシヲ以テ債務ニ關スル記錄ハ極メテ信憑力ニ乏シキモノナリシ等ノ爲事件ノ真相ヲ探求スル上ニ於テ鮮カラサル困難ニ逢着シタルモ遂ニ其調査ヲ結了シ常室債務審査委員會ノ審議ヲ經テ之ヲ決定シ決定書ヲ各諸願人ニ交付スルニ至リタリ此決定ニ基キ仕拂ヲ爲シタル金額ハ

各宮債務 金拾八萬壹千五百六拾四圓

準單債務 金拾萬六千四百貳拾七圓四拾九錢五厘

雜債務 金九萬五千八百貳拾壹圓七拾六錢五厘

合計 金參拾八萬參千八百拾參圓貳拾六錢

ニシテ請求總額貳百參拾八萬七千貳百九拾六圓六錢貳厘ニ對シ約一割六

## 分ニ該當ス

是ヨリ先キ帝室債務處分ノ公明ナ期スル爲臨時財產整理局長官ノ處分ニ對シ不服アル者ハ京城控訴院ニ出訴スルコトヲ得セシムルコト、ナシ隆熙二年(明治四十一年)三月法律第十一號ヲ以テ之ヲ公布シタリカ此法律ニ基キ京城控訴院ニ出訴シタルモノハ慶運宮重建役費請求事件外十一件金額五拾貳萬七百七拾六圓拾四錢八厘ナリ然ルニ其内三件ハ新證據ヲ發見セルニ依リ裁判所ノ意見ニ從ヒ和解シ金貳千七百圓ヲ仕拂ヒ其他ノ九件ハ臨時財產整理局ノ勝訴ニ歸シ茲ニ十數年來紛擾ヲ極メタル帝室債務モ全ク其整理ヲ終了スルニ至レリ

## 第二章 土地調査

## 第一節 沿革

## 一 土地調査ノ必要

當國ニ於テハ土地ノ面積ヲ表示スルニ通常水田ハ斗落ヲ用ヒ畑ハ日耕ヲ用ユ一斗落ハ一斗ノ種粃ヲ播下スル廣サヲ示シ一日耕ハ一日間ニ耘シ得ル廣サヲ表ス故ニ單ニ一斗落若ハ一日耕ト稱スルモ地味ノ肥瘠耕耘ノ便否如何ニ依リテ實面積ニ大小廣狹ノ差アルナリ又課税ノ單位ヲ結ト稱ス結ハ土地ノ面積ヲ基礎トシタルモノナレハ是亦一結ト稱スルモ地位等級ノ異ナルニ從ヒ其實面積ヲ異ニスル力故ニ當國ニ於テハ嚴格ニ土地ノ面積ヲ表示スル一定ノ稱呼ナキナリ

又當國ニ於テハ土地ノ賣買ヲ爲スニ當リ單ニ文記ト稱スル私書證書ヲ引渡シ其舊文記アルモノハ之ヲ添附スル外何等ノ手續ヲ要ヒサル慣習ナリ而シテ地方官衙ニハ從來量案ト稱スル簿冊アルモ概ネ修正ヲ爲シアラサルカ故ニ年月ノ經過スルニ從ヒ殆ト其用ヲ爲サス境界ノ紛爭文記ノ偽造

土地冒認等ノ係爭事件アルモ到底其眞僞ヲ判定スルコト能ハサル現況ナリ土地制度ノ現況前記ノ如クナルカ故ニ土地調査事業ノ當國ニ於テ極メテ緊急事タルコトハ言ヲ俟タサル所ナリ光武二年明治三十一年七月量地衙門ヲ創設シ同五年(明治三十四年)十月ニハ別ニ地契衙門ヲ設ケ同六年明治三十五年三月ニハ量地衙門ヲ地契衙門ニ併合シ同八年明治三十七年四月ニハ地契衙門ヲ廢シテ度支部ニ量地局ヲ置キ同九年(明治三十八年)二月ニハ量地局ヲ廢シテ度支部司稅局ニ量地課ヲ設置セリ此間何等效果ノ見ルヘキモノナカリシモ之レ皆土地調査事業ノ必要ニ驅ラレ隨時存廢セラレタルモノナリ然ルニ最後ニ度支部司稅局ニ量地課ヲ設置シタル以來ハ漸次其歩武ヲ進ムルニ至リ遂ニ土地調査事業ノ開始ヲ見ルニ至リタリ

## 二 測量技術者ノ養成

光武八年明治三十七年財政顧問就任ノ後財政ノ基礎ヲ確立スル爲メ地籍ノ整理ヲ行フハ刻下ノ急務ナルコトヲ認メ該事業ヲ完成スルハ人民ニ土地測量ノ必要ヲ知ラシメ兩班ニ其技術ヲ習得セシメ兼ネテ一般ニ技術思想ヲ注入スルニアリト爲シ光武九年明治三十八年六月日人技師ヲ僱聘シ

テ司稅局量地課ニ技術講習ヲ開始シ技手見習者若干名ヲ採用シ速成ノ方法ヲ以テ之ヲ養成セシニ其結果甚タ良好ナリシヲ以テ爾來引續キ之ヲ養成ニ努メタルト同時ニ大邱平壤及全州ニ漸次出張所ヲ開設シ是亦技手見習者ヲ養成セシメタリ

技手見習者ハ一定ノ資格ヲ定メ該資格アル者ノ中ヨリ試驗ノ上採用シ六箇月速成ノ方法ニ依リ卒業者ハ技手又ハ雇員ニ採用スルコト、ナシタリシカ養成期間極メテ短期ナルカ故ニ土地測量術中最モ初歩ノ細部測量ヲ講習シタルニ過キス斯クテハ將來起ルベキ土地調査事業ニ汎ク應用セシムルヲ得サルヲ以テ隆熙元年明治四十年十二月量地課修業規程ナルモノヲ制定シ更ニ其優秀ナル者ヲ選拔シテ圖根及小三角測量術ヲ講習セシムルコト、ナシタリ而シテ光武九年明治三十八年以來養成シタル技術者ノ數ハ總員四百二十人ナリトス

### 三 測量ノ實地練習

技手見習者ノ養成漸次進捗スルニ從ヒ測量實地練習ノ必要ヲ生シ量地課及各出張所トモ其所在地附近ヲ測量スルコト、セリ即チ量地課ニ於テハ

京城龍山ノ市内ヲ隆熙二年(明治四十一年)ニ完成シ大邱出張所ニ於テハ大邱市内ヲ隆熙元年(明治四十年)ニ平壤出張所ニ於テハ平壤市内ヲ隆熙二年(明治四十一年)ニ孰レモ完成シ又全州出張所ニ於テハ全州附近ヲ測量セリ而シテ此等測量ノ圖面ハ府道廳又ハ民團役所等ニ送付シ其參考ニ供シタリ

又此間各部局ノ委囑ニ應シ測量シタルモノ甚タ多シ其重ナルモノヲ舉クレハ鎮海灣平壤義州龍山等ノ軍用地各地ノ鹽田金海ノ蘆田東洋殖殖株式會社引渡國有地及各部建築敷地等ナリトス又隆熙二年明治四十一年以來量地課及各出張所共小三角測量ヲ開始セリ之レ土地調査局ノ開始ヲ待ツテ小三角測量ニ著手スルトキハ他ノ作業執行上影響スル所尠カラサルヲ以テ豫メ之ヲ準備トシテ施行スルノ必要ヲ認メ技術員ノ實地練習ヲ兼テ之ヲ開始シタル所以ナリ

其他地方財務機關ニ於テ施行スル國有地ノ測量ニ從事セシムル等努メテ測量技術ノ練習ヲ積マシムル方針ヲ採リタリ

### 四 測量技術教科書出版

隆熙二年(明治四十一年)九月量地課ニ於テ編纂シタル土地測量術ヲ韓譯シ印刷局ヲシテ之ヲ出版セシメタリ當時民間ニ於テハ測量の技術思想非常ニ勃興シ京城ノ如キハ私立測量學校ノ日ニ月ニ増加スルヲ見ルニ至リタリ然レトモ民間ニ於テハ實用ニ適スル簡易速成ノ良教科書ナキヲ以テ本書ヲ發行シテ其需用ニ應スルハ蓋シ機宜ニ適スルノ處置タルト同時ニ倍々技術思想ヲ普及セシムル所以ナルコトヲ認メタルニ由ル而シテ本書出版後僅々三箇月ニシテ忽チ八千部ヲ賣盡シタルハ當時民間ニ於テ如何ニ測量思想ノ勃興セシカヲ推知スルニ足ルヘシ

### 五 測量規程制定

測量ノ方法ハ最モ慎重ノ考慮ヲ要スル問題ナルヲ以テ經費及成績ノ點ニ鑑ミ臺灣及沖繩ニ於テ施行シタル測量法中最モ良法ト認メタルモノヲ基礎トシ隆熙元年(明治四十年)十二月測量規程ヲ制定セリ但當時ニ在リテハ未タ大三角測量ヲ施行スル能ハサル事情アリタルニ依リ小三角測量ヲ基本トシテ之ヲ編成シ尺度ハ米突法ヲ採用シタルモ隆熙三年(明治四十二年)九月度量衡法ノ改正アリ又大三角測量ヲ施行スルコト、ナリタル結果而

シ當然之カ改正ヲ要スヘキモノトス

### 六 土地調査試行

本調査事業ニ對スル人民ノ意嚮竝地方ノ狀況ヲ考察スル目的ヲ以テ隆熙三年(明治四十二年)十一月京畿道富平郡ノ一部ニ就キ經驗的調査ヲ試行セリ但調査事務員ノ養成ニ關シテハ未タ其時機ニ達セザリシヲ以テ別ニ之爲施設スル所ナカリシモ現在技手中ヨリ二十名ヲ選擇シ特ニ調査事務ヲ講習シテ之ニ充テタリ然ルニ調査試行ノ結果ハ民情極メテ平穩ニシテ何等ノ障礙ナク本年二月外業ノ全部ヲ終了シ豫想以上ノ好成績ヲ擧ゲ得タルカ尙ホ本調査事業ニ關シ將來有益ノ經驗ヲ得タルモ亦鮮少ナサリ

### 七 舊慣調査

土地調査ノ實施ニ當リ各地ノ舊慣ヲ精査スヘキハ言ナ俟タサル處ナリト雖豫メ全國ニ亘リ一般的舊慣ヲ調査スルハ法規ノ制定上最モ緊要ナルヲ認メ地方財務署二百二十八箇所ニ對シ調査スヘキ項目ヲ定メテ之ヲ委託シ又局員ヲ主要ノ地點ニ派遣シテ親シク之カ調査ニ從事セシメタリ而テ

其調査シタル重ナル事項左ノ如シ

- (一)行政區劃及土地ノ名稱 (二)課稅地不課稅地ノ種類及區 (三)境界 (四)地位等級別面積及結數査定ノ慣例 (五)斗落及日耕ノ面積 (六)所有權質權抵當權永久小作權等ニ關スル慣例 (七)賣買價格及賃貸價格 (八)收穫高及收穫物ノ價格並ニ收支計算 (九)土地ニ關スル文書帳簿ノ種類

## 第二節 事業ノ開始

### 一 土地調査ノ計畫及豫算

光武九年明治三十八年二月度支部司稅局ニ設置シタル量地課ハ爾來數回其所屬ヲ變更シ隆熙二年(明治四十一年)一月ヨリ七月迄ハ臨時財源調査局ニ屬シ同年七月ヨリ臨時財產整理局ニ屬セリ而シテ臨時財產整理局時代ニ在リテハ土地調査事業開始ノ時運ニ達シタルヲ以テ同局ニ於テ專ツ同事業開始ニ關スル準備ヲ調ヘ遂ニ本年三月勅令第二十三號ヲ以テ土地調査局官制ヲ公布シ茲ニ初メテ土地調査事業ノ開始ヲ見ルニ至レリ而シテ土地調査ニ要スル費用ハ總費額壹千四百拾貳萬九千七百七圓ヲ要スル七年八箇月ノ繼續事業ナルカ木計畫ハ調査施行段別ヲ二百七十五萬五千町

歩ト見積リ調査員及測量員ハ指導監督ノ任ニ當ル者ヲ除ク外韓人ヲ採用スル計畫ニシテ日本本土、臺灣及沖繩ニ於ケル土地調査ノ實蹟ヲ參酌シ當國ノ現狀ニ照シ之ヲ編成シタルモノナリ其費目別金額左ノ如シ

俸

給 金四百六拾貳萬七千四百九拾貳圓

廳

費 金壹百七拾萬參千貳拾六圓

旅

費 金四百拾四萬九千五百五拾圓

雜給

費 金參百貳萬四千七百七拾六圓

講習

費 金拾壹萬七千七百拾八圓

舍宅

料 金參拾四萬貳千貳百四拾圓

廳舍新築及修繕費

金拾六萬四千八百五圓

合

計 金壹千四百拾貳萬九千七百七圓

而シテ初年度所要額即チ本年度豫算額ハ金五拾九萬九千貳百五拾四圓ナリトス

## 二 土地調査ノ方法

土地調査ノ業務ハ調査事務及測量ニ大別シ測量ヲ大三角測量小三角測量

圖根測量、細部測量ノ四種トナス

調査事務ハ先ツ面境界ヲ調査シ地主ヲシテ土地ノ所在及種目等ヲ申告セシメ次テ地押ヲナシ見取圖ヲ作り所有主及地位等級其他ノ調査ヲ爲スモノトス

大三角測量ハ全國ヲ通シテ施行シ小三角ノ基準點ヲ設定シ

小三角測量ハ大三角測量點間ヲ小部分ニ區分シテ圖根測量ノ基準點ヲ設定シ

圖根測量ハ小三角測量點間ヲ更ニ小部分ニ區分シテ細部測量ノ基準點ヲ設定ス

細部測量ハ圖根測量點ヲ基準トシ見取圖ト實地トニ依リ一筆地ノ形狀ヲ測量シ圖面ヲ調製スルモノトス

### 三 土地調査ノ現況

土地調査法其他本事業ニ必要ナル諸法規ハ臨時財産整理局時代ニ於テ略其準備ヲ了シアリタルカ尙ホ土地調査局ニ於テ更ニ審議討究スルコト、ナシ今尙ホ審議中ニ屬ス

土地調査局ノ職員ハ臨時財産整理局職員ノ全部ヲ任命シ其新タニ採用ス今キモノモ亦略收容シ得タルヲ以テ本年五月下旬ヨリ大三角測量ヲ同六月ヨリ小三角測量及圖根測量ヲ開始シ又續テ調査事務及細部測量ヲ開始セリ大三角測量ハ基線測量ノ一種ニ屬スル對馬、釜山間ノ連絡作業ヨリ著手シ小三角測量ハ京畿道江華郡ヨリ始メ臨時財産整理局時代ノ計畫ヲ蹈襲シ又細部測量及調査事務ハ既ニ小三角測量ヲ終リタル京畿道富平郡ヨリ著手シタルモノナルカ今ヤ漸次其ノ數ヲ増加シ著々事業ノ進捗ヲ圖リツ、アリ而シテ本事業ノ進捗ニ重大ノ關係ヲ有スル韓人事務員及技術員ノ養成ニ關シテハ豫メ充分ノ計畫ヲ確立シ置クノ必要アルカ故ニ學部ト商議協定シ漢城高等學校、漢城外國語學校及大邱、平壤、全州、咸興ノ各道立實業學校ニ別科ヲ特設シ之カ養成ヲ爲スコトトシ各學校トモ既ニ生徒ヲ募集シテ授業ヲ開始スルニ至レリ

### 第三章 財源調査

當國ニ於ケル財政整理ハ著々實行セラル、アリト雖其將來ニ於ケル財政計畫ハ未タ完全ナリト云フヲ得、今後國勢ノ發展ニ伴ヒ諸般ノ施設ヲ必要トスルニ於テ到底現在ノ歲計ヲ以テシテハ之ヲ支辨シ得サルハ明カナルヲ以テ各種ノ財源ヲ調査シ其基礎ノ鞏固ヲ企畫スルハ財政計畫上尤モ必要ナリ之ヲ以テ財政顧問時代ニ於テ既ニ財源ノ調査及之カ涵養ニ著手シ施設實行シタル事項少シトセス而シテ此事業ハ隆熙二年明治四十一年官制改正ト共ニ度支部ノ一局ニ於テ之ヲ司掌スルコト、ナリ益步ヲ進メテ畫策施行シタルコト多シ以下其梗概ヲ説述セントス

#### 第一節 鹽業

##### 一 調査

當國全沿岸至ル所鹽ヲ生産セラル、モ其最も盛ナルヲ全羅南道ノ沿岸及其附近ニ散在セル島嶼ナリトス然レトモ舊來實地ニ就キ調査シタルモノナク鹽業ニ關スル盛衰ノ狀況ヲ觀ルヘキノ資料ナキニ依リ隆熙元年明治

四十年)ヨリ鹽業調査ニ著手シタルモ諸般ノ故障ニ依リ未タ全國ノ調査ヲ完了スルニ至ラスト雖既ニ調査シタルモノ、成績ヲ舉クレハ左ノ如シ

鹽業調査成績表

道 名	名 稱	人 數	小 數	從 業 者	鹽 田 反 別	製 鹽 豫 想 高	鹽 井 數	釜 屋 數	備 考
京 畿 道	一八八八	五二四八	一〇六	四七四七	五〇〇九三	五二〇	七二	一部調査未完結	上
忠 清 南 道	二六	三二	一〇六	一七三三	八八〇二	二八	二	同	上
全 羅 南 道	五	一八	二四	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	同	上
全 羅 北 道	二八	二五〇	二五〇	七七一	七七一	七七一	七七一	同	上
慶 尙 南 道	二二	六八	一〇六	四二二	二二二	二二二	二二二	同	上
慶 尙 北 道	二二	一〇六	一〇六	二二二	二二二	二二二	二二二	同	上
江 原 道	二二	一〇六	一〇六	二二二	二二二	二二二	二二二	同	上
黃 海 道	二二	一〇六	一〇六	二二二	二二二	二二二	二二二	同	上
平 安 南 道	二二	一〇六	一〇六	二二二	二二二	二二二	二二二	同	上
平 安 北 道	二二	一〇六	一〇六	二二二	二二二	二二二	二二二	同	上
咸 鏡 北 道	二二	一〇六	一〇六	二二二	二二二	二二二	二二二	同	上
咸 鏡 南 道	二二	一〇六	一〇六	二二二	二二二	二二二	二二二	同	上

外國輸入鹽累年比較表

年別	縣別	校種別	光武九年(明治三十三年)				光武十年(明治三十四年)			
			日	臺	計	國	日	臺	計	國
元	山	釜	四、五八〇〇	—	—	四、五八〇〇	—	—	—	—
山	仁	川	四、五八〇〇	—	—	四、五八〇〇	—	—	—	—
鎮	南	浦	—	—	—	—	—	—	—	—
合	計		八、一六〇〇	—	—	八、一六〇〇	—	—	—	—

[illegible]

隆熙三年(明治四十二年)ニ於ケル輸入額ノ前年ニ比シ減少シタルハ前年ヨリノ持越鹽アリタルコト、韓國鹽ノ豐作ナリシコト、隨テ鹽價ノ下落セシコト、北韓ニ於ケル鹽藏漁獲物ノ往復等減少ノ爲輸入ヲ減シタルニ依ルモノト認ム、韓國各市場ニ於ケル鹽ノ價格ハ其季節又ハ其地方若ハ又鹽ノ種類ニ依リ差違甚シキモ、大要各地ヲ總括平均シタルモノヲ舉クレハ左ノ如シ

韓國ニ於ケル各鹽ノ市場價格

區別	卸賣		斤價		斤價		斤價	
	最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低
韓國鹽	110元	70元	100元	120元	80元	100元	110元	70元
清國鹽	110元	70元	100元	120元	80元	100元	110元	70元
臺灣鹽	110元	70元	100元	120元	80元	100元	110元	70元
日本鹽	110元	70元	100元	120元	80元	100元	110元	70元
官營鹽	110元	70元	100元	120元	80元	100元	110元	70元
一等鹽	110元	70元	100元	120元	80元	100元	110元	70元
二等鹽	110元	70元	100元	120元	80元	100元	110元	70元
同一等鹽	110元	70元	100元	120元	80元	100元	110元	70元

## 二 試驗

當國鹽業ノ現狀ニ鑑ミ其製鹽ヲシテ輸入清國鹽ニ對抗セシメンニハ生産

費ノ減少ヲ講究シ以テ市價ノ低廉ヲ圖ルニアリ且又韓國ノ地形地質氣候等ノ關係ヲ觀ルニ清國臺灣等ニ於ケル天日製鹽田所在地方ニ酷似セルモノアリ若シ韓國ニ天日製鹽ノ成立スルアラハ在來ノ方法ニ依ラスシテ優ニ外鹽ニ對抗シ得ヘク國利民福ノ至大ナルモノアルヘキヲ以テ光武十年(明治三十九年)天日製鹽及煎熬製鹽ノ試驗鹽田ヲ左ノ如ク設置シ隆熙元年(明治四十年)竣成セリ

天日製鹽田 仁川府朱安 面積壹町步

日本入濱風 煎熬製鹽田 東萊府龍湖 面積貳町三反七畝拾三歩

右ノ試驗ハ孰レモ好成績ヲ收メ就中天日製鹽ハ當國ニ於テ確實ニ成立スヘキコトヲ確メタリ其成績ニ依レハ面積一町步ノ鹽田ニ對シ一箇年優ニ十二萬斤ノ鹽ヲ採收シ得ヘク其品質ハ日本專賣鹽ノ一等乃至二等鹽ニ相當シ採收量品質色澤共ニ清國、臺灣等ノ天日製鹽ニ比シ決シテ遜色ヲ認メサルノ好果ヲ收メ得タリ

斯クノ如クシテ天日製鹽試驗ノ好果ナルヘキ形勢ヲ認メントスル時ニ當リ各地競フテ同一方法ニ依リ製鹽ヲ計畫セントスルモノ相踵テ起ラント

セリ當時政府ハ天日製鹽ニ就キ尙ホ試驗中ニ屬スルノミナラス鹽務行政ノ方針確定スルニ至ル迄ハ民間ニ許可セサルナ可ナリト認メ隆熙元年明治四十年十月ヲ以テ天日製鹽法ニ依ル製鹽ハ之ヲ一般民間ニ許可セサルコト、シ之ヲ度支部大臣ヨリ各道觀察使ニ訓令シ又一方閣議ノ決定ヲ以テ内閣總理大臣ヨリ統監ニ照會シ以テ日本人其他外國人ノ企業ヲ許可セサル主旨ナルコトヲ明カニ聲明セリ

### 三 天日製鹽田ノ築造

當國人民ハ鹽ヲ使用スルコト比較的多ク全國ニ亘リテ其消費スル量ハ約三億斤ニ及フ到ル所鹽田ニ適當ナル干潟地アルニ拘ハラズ鹽業ハ漸次衰頹ノ勢アリ是レ他ナシ清國其他ノ天日製鹽輸入ノ爲ニ壓倒セラル、ニ外ナラス若シ此儘ニ放任セシカ當國ノ製鹽業ハ遠カラス廢滅ニ歸スルニ至ルヘシ然ルニ恰モ好シ前述べ如ク天日製鹽ハ其試驗ニ微シ確實ニ其成立ヲ認メタルニ依リ果シテ此方法ニ依ル製鹽ヲ以テ全國ノ需要ヲ充スナ得ルニ於テハ外國輸入鹽ヲ驅逐シ日ニ衰頹スル當國鹽業ノ衰退ヲ回復スルト同時ニ人民ニ低廉ナル鹽ヲ供給シ而モ政府ニハ非常ナル好財源タルヘ

ク財政竝ニ經濟上裨益スル所實ニ渺カラサルヘシト信ス

鹽ノ收入ヲ以テ財政上ノ一助トナスコトハ天日製鹽ノ行ハル、國ニ於テハ極メテ容易ニシテ近ク日本臺灣及清國ニ於テ其實例ヲ見ル所ナリ當國ニ於テハ之等二國ニ比シ一層容易ニ行ハレ得ヘキ理由アリ何トナレハ當國ニハ從來天日製鹽業ナルモノナキニ依リ今之ヲ官營トナスモ何等民業ニ影響スル所ナケレハナリ或ハ之カ爲メ舊來ノ製鹽業ニ從事スル者ノ職ヲ失ハシコトヲ慮ルモノナキニアラサルヘシト雖之等ハ天日鹽ノ官營ヲ俟タスシテ早晚輸入鹽ノ爲ニ廢滅ニ歸スヘキモノナルニ依リ寧ロ此際鹽官營ノ方針ヲ確立シ徐々ニ之等失職者ヲ救フノ途ヲ講スルヲ以テ機宜ニ適スルモノト認ム

右ノ理由ニヨリ天日製鹽ノ官營ニヨリ國內ノ消費量參億斤ヲ供給センニハ正ニ面積貳千五百町ノ鹽田ヲ築造スルノ必要アルモ國庫ニ於ケル資金ノ都合ニ依リ左ノ二期ニ分テ築造實施ノ方針ヲ執リタリ

#### 第一期 鹽田築造面積壹千町歩

平安南道三和府廣梁灣ニ於テ隆熙三年明治四十二年起工シ同五年明

治四十四年(竣工)完成スルモノトス

第二期 鹽田築造面積壹千五百町歩

京畿道仁川府朱安ニ於テ約五百町歩平安北道龍川府外上面南市ニ於テ約壹千町歩ヲ築造スルモノトシ第一期工事ノ進捗及製鹽狀態ニ鑑ミ適當ノ時機ニ於テ計畫實行スルモノトス

斯クシテ先ツ天日製鹽第一期計畫ハ隆熙三年(明治四十二年)二月確定セラレ直ニ之カ實行ニ著手シタリ其要項左ノ如シ

天日製鹽田築造地 平安南道三和府廣梁灣

鹽田築造面積 壹千町歩

鹽田築造費豫算(固定資本) 金百拾六萬四千貳百八拾七圓

運轉資本 金六萬八千圓

經常費年額 金貳拾萬四千參百六拾四圓

收入年額 金六拾七萬貳千圓

利益年額 金四拾六萬七千六百參拾六圓(收入金ヨリ經常費ヲ差引タル差額)

利益率 年三割七分九厘餘(固定資本及運轉資本ニ對スル利率)

鹽ノ生産年額 一億二千萬斤

鹽ノ生産費 百斤ニ付拾七錢參毛

年産額壹億貳千萬斤經費年額貳拾萬四千參百六拾四圓トス

固定資本及運轉資本百貳拾參萬貳千貳百八拾七圓ニ對スル利子年六分ヲ加算スレハ生産費百斤ニ付貳拾參錢壹厘九毛ナリ

築造期限 隆熙三年(明治四十二年)ヨリ同五年(明治四十四年)迄三箇年

繼續

右ノ決定ニ基キ隆熙三年(明治四十二年)四月廣梁灣天日製鹽田實測及設計ニ、同五月ヲ以テ工事ニ著手シ現ニ著々進行中ニ屬ス又朱安ノ鹽田モ漸次之ヲ擴張シテ其製鹽ヲ盛ニシツ、アリ今現在此兩鹽田ノ工事功程ノ狀況ヲ舉クレハ左ノ如シ

場所名	區別	面積	積	工事著手年月日	工事竣工年月日	備考
廣梁灣	第一區	一、六〇〇町歩	三、三〇〇町歩	隆熙四年六月	完成見込	現在工事功程約三割
	第二區	八、〇〇〇町歩	一、六〇〇町歩	同	同	同
	第三區	七、七〇〇町歩	一、〇〇〇町歩	同	同	同

計	朱安							總計
	第一區	第二區	第三區	第四區	第五區	第六區	第七區	
計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	7,000,000
第一區	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	7,000,000
第二區	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	7,000,000
第三區	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	7,000,000
第四區	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	7,000,000
第五區	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	7,000,000
第六區	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	7,000,000
第七區	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	7,000,000
總計	7,000,000	7,000,000	7,000,000	7,000,000	7,000,000	7,000,000	7,000,000	7,000,000

第二節 酒類

一 調査

當國民ノ酒類ヲ飲用スルコト多キハ一般ノ唱フル處ニシテ好箇ノ財源タルヤ疑ナシト雖統計ノ徵スヘキモノナキヲ以テ隆熙二年(明治四十一年)以降之カ調査ヲ行ヒ兼テ生産及販賣等諸般ノ關係ヲモ調査シタルニ藥酒及濁酒ノ如キハ或季節ニ於テハ各戸自ラ釀造シ殊ニ濁酒ハ中流以下ノ飲

料トシテ四季絶ヘス飲用セラル、ヲ以テ其造石高ハ豫想ノ外ニアルカ如キモ一般人民ハ經濟的及數字の思想ニ缺乏セルヲ以テ調査ノ結果正鵠ヲ得ルコト能ハス然レトモ隆熙三年(明治四十二年)ヨリ造石數ニ應シテ各種ノ酒稅ヲ課スルコト、ナリタルヲ以テ今後漸次製造家ヲ統一シテ實際ノ造石高ヲ調査スルコト容易ナルニ至ルヘシ當國ニ於ケル酒ノ種類ハ藥酒、濁酒及燒酒其主タルモノニシテ藥酒ハ中流以上濁酒ハ中流以下ニ飲用セラレ燒酒ハ夏期一般ニ飲用セラル是レ夏期ニハ藥酒ヲ釀造シ保存シ難キカ爲ニシテ濁酒ハ製造ニ從ヒ直ニ飲用スルカ爲ニ四季共ニ釀造セラル而シテ如上酒類ノ釀造法ハ極メテ幼稚ニシテ原料ノ大部ハ糟粕中ニ轉歸シ徒ニ犬豚ノ飼料トナルニ過キス國家ノ經濟上看過スヘカワサルヲ以テ隆熙三年(明治四十二年)斯業ヲ開發シ財源ヲ涵養スルノ目的ヲ以テ釀造試驗所ヲ設置シ同年末以來之カ研究ニ著手シツ、アリ

二 釀造試驗所ノ設置

當國酒類釀造ノ方法タルヤ甚ダ拙劣ニシテ且ハ種々ノ缺點ノ存セシニ依

リ之等ニ對スル研究及改良發達ヲ企圖シ傍々當國ニ於テ從來應用セラレサル果實類ヨリ酒類ヲ釀造シ將來ノ財源ヲ涵養スルノ目的ヲ以テ釀造試驗所ヲ設置スルノ急ナルヲ認メ之カ計畫ヲ立テ隆熙三年六月起工同年十月之カ竣工サナシタリ其設計ノ概要ヲ舉クレハ左ノ如シ

一、釀造試驗所ノ位置ハ京城西部阿峴所在ノ官有地三千三百餘坪ノ地ヲ選定シタリ該地域ハ京城西大門ヲ距ル約十二町麻浦ニ通スル道路ニ沿ヒ西北山ヲ負ヒ稍東南ニ向ヒ緩除ニ傾斜セル小邱ニシテ南邊ニ漢江ト麻浦ヲ望ム水質ハ清澄純良ニシテ其量ニ富ミ四時涸渴ノ虞ナシ蓋シ阿峴ノ地タルヤ從來京城附近ニ於ケル燒酒及麴子ノ製造地ニシテ該部落ハ軒ヲ列ネテ殆ト燒酒ノ製造家ヲラサルハナシ

二、營造物ハ原料製成場一棟、釀造場一棟、納屋四棟、事務室一棟、職工宿泊場一棟、附屬官舎二棟、計十棟此建坪合計三百九拾一坪ナリ

三、設備器械ハ百五十ボンド壓十二馬力流籠一臺、十五馬力石油發動機一臺トス

前者ハ蒸餾蒸餾暖房揚水ポンプ等ニ使用シ後者ハ主トシテ原料調理

ノ動力ニ使用ス

原料調理用器械トシテハ精米機、小麥粗碎器及製粉機等ヲ設備セリ其他釀造用竝ニ分析等ニ要スル緊要ナル器具器械ノ設備ヲナセリ

### 三 試驗

#### 一、藥 酒

藥酒ハ當國ノ國酒トモ稱スヘキモノニシテ水ヲ以テ稀釋シタルモノト否ラサルモノトアリ前者ハ中流以下ニ飲用セラレ後者ハ全酒ト稱シ中流以上ノ飲料ニ屬スレトモ之ハ市中ニ販賣セラレスシテ各自ニ釀造スルモノトナレリ酒質ハ區々ニシテ日本酒ノ如ク一定ノ標準ヲ有セス製造方法ノ如キモ又極メテ區々ニシテ一般ニ幼稚ナルヲ免レス殊ニ麴子ノ用量極メテ多量ニシテ原料ノ三分ノ一ハ殆ント無用ニ消費スルノ不利アリ箇人竝ニ國家經濟上ノ損失尠カラサルヲ以テ一面酒質ヲ一定シ一面經濟上ノ損失ト衛生上ノ危疑ヲ避クル目的ヲ以テ隆熙三年(明治四十二年)末以來之カ試驗ヲ行ヒ製品ヲ試ミニ販賣シタルニ能ク一般ノ嗜好ニ適スルコトヲ認メタリ本年上半期ノ試驗高

ハ百餘石ニシテ今ヤ殆ト撥下シ盡クシ日下夏季試験中ナリ而シテ本年度豫定試験高ハ五百石ニシテ大部ハ秋季以後ニ試験シ試験ノ結果ハ之ヲ人民ニ周知セシメ醸造家ノ利益ヲ増進スルト同時ニ國家財源ノ涵養ヲ期スルニアリ

## 二、燒酒

燒酒ハ從來醸造者ノ殆ト廢物タル藥酒粕及高粱ヲ原料トシ高粱燒酒醸造法及蒸餾法ノ如キモ全ク在來法ヲ改メ其得タル燒酒ハ日韓人ノ嗜好ニ適シタリ且下尙醸造中ニ係リ尙夏季中約四十石ヲ製出シ本年通シテ五拾石造石ノ豫定ナリ

## 三、果實酒

### 一、葡萄酒

果實ハ韓國至ル處其栽培ニ適シ葡萄酒栽培者甚栽培者ノ如キハ各地ニ現出スルノ狀態ニシテ昨年ハ蘆島園藝模範場產出食用葡萄酒ヲ以テ七斗ヲ試験シ目下釀熟中ニ係ル原料ハ食用葡萄酒ナリシヲ以テ優良ノ成績ヲ期シ難シト雖右ノ經過ニ徴スレハ相當醸造用葡萄酒原

料トセハ慥カニ純良ノ葡萄酒ヲ釀製シ得ヘシト信セラル、サ以テ今春佛國產醸造用葡萄酒リースリンク、ムスカテヲ、ビノ、ガメー種等二十三種千八百株ヲ試験所構内ニ栽培シタルニ其發育狀態ハ頗ル佳良ナリ

### 二、杏實酒

杏ハ當國至ル所ニ栽培セラルレトモ單ニ生食用ニ供セラル、ノ外他ニ利用セラレサルヲ以テ昨年之ヲ原料トシ杏實酒約四斗ヲ試験セシニ成績佳良ナリシヲ以テ本年ハ五石ヲ製造スルノ豫定ナリ

### 三、櫻桃酒

櫻桃モ亦韓國至ル所產スルヲ以テ杏實ト同シク試験醸造セル石高約六斗ニシテ目下尙釀熟中ニ屬ス

### 四、莓酒

莓酒ハ本年初メテ醸造ニ著手シ目下釀熟中ニ係ルト雖其經過適順ニシテ佳良ノモノヲ得ルノ見込ナリ

## 第三節 煙草

當國ニ於ケル煙草ハ一般ニ人民ノ嗜好ナルト共ニ其生産額又著シク財政上好個ノ財源トシテ特ニ注目ヲ要スル國產タリ是ヲ以テ光武九年明治三十八年八月以降財政顧問部ニ於テ之カ調査ニ著手シタルヨリ今日ニ至ル迄之ヲ繼續シ各道樞要ノ地ニ出張所ヲ設置シ專ラ之カ調査及涵養ニ從事セリ此間諸種ノ障礙ヲ蒙リ其進行ヲ妨クルモノアリト雖隆熙二年(明治四十一年)末ニ至リテハ既ニ全道四分ノ三ニ達スル調査ヲ了スルヲ得因テ全道ニ對スル生産消費ノ總額ヲ推斷スルニ足ルノ進域ニ及ヒタルヲ以テ煙草政策ノ一階梯トシテ翌年三月煙草稅法ヲ發布ヲ見ルニ至レリ從テ之ニ伴フ今後更ラニ探ルヘキ事業方針ニ向テ調査ヲ進捗セシムルヲ以テ目的トシ一面財源涵養ノ方策トシテ煙草耕作改善指導ヲ施シ終始一貫調査及涵養ノ完成ニ努メツ、アリ左ニ調査開始以來今日ニ至ル間ニ於ケル經過及事蹟ノ大要ヲ區分略述セントス

### 一 調 査

光武九年明治三十八年調査開始當時ハ尙之ニ從事スル吏員少カリシヲ以テ唯凡ソ財源ト認ムヘキ煙草其他ノ農產物等ニ關スル一般的調査ヲ行ヒ

タルニ過キスシテ僅カニ二三地方ニ於ケル煙草耕作地ノ狀況即チ土壤地勢栽培方法等之ニ伴フ煙草集散狀況及煙草販賣竝ニ消費狀況ヲ觀察シ以テ調査上ニ關スル方針概目ヲ定メタルニ止マレリ

然カルニ翌年六月ニ至リ吏員ヲ増加シ主要煙草產地ノ調査上便宜ナル地ヲ撰ヒ五出張所ヲ開始シ專ラ生産額其他ノ概況調査ニ著手セシメタルモ調査員ハ未タ當國人情風俗ノ詳悉スル能ハサリシモノアリテ拂々シク進行セス漸クニ出張所附近ニ於ケル生産概況ヲ達觀シ得タルニ外ナラス剩サヘ光武十一年明治四十年七月京城政變ノ餘波ハ各道ニ及ヒ出張所在勤員ノ過半ヲ引揚クルノ止ムヲ要ニ至リ爲ニ調査ニ一頓挫ヲ來タセシカ九月ニ至リ更ニ吏員ヲ増加シ比較的安全ナル地方ノ調査ニ從事セシメ越エテ隆熙二年明治四十一年一月官制改正ニ伴ヒ各道樞要ノ地ニ出張所ヲ設ケ未調査地ノ調査ヲ續行スルコト、セシモ動モスレハ各地未タ不穩ノ狀況アリシカ爲一時調査ヲ中止スルノ止ムヲ得サルニ至リシヲ以テ其間安全ナル地方又ハ出張所々在地ニ於ケル營業者狀況ヲ調査セシメ營業上ニ於ケル利益歩合關係并ニ煙草集散ノ狀況等ヲ調査セリ尋テ九月ニ至リ各

地稍不穩ヲ傳フルニ至リシニ依リ調査員ヲ督勵シ未調產地ノ實地踏査ヲ續行セシメタリ以上ノ結果ニ依リテ調査既済郡數ハ全道ヲ通シテ二百四十五郡即チ全國ノ四分ノ三ニ達シ茲ニ煙草稅法發布ニ伴ヒ從來ノ調査方針ヲ變改シ各道產地中ノ主要集團產地ノ詳密調査ヲ遂行ナスコト、シ昨年七月ヨリ順次調査中ニ在リ

## 二 耕作ノ指導

當國ニ於ケル煙草ノ耕作方法タル頗ル粗放ニシテ之カ改善ヲ計ルヘキ點尠カラス從テ財源涵養ノ一手段トシテ改善指導ノ急務ナルヲ認メ茲ニ隆熙三年明治四十二年一月之カ指導ノ順序ヲ定メ比較的行ハレ易キ日本人耕作ノ盛シナル大邱、密陽等ノ集團產地ニ向テ實地ニ就キ各適切ナル指導ニ從事セシメタルニ其效果ハ相當品質ヲ高メ販路モ好況ヲ呈シ成績良好ナルヲ見タリ故ニ本年ニ入リテハ一層其歩ヲ進メ調査既済ノ結果ニ依レル左記著名大主產地ヲ涵養指導地ニ選定シ之カ地域内一面ニ三名乃至五名ノ模範耕作人ヲ置キ實地指導ヲ講シ是等先覺者ノ養成ニ努メ漸次附近耕作人ヲシテ之ニ倣ハシムヘキ方針ヲ採リツ、アリ

京畿道ノ内

龍仁、陽智、廣州、果川ノ各郡

忠清北道ノ内

報恩、懷仁、清州、清安、槐山ノ各郡

全羅北道ノ内

全州、鎭安、高山、任實ノ各郡

慶尙南道ノ内

密陽、居昌ノ兩郡

慶尙北道ノ内

大邱郡

黃海道ノ内

松禾、長淵ノ兩郡

江原道ノ内

寧越郡

平安南道ノ内

成川郡

## 三 試作

煙草財源涵養指導ヲ爲スニ當リテハ當國風土ニ適當ナル優良種ノ撰擇及耕作乾燥法等總テ好適法ヲ知悉スルノ主旨ニ依リ隆熙元年明治四十年、成川出張所ニ於テ米國種ヲ栽培シ黃色葉煙草乾燥法ニ則リ之カ試験ヲ行ヒタルニ其成績大ニ良好ナリシカ隆熙二年明治四十一年四月該出張所ハ暴徒ノ襲撃ニ遭遇シ其成績ニ就テ見ルヲ得サリシハ遺憾トスル所ナリ更ニ翌年大邱及大田ニ煙草試作地ヲ設ケ在來種、日本種、米國種ヲ栽培シ本年ニ

於ラハ土耳其古種ヲ加ヘ諸種ノ講究ト共ニ專ツ煙草耕作ノ模範ヲ示シ煙草耕作ノ改善指導誘掖ノ資ニ供シツ、アリ  
左ニ隆熙三年(明治四十二年)試作成績ヲ摘録ス

種類比較成績表 其一

種 別	播 種	發 芽	移 植	發 蕾	摘 蕊	收 穫	種 類	平均一株當葉數(土葉ヲ除ク)
永 川 業	三月十七日	四月二日	五月二日	六月二日	七月二日	八月二日	中	一六
國 分 業	同	同	同	同	同	同	中	一六
達 磨 業	同	同	同	同	同	同	中	一六
泰 野 業	同	同	同	同	同	同	中	一六
松 川 業	同	同	同	同	同	同	中	一六
ホ ン ヂ ャ エ ラ ス	同	同	同	同	同	同	中	一六
ヘ ス タ ー	同	同	同	同	同	同	中	一六

備 考

永川業ハ二番葉ヲ採收セルヲ以テ成熟遅延セリ

同上 其二

種 別	全 業	乾 重 量	乾燥歩合	收 穫 反 量	平均一貫 價 格	一段歩當價格
永 川 業	二四〇六六	三六四	一五八	一〇〇	一〇〇	一〇〇
國 分 業	二四〇六六	三六四	一五八	一〇〇	一〇〇	一〇〇
達 磨 業	二四〇六六	三六四	一五八	一〇〇	一〇〇	一〇〇
泰 野 業	二四〇六六	三六四	一五八	一〇〇	一〇〇	一〇〇
松 川 業	二四〇六六	三六四	一五八	一〇〇	一〇〇	一〇〇
ホ ン ヂ ャ エ ラ ス	二四〇六六	三六四	一五八	一〇〇	一〇〇	一〇〇
ヘ ス タ ー	二四〇六六	三六四	一五八	一〇〇	一〇〇	一〇〇

種別	水分	業ノ大	色澤	彈力	厚薄	引火	灰色	中骨	香
水川葉	一〇・二	赤褐	乏シ	厚	良引	濃	青臭多ク辛味最モ強シ	同	味
國分葉	一一・三	暗褐	同	同	精厚	同	稍臭多ク辛味多シ	同	同
達磨葉	一二・八	黃褐	同	同	同	同	同	同	同
秦野葉	一四・九	暗褐	同	同	同	同	同	同	同
國府葉	一五・九	同	同	同	同	同	同	同	同
松川葉	一七・三	楊	弱	同	同	同	同	同	同
五右衛門イブライノカ	一七・三	濃	同	同	同	同	同	同	同
五右衛門イブライノカ	一七・三	濃	同	同	同	同	同	同	同
ホンザエラス	二〇・七	橙黄	同	同	同	同	同	同	同
ヘスター	二六・五	黃	強	同	同	同	同	同	同

肥料比較成績表 其一

種別	區分	全葉、重量	乾葉	乾燥歩合	收一 種反 量歩 目當 々平 均價 一 格實	一反歩當價格
第一區	大豆粕施用	四四八六	六三四	一八九	五三〇	六三〇
第二區	荻實粕施用	四四二〇	五三六	一八八	五二〇	六二〇

同上

種 別	區 分		業 幅	色澤	彈力	葉厚薄	引香	灰色	中步合	香	味
	第一區	第二區									
大刈稻施用	一三〇	一三〇	七	黃褐	稍乏	稍厚	良	濃	二六	稍異臭ヲ帶ヒ辛烈	
荳質稻施用	一三〇	一三〇	七	同	同	稍薄	同	黝	二七	稍異臭ヲ帶ヒ辛味	

以上各種別毎ノ成績ニ對スル概評左ノ如シ

一種類比較成績各表ニ依テ見ルニ韓國種及日本種中品位收穫最も佳良ナルハ秦野葉ニシテ之ニ次クナ國分葉トシ順次達磨國府松川葉ニ及ビ當國種永川葉最も劣等ナリ而シテ日本種ハ其元產地ニ於ケルカ如ク葉質薄ク且佳香ナ有セス孰レモ臭氣強ク辛味強烈ニシテ葉質肥厚剩サヘ彈力乏シ缺點アリ之等ノ因由ハ尙ホ試作ヲ重テ漸次研究ヲ積ムニアラサレハ一時ニ適否ノ斷定ナ下スコト能ハサルカ如シ又米國種ハ其成績良好ニシテ該種ノ栽培ハ韓國ニ於テ將來有望ナルカ如シ

二、肥料比較 各成績ニ依テ見ルニ第二區荏實粕施用區良好ナルカ如シ

而シテ韓國内地ニ於ケル大豆粕ノ供給ハ一般ニ乏シク荏實粕ノ供給多ク且價格モ比較的低廉ナルヲ以テ其使用ニ便ナルカ如シ然レトモ肥料種類ノ效果タル僅カニ一回ノ成績ニ微シ判定スル能ハサルヲ以テ尙ホ之ヲ施用方法及用量等研究ノ餘地尠シトセス

三、黃色乾燥 米國葉黃色乾燥ハ特設ノ鐵管式乾燥室ニ於テ火力ヲ用ヒ乾燥セシニ其成績比較的良好ナリ

## 第四編

### 第一章 建築工事

#### 第一節 工事機關

古來韓國政府ニ於テ廳舍建築其他ノ土工ヲ起スノ要アルトキハ戶曹管掌ノ下ニ隨時營繕都監ヲ設ケ監董ヲシテ之ヲ施工督役ノ衝ニ當ラシメ平時修繕等ノ小工事ハ營繕司ニ於テ專ラ之ヲ掌理セシムルノ制ナリシカ輒近國運ノ發展ニ伴ヒ在來ノ諸官衙ハ狹隘ニ失シ加フルニ政務ノ執行上構造其宜シキヲ得スシテ之カ新營政策ハ焦眉ノ急ニ迫ルモノアリ殊ニ行政組織ノ改善ニ從ヒ各種政務機關ノ分立増設セラル、モノアリテ是等廳舍ノ設立ヲ要スルモノアリ或ハ地方產業ノ發達ニ伴ヒ勸業的諸設備ヲ要スルモノアル等各般ノ建築工事ハ頗ル頻繁ヲ極ムルニ至レリ於是乎従前ノ組織ヲ以テシテハ到底其萬全ヲ期シ難ク工事實施ノ迅速確實及工事事務ノ統一整々ヲ圖ル上ニ於テ專門ニ之カ執行機關ヲ特設スルノ必要ヲ生シ光武十年(明治三十九年)九月財政顧問監督ノ下ニ度支部内ニ建築所ノ創設ヲ

見ルニ至レリ

是ヨリ先キ當國政府財政顧問部ハ沿岸港灣ノ改良及税關施設ヲ整理スルノ急務ヲ認メ特ニ技術者ヲ聘用シテ光武九年明治三十八年十二月初メテ税關工事部ヲ組織シ之ヲ工務局及燈臺局ニ分テテ專ラ各般ノ港灣ニ關スル工事ヲ經營セシメ特ニ其工務局ニ於テハ總稅務司及財政顧問ノ管理ニ屬スル工事一切ヲ掌理セシメタリ即該部ハ當國建築土木工事執行機關トシテ組織的ニ成立セルモノ、濫觴ニシテ專ラ力ヲ港灣設備ニ盡セシト雖傍ヲ諸建築工事ノ一般ニ涉リ遂行セルモノ尠カラズ

越エテ隆熙元年明治四十年十二月行政官府ノ釐革ニ伴ヒ財政顧問部及總稅務司廳ノ事務ハ度支部ノ管掌ニ移ルト同時ニ度支部大臣管理ノ下ニ臨時税關工事部ヲ置キ專ラ舊税關工事部工務局ニ屬セシ海關工事事務ヲ繼承セリ

然ルニ建築所ト臨時税關工事部トハ併立シテ政府ニ屬スル工事ヲ分掌セルモ其目的事業ハ相酷似シ而カモ同シク度支部大臣ノ管理ニ屬シ兩衙ノ職員ニシテ相互兼勤セルモノ尠カラズ且ハ建築所ノ掌所工事ニシテ往々

之レヲ臨時税關工事部ニ委託セルモノアル等實質ニ於テ離ルヘカラサル關係ニアリシカ各其事業ノ漸進ニ從ヒ同一種官衙ノ兩立スルノ不利ヲ認メ遂ニ隆熙二年明治四十一年八月臨時税關工事部ヲ廢シ之ヲ建築所ニ併合セリ

此ノ合同ニ因リテ建築所ノ所掌事業ハ劃然制定セラレ即チ政府ニ屬スル建築工事ノ唯一機關トシテ之カ設計施工ノ任ニ當ルト共ニ更ニ海關工事ヲ分掌スルコト、ナリタルナリ

加之當國ニ於テハ民間未タ完全ナル工事機關ノ存在セサルヲ以テ各官廳ノ管掌ニ屬スヘキ工事及銀行會社又ハ民間其他公共團體ノ企畫ニ係ル事業ノ設計實施及其他工務處理ノ委託ニ應シ建築土木トナ間ハス之カ遂行ノ任ニ當ルノ道ヲ開ケリ

## 第二節 工事實施

### 一 創始時代工事概況

秩序未タ定ラス職員未タ備ハラサル建築工事創始ノ時代ニ於テハ殆ト工事ノ設計及各般ノ調査ニ忙殺セラレ從テ大計畫ノ下ニ著手起工セラレタ

ルモノナク亦工事ノ數ニ於テモ見ルヘキモノナカリシカ海關工事ニ屬スル建築ニ於テ京城群山、木浦、鎮南浦等ノ稅關廳舍及倉庫等ヲ初メトシ元山、清津等ノ稅關廳舍及官舍ヲ建設シ同時ニ各地ノ稅關官舍派出所檢疫所等相次テ工ヲ起シタルト共ニ廳舍建築トシテハ現度支部廳舍タル内閣廳舍、現高等法院タル平理院及京城監獄、印刷局、水原農林學校ヲ重ナルモノトシ京城及地方農工銀行ノ廳舍及倉庫十三棟ヲ建設セリ

## 二 隆熙二年(明治四十一年)以後工事概況

諸般ノ建築工事漸ク其必要ヲ認メタル、ニ及ヒテハ隆熙二年明治四十一年ヨリ二箇年度ノ繼續事業トシテ營繕費貳百六拾五萬餘圓ノ配賦ヲ受クルニ至リ之ヲ廳舍新營費及官舍新營費ニ分テ各官衙及附屬官舍ノ建築費ニ充テラル、ヤ建築工事ノ數ハ遽カニ多キヲ加ヘ其今日迄ニ施行セラレタルモノハ別表一覽表ニ見ル如ク六百九拾一件ヲ數フルニ至リ一個ノ建築所トシテハ頗ル異數ニ上リタルト共ニ工事トシテ見ルニ足ルヘキモノ渺シトセス

隆熙二年度明治四十一年ハ繼續事業ノ開始年度ニシテ豫算ノ配當ハ敷地

調査、工事設計等新計畫ノ爲ニ繁忙ヲ極メ未ダ充分ナル起工ヲ見サリシト雖實施總額七拾萬圓餘ノ支出ヲ見タリ而シテ本年度ニ於テ竣工セル大韓醫院及廣通館ハ其最モ光彩ヲ放テル建築ナリトス

隆熙三年度明治四十二年ニ於テハ各般ノ調査略既ニ終リヲ告ケ實施期ニ入リタルヲ以テ其工區ハ國內十三道各地ニ亘リ貳百七拾有餘箇所ノ工事區域ニ及ヒ七百二拾七件ニ達シ其實施總額百九拾五萬圓ヲ算ス而シテ之等工事中山間邊陲ニ工ヲ起シタルモノ亦渺カラズ其施工上最モ困難ヲ感シタルハ韓國内地交通不便ナルニ依リ時トシテ暴徒又ハ惡疫ノ爲工事計畫ノ調査督役或ハ材料運搬上阻礙ヲ蒙リタルコト多ク又四五月ノ交起工セシモノハ一般ニ進捗上成績佳良ナリシモ七八月頃起工ニ係ルモノハ十一月頃ニ至リ寒候ニ入り工事ノ進捗上渺カラサル蹉跎ヲ來サシメタリ其仙建築敷地ハ成ルヘク官有地ヲ利用セリト雖其適當ナルモノナキ所ニ於テハ不得止民地ヲ買收シテ充當セルヲ以テ其敷地選定上起工ヲ延期セシコト渺カラサリシハ遺憾トスル處ナリ

此年度ニ於テハ別表主要工事一覽表ニ見ル如キ工事ノ起工セルト共ニ地

方警察署六十六箇所ヲ竣成シ裁判所六十四箇所監獄署十二箇所ノ新築増築及修繕ヲ施工セリ其他地方倉庫九箇所屠獸場二箇所等ノ工事ニ著手シ地方徴稅機關タル財務廳舍ハ十一箇所ヲ建設セリ又官舎ハ農商工部學部次官官舎ヲ主トシ總計八十件ニ及ヘリ

而シテ此年度ニ於ケル諸工事中廳舍又ハ官舎ニシテ同種若ハ同目的ニ使用セラル、モノハ必ス其樣式ヲ一定シ施工ノ統一ト工事ノ迅速ヲ期シタリ

本年度建築ニ關スル工費總豫算ハ貳百八拾貳萬圓ニシテ其上半期ニ於テハ官給材料費ヲ除キタル實施工事金額百五拾九萬餘圓ヲ算スルニ至リ別表主要工事一覽表ニ見ル外尙ホ各地警察署十箇所裁判所十二箇所監獄三箇所財務廳舍六倉庫四及木浦鏡城ノ兩林業事務所棉花工場其他各種官舎二十五箇所ヲ起工セリ特ニ平壤鑛業所施設費ノ配賦ニ依リ同工事諸般ノ施設ニ著手セリ

又民間ヨリ施工ヲ委託セラレタル工事トシテハ東亞煙草株式會社京城工場及舍宅南大門市場建築店舖及倉庫ノ二工事アリ

### 三 施工方法

前述ノ如ク所管工事ハ甚ダ多クシテ之カ設計施工ニ當ルヘキ吏員ノ數比較的少數ナルヲ以テ凡テノ工事ハ當初一般競争入札ノ方法ヲ採リ受負ニ附シ來リシモ當國ニ於ケル材料缺乏ノ結果受負業者ハ總テ之等ノ材料ヲ日本ニ仰カサルヲ得スシテ勢ヒ工事ノ延滞ヲ來タシ又材料撰擇其宜シキヲ得サルモノアル等種々ノ缺點ヲ免レサルヲ以テ之等ノ弊害ヲ艾除シ工事ノ堅牢ト實施ノ迅速トヲ期スルニ於テ材料官給ノ必要ヲ認メ建築所附屬官衙タル煉瓦製造所ニ於テ製作シタル煉瓦土管及瓦ヲ官給トシ大韓醫院議政府、平理院其他各所ノ工事ニ試用シタリ其後隆熙二年(明治四十一年)十二月ニ至リ統監府營林廠ト特約シ營林廠製材ノ供給ヲ受クルコト、シ一面ニハ新義州ヨリ南ニ向フ物資ノ少キヲ利用シテ鐵道管理局ニ結ビ低率ナル運賃ヲ以テ鐵道沿線其他交通便利ナル地方ノ建築材料トシテ木材ヲ官給スルニ至リ尙ホ進ンテ一部ノ建築ニ對シテハ「ベンキ」及金具ノ官給ヲモ爲スコト、セシヲ以テ主要ナル建築工事ハ部分受負ノ方法ヲ講スルニ至リ著シク工事ノ成績ヲ良好ニ導クノ傾向ヲ示シツ、アリ尙ホ釜

山税關廳舎工事ノ如キハ進シテ一部直營ノ方法ヲ以テ之カ完成ナリセリ  
而シテ今日ニ於ケル煉瓦其他ノ生産額ハ一日平均煉瓦參萬五千個土管各  
種平均四百五拾木、瓦四千五百枚ニシテ木材ハ官給開始ヨリ今日ニ至ル迄  
總計五萬八千九拾八尺ノ供給ヲ受ケタリ而シテ之等建築材料ハ總テ  
工事トシテ消化セラレ前陳ノ如キ工事件數ノ實現セルモノナリ

四 建築工事一覽表

一 自創業至隆熙四年六月主要工事一覽表 (工費壹萬圓以上ニシテ主タルモノヲ掲グ)

工 事 名	構 造 樣 式	工 事 費	施 工 年 度	備 考
木浦税關上家新築	木造平家	二〇〇〇圓	光武十九年	
京城税關保稅倉庫	煉瓦平家二階	八八〇〇圓	同	(明治十九年)
鎮南浦税關廳舎	同	五、〇〇〇圓	同	
印刷局擴張工事	煉瓦造工場外四棟	一〇〇、〇〇〇圓	同	
京城監獄	木造六棟	五、五〇〇圓	同	
水原農林學校	木造平家	五、四〇〇圓	同	
木浦綠綿工場	同	二、八〇〇圓	同	

議政府新築	煉瓦造二階建	△〇〇圓	光武十一年	
平理院新築	同	五、〇〇〇圓	同	(明治四十年)
大韓醫院	同	五、〇〇〇圓	同	
群山及木浦税關廳舎	木造平家	七、八〇〇圓	同	
釜山税關檢疫所	同	四、七五〇圓	同	
工業傳習所本館及校舎其 他諸設備	同二階建	七、八〇〇圓	同	隆熙元年
總理大臣官邸	木造一部二階建	八、五〇〇圓	同	(明治四十年)
學部廳舎	同二階建	一、八〇〇圓	同	隆熙十一年
廣通館	煉瓦造二階建	四、五〇〇圓	同	(明治四十二年)
釜山税關煉瓦倉庫基礎工 事	同	二、二五〇圓	同	
同 廳舎基礎工事	同	一、一〇〇圓	同	直營
同 煉瓦倉庫新築	煉瓦造平家	三、三〇〇圓	同	
大邱警察署	木造二階建	二、七五〇圓	同	
仁川税關上家新築	同平家三棟	八、五〇〇圓	同	隆熙三年
同 同二階建	同	五、七〇〇圓	同	(明治四十二年)
內務部廳舎	煉瓦造二階建	八、五〇〇圓	同	
農工商部廳舎	同	四、五〇〇圓	同	

釜政課	大邱控訴院廳舍及官舍	平壤控訴院	釜山製氷所新築	東亞煙草會社工場	元山稅關上家	大邱監獄	春川分監	渭州分監	度支部廳舍増築	新義州稅關廳舍及上家	釜山輸出牛檢疫所	元山財務監督局	釐造試驗所	東亞煙草會社工場	釜山稅關上家	仁川稅關煉瓦倉庫
木造二階建附共	木造二階建	同	木造平家	煉瓦造二階建	木造平家	同	同	同	煉瓦造二階建	木造平家	同	同二階建	同平家	煉瓦造二階建四棟	木造平家	煉瓦造平家
三三六六	九二四四	四三六〇	二七六六	三三六六	三三六六	四三六六	二七六六	一六六六	四三六〇	一六六六	四三六六	二二二六	一七三六	四三六六	三三六六	三三六六
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
隆熙四二年 (明治三十四年)	隆熙四二年 (明治三十四年)	隆熙四二年 (明治三十四年)	隆熙四二年 (明治三十四年)	隆熙四二年 (明治三十四年)	隆熙四二年 (明治三十四年)	隆熙四二年 (明治三十四年)	隆熙四二年 (明治三十四年)	隆熙四二年 (明治三十四年)	隆熙四二年 (明治三十四年)	隆熙四二年 (明治三十四年)	隆熙四二年 (明治三十四年)	隆熙四二年 (明治三十四年)	隆熙四二年 (明治三十四年)	隆熙四二年 (明治三十四年)	隆熙四二年 (明治三十四年)	隆熙四二年 (明治三十四年)
受托工事																

二 自 創業 建築工事事件數表  
至 隆 熙 四年六月 (五百圓未滿ノモノハ省略ス)

大邱監獄事務所	木造二階建	二〇〇七	同
釜山稅關監視所	同	一九二六	同
土地調查局廳舍	同	四三六六	同
廣梁洞鹽田廳舍及官舍	木造	八二二六	同
南大門市場店舖	同平家	二五九六	同
釜山稅關廳舍	同二階建	五〇四四	同

受托工事

費目	起	工	件	數	計
各部諸廳舍新營并修繕	明治十九年	同三十九年	同四十二年	同四十四年	四
醫院新築増築并修繕	同三十九年	同四十二年	同四十四年	二	〇
廣通館ニ關スル工事	同三十九年	同四十二年	同四十四年	二	〇
印刷局ニ關スル工事	同三十九年	同四十二年	同四十四年	二	〇
參政課ニ關スル工事	同三十九年	同四十二年	同四十四年	二	〇
各地裁判所新營并修繕	同三十九年	同四十二年	同四十四年	二	〇
各地警察署新營并修繕	同三十九年	同四十二年	同四十四年	二	〇

[illegible]

### 第三節 煉瓦製造事業

沿  
革

煉瓦製造事業ハ光武十年明治三十九年財政顧問在職中ノ經營ニ係ルモノニシテ韓國施政ノ改善ト共ニ一般事業ノ發展ニ件ヒ諸建築及下水排渾工事等ヲ要スルニ當リ木材其他建築材料ニ乏シク偶坊間製造販賣スル煉瓦及土管瓦ハ其品質粗惡ニシテ雨漏凍破ヲ生シ常ニ建築工事ニ不適當ナルノミナラス其價格不廉且ハ製造力乏シキヲ以テ一般ノ需用ヲ充タス能ハス依テ之ヲ日本國ヨリ輸入セシカ運搬費ハ實價ニ倍シ且破損多ク加之日時遷延シ時機ヲ失スル等不利尠ナカラサルヲ以テ遂ニ政府ニ於テ廉價ニシテ精良ナル材料ヲ製作スル模範の事業トシテ煉瓦土管瓦ヲ製造セントシ特ニ煉瓦ニ就テハ日本大藏省技師ヲ聘シ之カ調査ヲ依託セシニ頗ル時

[illegible]

宜ニ適シタルモノトノ報告ヲ得タルヲ以テ同年十月三十一日度支部大臣ヨリ煉瓦製造所設立委員ヲ任命シ之カ設備工事ニ著手シタリ而シテ工場位置ニ關シテハ土質及交通ノ關係ヨリ煉瓦製造場ヲ漢江東岸麻浦ニ、土管及瓦類製造場ヲ漢江西岸永登浦ニ定メ築造工事其他設備ハ隆熙元年(明治四十年)一月ヨリ著手シ同年十月全ク竣成セリ

## 二 組織

煉瓦製造所ハ前述ノ如ク其成立ヲ見タリシカ固ヨリ模範的經營ニシテ之カ製造方法ヲ世ニ周知セシメ低廉ニ建築用材ヲ供給スルニアルヲ以テ豫メ一定ノ資本金ヲ與ヘテ之ヲ獨立セシメ一般會計ヨリ離レテ自營セシムルコト、セリ是レ實ニ官營事業トシテ其當ヲ得タルモノナリトス此主旨ヲ以テ光武十年(明治三十九年)煉瓦製造所作業會計規程ハ發布セラレ隆熙二年(明治四十一年)ノ新官制ト共ニ建築所ノ管理ニ屬シテ建築工事ノ施設ト相俟ツテ益之カ材料供給ノ途ヲ開キタリ

次ニ其固定及運轉資本額ヲ舉クレハ左ノ如シ

種別	數	量	價	格
土地		セムルハ 14,431.05		3,760.00
固定資本 營造物 機械器具				181,010.40
運轉資本				31,100.00
計				14,400.00
				14,400.00
				14,400.00

## 三 作業

創業以來作業ノ經營ニ關シテハ主トシテ製品ノ改良ト共ニ専ラ製産費ノ低廉ヲ計レリ尙ホ本年度(明治四十三年)ヨリハ京城監獄囚徒ニシテ科スヘキ作業ナキモノヲ使役シ一層製造費ノ低減ヲ圖リ一ハ囚徒ノ勞働習慣ヲ養フト共ニ作業ヲ習得セシムルノ方法ヲ採レリ而シテ隆熙二年度(明治四十一年)ヨリハ第一銀行ト特約シテ新築行舎ニ使用スヘキ煉瓦ヲ一手ニ引受ケ低廉ニ供給スルコト、セリ即チ將來韓國銀行タルヘキ大建築ノ煉瓦ハ凡テ本所ノ製作供給スル處タリ今創業以來ノ製産竝ニ供給ノ狀況ヲ年度別ニ示サハ左ノ如シ

一 隆熙元年度 (明治四十年)

種別	製產數	供給數	殘數
煉瓦	一八、〇〇〇	一八、〇〇〇	〇
土管	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇

製品供給先區分

大韓醫院建築 議政府建築 平理院建築 仁川水道水源池  
工業傳習所建築 印刷局擴張工事 稅關工部官舍 煉瓦室築造  
其他

二 隆熙二年度 (明治四十一年)

製產高

種別	製產數	供給數	殘數
煉瓦	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇
土管	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇

種別	製產數	供給數	殘數
煉瓦	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇
土管	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇

製品供給先區分

印刷局擴張工事 仁川水道水源池 第一銀行韓國總支店建築  
廣通館建築 內閣煉瓦塲建築 度支部官舍  
工業傳習所實習室建築 大韓醫院醫學校建築 漢城衛生會  
統監府鐵道管理局 平理院廳舍附屬家建築 學部官舍  
農商工部官舍 大韓醫院官舍 其他

三 隆熙三年度 (明治四十二年)

製產高

種別	製產數	供給數	殘數
煉瓦	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇
土管	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇

製品供給先區分

仁川水道水源池	釀造試驗場建築	度支部倉庫建築
度支部官舍	内部官舍	内部官舍
農商工部廳舍	農商工部官舍	學部官舍
法部官舍	内閣官舍	建築所廳舍
建築所官舍	親衛府官舍	財務監督局官舍
財務署官舍	警視廳官舍	大韓醫院附屬家建築
漢城衛生會	京城裁判所官舍	昌德宮秘苑植物室本館建築
宮内府御苑事務局	廣通館建築	仁川燈臺局
會計検査局附屬家建築	工業傳習所寄宿舍建築	印刷局煉瓦場建築
東亞煙草會社京城工場建築	第一銀行韓國總支店建築	駐荷軍經理部
平壤控訴院建築	釜山稅關倉庫	永登浦監獄
太田區裁判所建築	大邱控訴院建築	仁川稅關排水工事
太田政府倉庫建築	度量衡課龍山分室修繕工事	開城茶政局人蔘試植
財源調査局朱安鹽田	其他	

## 四 隆熙四年度 (明治四十三年)

本年度ニ至リ政府所要ノ建築工事倍々増加シ從テ製品ノ需用愈多ク就中煉瓦ノ如キハ一般ノ需要ニ應スルヲ得サルノ狀況ナリ而シテ本年度ニ於

ケル生産額ノ豫定ハ煉瓦八百萬本、瓦五十萬本、土瓦六萬本ニシテ製品ヲ供給シツ、アル建築工事ハ左ノ如シ

内部廳舍建築	内部官舍	度支部廳舍増築
度支部官舍	南大門稅關廳舍其他建築	東亞煙草會社京城工場建築
農商工部廳舍建築	大韓醫院増築	土地調查局廳舍建築
學部倉庫建築	學部官舍	工業傳習所増築
司法廳舍増築	中部警察署廳舍建築	中部警察署官舍
釀造試驗場増築	仁川稅關倉庫建築	釜山稅關廳舍建築
平壤控訴院廳舍建築	大邱控訴院廳舍建築	大邱監獄廳舍其他建築
駐荷軍經理部	宮内府圖書館建築	韓國銀行建築
京城監獄排水工事	鑛務局官舍	建築所官舍
韓國鐵道管理局	其他	

## 四 收支計算

年 度	實 收	歲 入	歲 出	差 引 利 益 額
隆熙元年度 (明治四十三年)	五,一八〇,〇〇〇 八,八八〇,〇〇〇	五,〇〇〇,〇〇〇 三,五八〇,〇〇〇	四,二二〇,〇〇〇 二,二二〇,〇〇〇	八,六六〇,〇〇〇 一,七〇〇,〇〇〇
同 二年度 (明治四十四年)	五,一八〇,〇〇〇 八,八八〇,〇〇〇	五,〇〇〇,〇〇〇 三,五八〇,〇〇〇	四,二二〇,〇〇〇 二,二二〇,〇〇〇	八,六六〇,〇〇〇 一,七〇〇,〇〇〇

備考

建築所ニ於テ建築ニ係ル諸工事ニ供給スル製品價格ハ殆ト製造實費ニシテ市價ノ半ハニ達セス故ニ收支計算ハ前表ノ如シト雖政府ハ低廉ニシテ精良ナル材料ヲ使用セルヲ以テ建築上ニ於テ利スル所甚タ多シ

同 明治三十二年 度	明治三十三年 度	明治三十四年 度	明治三十五年 度	明治三十六年 度	明治三十七年 度	明治三十八年 度	明治三十九年 度	明治四十年 度	明治四十一年 度	明治四十二年 度	明治四十三年 度	明治四十四年 度	明治四十五年 度	明治四十六年 度	明治四十七年 度	明治四十八年 度	明治四十九年 度	明治五十年 度	明治五十一年 度	明治五十二年 度	明治五十三年 度	明治五十四年 度	明治五十五年 度	明治五十六年 度	明治五十七年 度	明治五十八年 度	明治五十九年 度	明治六十年 度	明治六十一年 度	明治六十二年 度	明治六十三年 度	明治六十四年 度	明治六十五年 度	明治六十六年 度	明治六十七年 度	明治六十八年 度	明治六十九年 度	明治七十年 度	明治七十一年 度	明治七十二年 度	明治七十三年 度	明治七十四年 度	明治七十五年 度	明治七十六年 度	明治七十七年 度	明治七十八年 度	明治七十九年 度	明治八十年 度	明治八十一年 度	明治八十二年 度	明治八十三年 度	明治八十四年 度	明治八十五年 度	明治八十六年 度	明治八十七年 度	明治八十八年 度	明治八十九年 度	明治九十年 度	明治九十一年 度	明治九十二年 度	明治九十三年 度	明治九十四年 度	明治九十五年 度	明治九十六年 度	明治九十七年 度	明治九十八年 度	明治九十九年 度	明治百年 度
------------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-----------

## 第二章 開港場設備

### 第一節 港灣改良ノ目的

從來當國各開港場ニ於ケル海運連絡ノ設備ハ人工ヲ加フルコト極メテ少ナク專ラ天然ノ地形ヲ利用シテ僅カニ物資ノ積卸ヲナシ得ルニ止マリ之ニ伴フ關稅行政亦頗ル幼稚ニシテ最モ不完全ノモノタルヲ免カレサルノ實況ナリ蓋シ港灣設備ノ良否及海陸連絡ノ便否如何ハ一國通商貿易上ノ隆頽ニ至大ノ關係アリ近時國運ノ發展スルト共ニ貿易ノ増進ハ各開港場共ニ其程度頗ル著シク光武十年(明治三十九年)ニ至リ既往十箇年間ニ於ケル輸出入金額增加率ハ實ニ四倍強ニ達セリ如此増進顯著ナル趨勢ナルニ際シ海陸運輸連絡ノ設備ヲ顧ミルコトナク稅關ノ設備亦不完全ノ儘ニ放任スルカ如キハ國家經濟上ノ損失尠少ナラサルノミナラス交通貿易ノ進展ヲ阻害スルコト大ナリトス故ニ光武十年(明治三十九年)之カ改善ノ策トシテ各開港場ヲ通シテ稅關ノ設備ヲ完全ニシ關稅行政ヲ敏活ニ施行スル爲ニ各開港場ノ港灣工事ヲ施シテ海陸ノ聯絡ヲ計リ運輸交通ヲ便ニシテ

益通商貿易ノ發展ヲ期セントスルノ議ヲ決シ直ニ各開港場ヲ調査シ第一期税關擴張設備工事トシテ刻下應急ノ設備計畫ヲ立テ光武十年明治三十九年以降五箇年繼續事業ト爲シ海關工事費金參百貳拾貳萬餘圓ノ豫算ヲ編成セリ其後隆熙二年(明治四十一年)ニ至リ嶺南浦及ヒ其他ニ於テ追加工事施行ノ必要ヲ認メ更ニ繼續年限參個年ヲ延長シ隆熙七年度明治四十六年竣工ノ豫定ヲ以テ經費ヲ増額シ總工事費ヲ四百九拾萬餘圓ト更正セリ

## 第二節 税關設備工事計畫

各開港場ニ於ケル税關設備ハ凡テ創設ニ屬スルヲ以テ第一期ノ計畫トシテハ先ツ以テ應急設備ノ方針ヲ採リ財政ノ許ス範圍ニ於テ其計畫ヲ定メタルモノナリ而シテ之等ハ應急設備計畫ト雖執レモ將來ノ豫定計畫ヲ定メ之ニ對シテ其急ナル部分ヨリ實施スルノ方針ヲ採リ海面ノ埋築又ハ港内ノ浚渫或ハ陸上ノ設備鐵道及道路ノ連絡等ニ至リテモ努メテ將來ノ擴張計畫ニ支障ナカランコトヲ期シ他日ノ發展ヲ豫想シタルモノナリトス故ニ大規模ノ築港事業ノ如キハ凡テ之ヲ他日ニ譲レリ

今各開港場税關設備工事計畫ノ大要ヲ舉クレハ左ノ如シ

### 一 仁川税關工事

仁川税關設備ハ現在仁川税關地先竝ニ英國領事館ノ丘角ヨリ仁川停車場附近ニ至ル海面ヲ埋築シテ其沿岸ヲ物揚場トシ數個ノ棧橋ヲ突出シ埋立地ニハ税關諸廳倉上屋倉庫ヲ築造シ鐵道線ヲ此地區ニ導キ海陸運輸ノ便ヲ計ルヲ以テ其目的トス

税關埋立地ハ面積約一萬八千坪ニシテ其水際延長約五百間ハ物揚場又ハ護岸石垣ヲ築造シ岸頭ニハ貨物昇降用起重機ヲ設ケ鐵脚棧橋長六十間一基木造棧橋長四十間四基トス尙ホ構内ニハ道路下水點燈ノ設備ヲ完備シ建築物ハ税關本館貨物検査所監視部等約三百坪ニシテ倉庫上屋ハ數棟ニ分テ總坪數約二千二百坪ニ及フ

内港淺所面積約六萬六千七百坪ハ朔望干潮面下約十尺ニ浚渫ス尙大月尾島外港ニ面スル一角ニ海港檢疫所ノ設備トシテ檢疫事務所消毒所患者收容所等ヲ設ク

以上工事費豫算額ハ九拾四萬六千貳百八拾七圓ニシテ木工事ヲ起工セシ

ハ光武十年九月明治三十九年目下工事中ニ屬シ隆熙五年度明治四十四年竣功ノ豫定ナリ

## 二 釜山税關工事 附釜山整平工事

釜山税關設備ハ專ラ京釜鐵道線ノ基點釜山新停車場ノ設備ト相俟ツテ海陸ノ運輸聯絡ヲ計ルヲ以テ目的トシ釜山停車場西側地先ヲ埋築シテ其南端ヨリ延長約二百三十九間ノ突堤ヲ築造シ其外側ハ防波石垣トナシテ突堤内部水面ノ靜穩ヲ計リ又其内側ニ併行シテ鋼鐵片棧橋ヲ設ケ水深常ニ四尋ヲ保ナテ三千噸乃至四千噸ノ船舶二隻ヲ同時ニ繫留セシムルニ足ツシメ突堤中部ニハ棧橋ト併行シテ上屋倉庫數棟ヲ建築シ其前面ト背面ニハ停車場構内ニ聯絡シテ鐵道數線ヲ布設シ又棧橋ヨリ停車場及市街商業地區ニ直續スル道路ヲ設ケ

埋立地面積ハ約一萬三千坪ナリ其水際延長約三百間ハ物揚場及護岸石垣トナシテ舢舨荷役ニ便ナラシメ岸頭ニハ貨物昇降川ノ起重機數臺ヲ設備シ更ニ新ニ築造セル延長約三百八十間ノ物揚場石垣四字形水面積約六千坪ノ安全ナル舢舨溜ヲ抱擁シテ舢舨帆船ノ岸接荷役ヲ便ニス又埋立地所

ハ道路下水點燈及水道ノ設備ヲ完備ス

税關廳舎ハ鐵道停車場本線ト幅員十間ノ道路ヲ距テ、相對シ莊麗ナル煉瓦造二階建トス又税關監視部廳舎ハ棧橋基部ニ建設シ木造二階建ニシテ樓上ニハ貴賓室ノ設備ヲ施ス

又水產物輸出入場トシテ現在税關構内及現在税關船溜水面積内ヲ改築シ漁港トシテ必要ナル設備ヲ此地區ニ施シ其水面積六千餘坪ヲ殘存シテ主トシテ漁船ノ泊地ニ充テ周圍ノ沿岸ハ斜面ヲ有スル石垣トナシテ水產物ノ荷揚場トシ以テ漁船ノ安全ト荷役ノ利便トヲ計リ石垣ニ接シテ冷藏庫及製氷庫ヲ建設シテ「レモン」トン、アンモニア壓搾器武臺ヲ据付ケ一日九噸ノ製氷力ト六噸ノ冷藏力トヲ保タシメ以テ常ニ生魚ノ需給ニ支障ナカラシメ其他水產物ノ競賣竝ニ其ノ荷造場、蓄鹽庫、水產物鹽藏庫、干燥水產物庫等ヲ建築シ輕便鐵道ヲ布設シ道路ヲ具備シテ水產物ノ取扱ト運搬トニ便ナラシメ更ニ構内樞要ノ地區ニ税關出張所及水產物取扱事務所ヲ建築シテ水產業者ニ利便ヲ與フルノ施設ヲナス

檢疫所設備ハ釜山港口神仙臺ト稱スル海岸沿ヒノ箇所ニ檢疫事務所、消毒

内患者收容所等ヲ設ク

以上工事費豫算額ハ百四拾四萬千四百〇八圓ニシテ木工事ヲ起工セシハ光武十年明治三十九年七月ニシテ目下工事中ニ屬シ隆熙五年度明治四十四年竣工ノ豫定ナリ

#### 釜山鑿平工事

釜山鑿平工事ハ營繕山度支部所管竝ニ英國領事館山鐵道管理局所管ヲ鑿平シ併セテ草梁停車場船繫場間ノ海面ヲ埋築シ草梁釜山間ノ市街ヲ聯絡シテ釜山港ノ貿易發展ニ伴フ商業地區ノ擴張ヲ期セントス

釜山港ハ南韓唯一ノ重要港灣ニシテ海陸交通上ニ於テ樞要ノ位置ヲ占メ船舶ノ出入逐年多キヲ加ヘ陸上ハ縱貫鐵道ノ基點ト爲リ年々交通頻繁ノ度ヲ激増スト雖其港灣ニ面スル地域ハ山迫リ平地極メテ狹隘ニシテ海陸聯絡設備ノ一部分ニ供スル面積ニモ不足スル狀況ナルヲ以テ釜山居留民團ハ苟クモ商港トシテ港灣ノ設備ニ伴フ必須ナル市街ノ設備ヲ爲スヘキ餘地ナキカ如キハ貿易港トシテ頗ル遺憾トスルトコロナリトシ隆熙二年(明治四十一年)十月民團事業トシテ木工事ヲ遂行センコトヲ政府ニ請願シ

政府ハ必要ニシテ有利ノ事業ナリト認メ本事業ニ要スル資金起債ニ對シ元利金支拂ノ保證ニ立テ事業ノ經營及ヒ施行ヲ政府ニ委託スヘキコトヲ條件トシ隆熙三年(明治四十二年)一月本事業ヲ認許ス

木工事ハ營繕山及元英國領事館山ヲ開鑿シ其土砂岩石ヲ以テ元英國領事館山ト草梁鐵道船繫場間ノ鐵道沿線海面ヲ埋築シ新ニ一大地域ヲ作ルヲ目的トシ營繕山ハ埋築地上ヨリ平均五尺ノ高サニ切り取り元英國領事館山ハ同四尺ノ高サニ切り取り鐵道船繫場前面ニ百五十間ノ防波堤ヲ築造シテ舢舨溜ヲ作り防波堤ニ面スル埋築地護岸石垣ハ荷揚場トシテ幅員二間乃至四間ノ斜面張石ヲ施ス木工事ニ依リ生スル土地總面積ハ四萬三千五百四十八坪トス

木工事費豫算額ハ九拾貳萬圓ニシテ之ニ要スル資金債ハ壹百七萬圓ナリ資金債ノ償還ハ隆熙十年(明治四十九年)三月ヲ以テ終了スルノ契約ニシテ木工事ヲ起工セシハ隆熙三年(明治四十二年)五月一日ニ係リ目下工事中ニ屬シ竣工ハ隆熙六年度(明治四十五年)ノ豫定ナリ

右釜山鑿平工事ハ釜山稅關設備工事及釜山鐵道停車場設備工事ト相俟ツ

テ緊要缺シヘカワサル事業ナリトス

### 三 元山税關工事

元山税關設備ハ元山税關海面ノ一部ヲ「形」埋築シテ上屋倉庫ノ地區トシ一面ニハ安全ナル船入場ヲ構成シ埋築地ノ沿岸ニハ物揚場石垣ヲ築造シ岸頭ニハ起重機ヲ据付テ尙ホ本港東北ノ風浪ヲ防壓スル爲埋立地前面ニ防波堤延長約二百五十間ヲ築造シ又西方元山居留地海岸ヨリ棧橋ヲ築造シテ防波堤トノ間ニ靜穩ナル水面積五萬四千坪ヲ包擁セシメ居留地海岸ニハ海壁ヲ築造シ赤田川河口ニハ防砂堤九十間ヲ築キ漂砂ノ漂流ヲ防禦ス

港口葛麻牛島ノ一部ニハ檢疫所ノ設備ヲ爲ス

本工事費豫算額ハ四拾九萬千四百貳圓ナリ本工事ヲ起工セシハ光武十年明治三十九年八月ニシテ目下工事中ニ屬シ隆熙四年度明治四十三年竣工ノ豫定ナリ

### 四 甌南浦税關工事

甌南浦税關設備ハ現在税關ハ海岸ヨリ隔絶シ不便ノ地ニ在ルヲ以テ新ニ

大同江岸明狹通ヲ夾ミタル地區ヲ鑿平埋築シ諸廳舍竝ニ上屋倉庫數棟ヲ新築シ河岸ヲ整理ス尙ホ埠頭附近ニ棧橋ヲ突出シテ干潮時ト雖荷役ヲ便ニス又現在市街ト飛濺島トノ間ニ介在セル干潟地ヲ堀鑿シ海陸連絡ノ爲ニ内港ヲ施設セントス内港ノ施設ハ開船渠ヲ築造シ船溜内ノ水面ハ開門ニ依リテ殆ト一定シ其最低限度ヲ小滿潮面ニ止マラシムルヲ以テ船溜内ノ船舶ハ岸接繫留シテ荷役ニ便ナラシメ船溜ハ南方假締切堤ニ依リ外海ト分界シ東方埋立地ヲ築造シテ飛濺島ニ連ナル埋立地沿岸ノ一部延長約九十間ハ繫船岸壁トナシ溜船ヲ横付ニシ他ノ沿岸ハ物揚場護岸トシ帆船竝ニ靜船ノ繫留場タラシム開門ハ幅七十二尺、扉ハ一箇所ニ之ヲ備フルノ計畫ナリ尙ホ將來豫定ノ擴張計畫ヲ待ツテ本工事ノ完成ヲ期セントスルモナリ

本工事費豫算額ハ百拾四萬參千四百八拾貳圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ光武十年明治三十九年八月ニ係リ目下工事中ニ屬シ竣工ハ隆熙七年度明治四十六年ノ豫定ナリ

### 五 其他ノ税關設備工事

一 清津税關設備ハ新開港場トシテ總テ新ニ設備ヲ要ス其主タルモノハ船入場ノ築造ニシテ東西防波堤總延長約百八拾五間ヲ築造シテ風浪ヲ防禦シ内部水面積約一萬二千坪ハ靜穩ナル船入場トナシ沿岸ヲ整理シ水面ノ一部ヲ埋築シテ物揚場ヲ設置シ税關構内ニ於テ諸廳舍及上屋倉庫ヲ新築ス而シテ本工事費豫算額ハ四拾貳萬六千五百六拾六圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ隆熙二年(明治四十一年)四月ニ係リ目下工事中ニ屬シ隆熙四年度(明治四十三年)竣工ノ豫定ナリ

二 城津税關設備ハ防波堤九十間ヲ改築シ物揚場石垣八十間ヲ新設シ其他廳舍及倉庫ヲ建築ス而シテ本工事費豫算額ハ四萬八千七百八拾圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ隆熙三年(明治四十二年)七月ニ係リ隆熙四年度(明治四十三年)竣工ノ豫定ナリ

三 馬山税關設備ハ構内地均シ道路工事ヲ施シ棧橋ヲ増築シ倉庫ヲ建設ス而シテ本工事費豫算額ハ壹萬千圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ隆熙三年(明治四十二年)十二月ニ係リ隆熙四年度(明治四十三年)竣工ノ豫定ナリ

四 本浦税關設備ハ現在税關竝ニ榮山江ニ面スル海岸地區ニ於ケル一部ヲ

面積二千三百六拾一坪埋築シ海岸ニハ石造埠頭數箇所ヲ設ケ尙ホ棧橋ヲ設置シ諸廳舍及上屋倉庫數棟ヲ設ケ而シテ本工事費豫算額ハ九萬參千六百八拾圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ光武十年(明治三十九年)八月ニ屬シ隆熙三年度(明治四十二年)竣工セリ

五 群山税關設備ハ錦江河岸ノ地區ニ新ニ税關ヲ移シ河岸ニハ棧橋ヲ設置シ面積五百二十拾二坪ヲ埋築シテ沿岸物揚場ヲ整理シ廳舍其他上屋倉庫數棟ヲ設ケ而シテ本工事費豫算額ハ八萬九千六百五拾圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ光武十年(明治三十九年)十月ニシテ隆熙三年度(明治四十二年)竣工セリ

六 新義州税關設備ハ鴨綠江南岸ノ地區ニ於テ棧橋ヲ突出シテ干潮時ト雖荷役ヲ便ナラシメ又税關諸廳舍及倉庫ヲ新築シ其他必要ノ位置ニ監視所ヲ新築ス而シテ本工事費豫算額ハ四萬千六百四拾壹圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ隆熙元年(明治四十年)六月ニ係リ隆熙四年度(明治四十三年)竣工ノ豫定ナリ

七 平壤税關設備ハ新タニ大同江岸ニ接シ廳舍ヲ新築シ突堤竝ニ荷揚場ヲ

造シ其他倉庫ヲ建設ス而シテ本工事費豫算額ハ參萬五千圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ隆熙三年明治四十二年四月ニ係リ隆熙四年度明治四十四年竣工ノ豫定ナリ

八、京城稅關設備ハ京釜鐵道南大門停車場直續ノ地區ニ於テ稅關出張所及保稅倉庫其他官舎ヲ設置ス

本工事費豫算額ハ拾貳萬六千五百九拾四圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ隆熙元年明治四十年七月ニ係リ隆熙四年度明治四十三年竣工ノ豫定ナリ

### 九、大邱稅關設備ハ倉庫ヲ新設スルニ止ム

本工事費豫算額ハ五千六百圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ隆熙三年明治四十二年三月初マリ隆熙四年度明治四十三年竣工ノ豫定ナリ

### 六 各稅關設備工事費豫算年度別一覽表

費目	明治十年度 (明治十年)	明治十一年度 (明治十一年)	明治十二年度 (明治十二年)	明治十三年度 (明治十三年)	明治十四年度 (明治十四年)	明治十五年度 (明治十五年)	明治十六年度 (明治十六年)	明治十七年度 (明治十七年)	計
海關工事費	三、二五三、二五三	一、三三三、三七七	一、三三三、三七七	七九七、七九七	二、六八八、四四四	二、六八八、四四四	一、四〇〇、〇〇〇	一、四〇〇、〇〇〇	一、四〇〇、〇〇〇

仁川稅關工事費	六、九八三、二五三	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇
群山稅關工事費	五、八六三、二五三	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇
木浦稅關工事費	二、五七〇、〇〇〇	一、〇六七、一〇六	一、〇六七、一〇六	一、〇六七、一〇六	一、〇六七、一〇六	一、〇六七、一〇六	一、〇六七、一〇六	一、〇六七、一〇六	一、〇六七、一〇六
京城稅關工事費	八、二二〇、〇〇〇	九、八八四、八八四	九、八八四、八八四	九、八八四、八八四	九、八八四、八八四	九、八八四、八八四	九、八八四、八八四	九、八八四、八八四	九、八八四、八八四
釜山稅關工事費	六、〇〇〇、〇〇〇	四、二二九、九八八	四、二二九、九八八	四、二二九、九八八	四、二二九、九八八	四、二二九、九八八	四、二二九、九八八	四、二二九、九八八	四、二二九、九八八
元山稅關工事費	二、五三〇、〇〇〇	七、一三三、一三三	七、一三三、一三三	七、一三三、一三三	七、一三三、一三三	七、一三三、一三三	七、一三三、一三三	七、一三三、一三三	七、一三三、一三三
清津稅關工事費	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇
新義州稅關工事費	七、七〇〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇
城津稅關工事費	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇
大邱稅關工事費	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇
馬山稅關工事費	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇
平壤稅關工事費	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇	二、五三〇、〇〇〇

## 第三章 印刷事業

## 第一節 沿革

從來當國ニ於ケル幣政ノ變遷ハ前述ノ如ク財政整理以前ニ在リテハ貨幣ノ鑄造ハ凡テノ人民ニ之ヲ默許セシヲ以テ惡貨ノ流通甚シク之カ處置ハ當局者亦大ニ苦ミタリ依テ政府ハ茲ニ見ル處アリ造幣事業ヲ統理スル必要ニ上典圖局ヲ創設スルコト、ナリ開國四百九十六年明治二十年十二月京城昭義門所謂西小門内ニ之ヲ設置シ先ツ赤銅五文錢及黃銅拾文錢ノ二種ヲ製造セシカ越エテ開國五百一年明治二十五年十月ニ至リテ仁川花村ニ移轉シ銅貨壹厘錢、白銅貨貳錢五分錢、赤銅五分錢及黃銅壹分錢ノ四種ノ製造ヲ開始セリ光武二年明治三十一年七月更ニ龍山軍資監倉ニ移轉ス該監倉ハ從來地方ノ納稅米穀ヲ查收貯藏スルカ爲ニ設ケラレタルモノニシテ一時ハ全國ノ納入米穀ハ水陸ヨリ此ニ集中セラレタルヲ以テ規模頗ル廣大ナリシカ開國五百三年明治二十七年ノ變革ニ際シ米納ヲ變シテ金納トナシタル以來此大倉庫ノ用モ亦一時ニ廢セラレ終ニ久シク空屋タリシカ

典圖局ハ工事ノ都合上廣キ構内ヲ必要トスル爲之ヲ利用スルコト、ナリ度支部大臣ノ直轄ノ許ニ事業ヲ開始シタリ其工場及事務室ノ建坪ハ千九坪ニ達シ銀貨半圓錢、白銅五錢、白銅貳錢五分及赤銅五分錢ノ四種ヲ製造シタリ是ヨリ先キ農商工部ニ於テハ印刷局ヲ起シ收入印紙及郵便切手等ヲ製造センカ爲技師、技手數人ヲ日本ヨリ傭聘シ原版ノ彫刻及印刷ヲ實施シタリシカ此際政府ハ進ンテ正貨ノ外ニ紙幣ヲ發行流通セシメントスル計畫ヲ立ツルニ及ヒテ光武五年明治三十四年四月農商工部印刷局ヲ廢シ新ニ典圖局ニ印刷課ヲ設ケ從前農商工部ニ於テ使用セシ技術者及印紙、切手等ノ原版ヲ典圖局ニ移シ進ンテ同局内ニ造紙所ヲ起シ以テ紙幣用紙ノ抄造ト其印刷トヲ併行セントシタリ然レトモ此計畫ハ容易ニ行ハレ難クシテ實際ニ完成シタルモノハ收入印紙、郵便切手、同端書、國書紙、親書紙、勅記紙等ノ數種ニ過キス爾來紙幣ニ關シテハ其用紙ノ抄造ニ腐心シ屢々試抄ヲ行ヒタルモ連リニ失敗シ中途之ヲ拋棄シタルモノノ如シ光武六年明治三十五年ニ及ヒテ益正貨ヲ濫造シ同時ニ紙幣ノ製造ニ努メタルモ當時ノ技術ヲ以テシテハ終ニ完全ナル紙幣ヲ製造シ得サリ然ルニ光武八年明治

三十七年財政顧問ハ財政整理著手ト共ニ典圖局ヲ以テ幣政紊亂ノ禍源ナリトシテ之ヲ廢止シ新ニ印刷局ヲ起シ度支部大臣ノ直轄官廳トシテ翌年明治三十八年二月官制ヲ改メテ度支部内ノ一局トナシタリシカ同年三月一日火ヲ失シ工場全部燒失セシニ依リ新ニ之ヲ築造シ益之カ盛大ナ期セリ隆熙二年明治四十一年一月諸官制改正ニ際シ再ヒ之ヲ特立ノ一官廳トナシ度支部大臣管理ノ下ニ印刷製紙事業ヲ直營セシメ以テ斯業ノ發達ヲ計レリ

## 第二節 擴張計畫

前述ノ如ク印刷局ハ一旦失火ノ爲ニ工場全部ヲ燒失シタルモ當時財政整理ノ業著々進拂シ之ニ伴フテ印刷ノ事業多端ニ亙リ晝夜兼行業ヲ急クヘキモノアリ例セハ各道ニ設置セラレタル農工銀行株券若ハ倉庫會社ノ株券收入印紙或ハ各種計畫案報告書諸用紙等皆速成ノ必要アリ假工場ノ設備未タ完カラスシテ事業ハ即チ要急ノモノノミ加之政府ノ財政計畫上新ニ紙幣ヲ製造スルノ準備計畫ノ成ルアリテ政府ハ爰ニ印刷工場ノ新築擴張ヲ企畫セリ之ニ依リテ光武十一年明治四十年ノ初ニ至リ右擴張計畫ヲ

決定シ之カ總豫算額トシテ四拾參萬八千四百參拾八圓ヲ運用シ同年四月先ツ活版工場百七十坪ノ修理擴張ヲ了シ次テ貴重印刷工場ノ新築擴張工事ニ著手スルヲ得タリ當時計畫ノ要旨左ノ如シ

### 一 技術ノ種類及生産能力

一印刷術ノ種類ヲ舉クレハ左ノ如シ

各種銅版、鋼版ノ彫刻及印刷 各種寫眞製版及印刷

各種石版ノ製版及印刷 各種貴重紙ノ抄造

二印刷物及製紙ノ種類ヲ舉クレハ左ノ如シ

銀行券、印紙、公債證書、株券、免狀、商標、地圖、鑑札、手形、證券、小切手、教育圖書、肖像風景等

三簡年間ノ生産能力ハ左ノ豫定ニ依ル

銀行券 二百萬枚

印紙(百枚續キ) 百萬枚

公債證書、株券、免狀等 三十萬枚

其他銅版、石版、寫真版等ノ雜印刷物 百七十萬枚  
公債證書、株券、免狀等 三十萬枚  
官誥紙、勳記紙 八十萬枚

(銀行券用紙ハ東京印刷局ノ製品ニ依ル豫定)

## 二 工事經過

擴張計畫ノ内建築工事ノ設計及其施行上ノ監督検査其他工事契約工場取締ノ事務ハ專ツ之ヲ度支部建築所ニ委託シ隆熙元年明治四十年七月工ヲ起シ同年中ニ土工ノ全部及官舎三十戸ノ建築ヲ竣成シ印刷工場竝ニ製紙工場増築ノ分ハ孰レモ基礎及組立ノ一部ヲ了リ越エテ同三年明治四十二年六月兩工場全部ノ工事ヲ竣成シタリ

製紙機械及發電所ノ設備ニ關シテハ東京印刷局ニ依頼シテ其設計ヲ立テ其他工場用各種機械ハ隆熙元年明治四十年中ニ注文契約ヲ了シ而シテ翌年中ニ於テ諸機械到着シ隆熙三年明治四十二年上半季ニ於テ其据付ヲ了シタリ

工事完成シテ新舊工場ヲ合計セハ印刷所千三百〇八坪、製紙所二百八十坪、

雜建物千百八十九坪ナ有スルニ至リ猶附帶設備トシテ工作所一棟、發電所一棟、給水所一棟、貯水池一箇所ヲ有シ工場内動力、電燈、用水ノ供給等完全ナルヲ得タリ

## 第三節 工場配置

本局新舊工場ノ修理及擴張共ニ其工事完了ヲ告ケタルヲ以テ隆熙三年明治四十二年七月ヲ以テ工場各室所ノ配置ヲ改正シ直ニ之ヲ實施シタリ

### 一、第一印刷所(舊來ノ工場)

普通活版ノ製版及印刷製本ノ作業之ニ屬ス之ヲ區分シテ鑄造室、植字室、校正室、活版室、整工室トナス

### 二、第二印刷所(新建ノ工場)

貴重品ノ製版及印刷整工ノ作業之ニ屬ス之ヲ區分シテ圖案室、整版室、電胎室、凸版室、凹版室、石版室、寫真室、製肉室、肉棒室、乾燥室、整工室トナス圖案室ハ圖案及原版ノ彫刻ヲ掌リ整版室ハ此ノ原版ニ基キテ實用版ヲ整備シ電胎室ハ電氣作用ニ依リテ版面ノ増殖ヲ掌リ凸凹版及石版室ハ皆各其名稱ノ版式ニ依ル印刷ヲ掌ル

### 三製紙所

證券、株券、官誥紙等貴重用紙ノ抄造作業之ニ屬ス之ヲ區分シテ原料室、蒸灰室、調理室、抄紙室、乾燥室、整工室トナス

### 四京城出張所

官報ノ印刷及各部要急印刷物ヲ速成スル爲大漢門前ニ出張所トシテ小工場ノ設ケアリ普通活版ノ設備ニ止マレリ

### 第四節 事業概要

典圖局印刷課ハ光武五年明治三十四年四月ノ設置ニ係リ今日ニ至ル約十年ノ經過ヲ見ル然レトモ中途祝融ニ遭ヒ其ノ前半五年ノ事業及其計畫ヲ廢滅セシメタリ依テ光武十一年明治四十年以降新ニ工場ヲ修理及擴張シ其工事ノ進捗ニ伴フテ事業亦漸次ニ増進シ本年ニ至リ初メテ當始ノ目的タル紙幣製造ノ實施ニ到着シ將ニ後半季ヨリ之ヲ開始セントス即チ此後半五年ハ專ラ準備時代ニ屬シタルヲ知ルヘシ然レトモ此準備時代ニ於テモ要急ノ印刷物ハ悉ク之ニ應シテ進捗ヲ圖リ以テ各官衙及銀行其他公共團體等ノ急需ヲ充スヲ得タリ今最近數年間ニ印刷局カナシタル重要ナル

モノヲ舉ケレハ左ノ如シ

### 一、收入印紙

### 三、出給命令用紙

### 五、共同倉庫會社株券

### 七、小切手用紙類

### 九、農工債券

### 十一、國庫債券及第二回農工債券

### 十三、金融事項參考書

### 十五、度支部定期刊行物

### 十六、關稅局定期刊行物

### 十七、學部編纂曆本及教科用書

### 十九、統監府及其所管官署刊行物

### 二十、官報、法規類及職員錄

### 第五節 技術ノ整備

技術ノ威嚴ト作業上ノ信用トハ印刷事業ノ生命ナリ印刷局ハ其擴張工事

### 二、手形用紙

### 四、農工銀行株券

### 六、韓一銀行株券

### 八、國有地小作認許證

### 十、韓國銀行株券

### 十二、增補文獻備考

### 十四、度支部統計年報

### 十六、度支部公報、韓國經濟月報

### 十八、農商工部刊行物

### 二十、各官衙帳簿類

### 二十一、各官衙帳簿類

### 二十二、各官衙帳簿類

### 二十三、各官衙帳簿類

竣成以來工場ノ配置、新器械ノ据付、暖管用水ノ設備略完成シタルモ前記ノ如ク技術ノ威信ヲ維持セシムルハ尙ホ之ヲ以テ足レリトセス即チ技術者ノ増聘作業ノ改善、工場ノ監視、徒弟ノ教育等細大ニ亙リテ之ニ着手ス之ヲ活版部ニシテハ母型ノ整理、活字ノ改鑄、新體活字ノ創始或ハ當國古來ノ眞鍮版ヲ利用シテ新式ノ金屬版ヲ案出スル等ノ事アリ之ヲ貴重品印刷部ニシテハ近者特ニ専門ノ圖案彫刻家ヲ聘用シ大ニ改良ヲ施シ整版、電胎、凹版、凸版、各作業ニ至ル迄皆新ニ専門ノ技工ヲ増聘シ以テ一意専心事業ニ當ラシムルアリ本年後半季ニ於テ韓國銀行券ノ製造ニ著手シタル等之ヨリ年々貴重品印刷ノ事項ヲ加ヘ來ラントス抑モ當國諸般ノ政務創始ノ時ニ屬シテ事ヲ起スコト急遽ノ必要ナルコト多シ從テ印刷事業亦之ニ伴フテ急遽ノ運用ヲ必要トスルヲ免レス速成ニシテ精確兼ネテ技術上ノ威信ヲ絕對ニ確保セントス之レ蓋シ當局者苦心ノ存スル所ナリ而モ今ヤ幸ニ經營上及技術上ノ基礎略完成シ專ラ其運用ヲ待ツニ會シ公私ノ急需ニ遭フモ之ニ應接シテ違算ナカラントス

次ニ印刷局ニ於ケル資本額及收支ノ狀況ヲ示セハ左ノ如シ

一 印刷局資本一覽表

隆熙四年(明治四十二年)一月一日現在

種別	數	量	價	格	備考
土地				1100円100	
建物				3500円900	
機械、器具				11110円10	
運轉資本				20000000	定額拾五萬圓ノ内編入濟額
合計				36110円10	

二 印刷局收支累年一覽表

年次	運轉資本編入額	政府支出金額	收入調定額	經費支出額	備考
光武三十九年			495,766	495,766	
同三十八年			744,250	968,799	
同三十七年			744,250	526,440	
隆熙元年	20000000		744,250	526,440	本年度ヨリ特別會計施行
同三十九年			744,250	526,440	
同四十年			744,250	526,440	
同四十一年			744,250	526,440	
同四十二年			744,250	526,440	

## 第四章 航路標識

當國現時ノ航路標識事業ハ明治二十七八年日清戰役ニ際シ日本國政府ニ於テ艦船ノ通航上其設備ノ必要ヲ感シ當國全沿岸ニ於ケル樞要ナル燈臺建設位置及其設置スヘキ燈臺ノ種類等ニ關シ時ノ參謀總長ヨリ逕信大臣ニ商議シ次テ日本ヨリ逕信技師ヲ派遣シ開國五百四年(明治二十八年)六月ヨリ九月ニ至ル四ヶ月間ニ涉リ汽船明治丸ヲ以テ當國全沿岸ノ測量ヲ遂ケ其建設スヘキ位置及設計ノ概要等ヲ調査シタルヲ以テ濫觴トス而シテ其後光武五年(明治三十四年)五月中駐韓日本公使ヨリ日本人民貿易規則中(韓國政府ニ於テ後來通商各港ヲ修理シ及燈臺礁標ヲ設クヘシ云々)トアル趣旨ニ基キ標識設置ノ議ヲ當國政府ニ交渉シ來リタルヲ以テ總稅務司ハ海關收入中ヨリ右設備費トシテ貳拾五萬圓ヲ支出スルコト、シ經歷アル技師ノ招聘及建設位置ノ調査等ニ關シ日本外務省ニ商議シタル結果逕信省ニ於テ海軍省航路標識管理所日本郵船株式會社及大阪商船株式會社等ノ意見ヲ徵シ當國ニ於ケル樞要ナル鴨綠江航路大同江航路自大同江至漢江

航路、仁川航路、群山航路、木浦航路、西岸及南岸航路、釜山航路、元山航路、城津附近航路ノ十航路ニ燈臺三十五、燈竿二、燈船一、挂燈立標二、挂燈浮標十五、浮標三十九、總計九十四箇所ノ建設ヲ豫定シタルモ同年十一月中日日本政府ヨリ技師ヲ派遣シタルヲ以テ更ニ實地ヲ踏査シ全沿岸ニ於テ七十七箇所ヲ選定シタル然レトモ當時經費多端ニシテ到底全都ノ要望ニ應スル能ハサリシヲ以テ結局其内最モ必要ナル地點三十二箇所ニ建設スルコト、爲ヘリ而シテ燈臺建設ノコト決スルヤ之カ管理官廳ヲ置クノ必要ヲ認メ光武六年(明治三十五年)三月海關燈臺局ヲ仁川ニ置キ先ツ同年五月ヲ以テ仁川航路ニ當ル小月尾島、八尾島、北長子嶼及白岩ノ四燈臺ノ建築工事ヲ開始シ尋テ翌年四月、龜島燈臺ノ建築ニ著手シ光武七年(明治三十六年)六月小月尾島外三燈臺ニ翌年四月、龜島燈臺ニ點燈ヲ爲スニ至レリ是韓國ニ於ケル燈臺建設ノ嚆矢ナリトス

光武七年(明治三十六年)十一月日本ヨリ派遣シタル技師ノ辭任スルヤ總稅務司ハ更ニ英國技師ニ囑託シテ專ラ標識ノ設計等ヲ擔任セシメタリ越エテ光武八年(明治三十七年)二月日露ノ國交破裂シタル爲日本政府ハ艦船ノ

航通上鴨綠江方面ニ於ケル燈臺ノ急施ヲ感シ該江口ヨリ清國安東縣ニ至ル航路ニ燈臺竝浮標ヲ設置スルコト、シ日本大本營ニ於テ同年四月以降ニシテ建設ニ著手シ多數ノ浮標ヲ碇置シタリ又同年五月大和島燈臺ヲ建設シ同七月ヨリ點燈ヲ開始シタリ其他韓國西岸七發島竹島及南岸巨文島ニ燈臺ヲ建設シ又海軍ニ於テハ南岸牛島及鴻島竝東岸蔚崎及葛麻角ニ燈竿ヲ建設シ韓國政府又釜山港古館ニ導燈ヲ港内鵝ノ瀬ニ挂燈立標ヲ建設シタリ進ンテ光武九年明治三十八年ニ至リ曩ニ囑託シタル英人ノ職ヲ解キ翌年二月中更ニ日本ヨリ技師ヲ招聘シ同年三月海關燈臺局ヲ稅關工部燈臺局ト改稱シ航路標識ニ關スル一切ノ業務ヲ管掌スルコト、爲シ一方光武十一年明治四十年三月マテノ間ニ於テ曩ニ大本營及海軍ノ經營シタル標識全部ノ引繼ヲ受ケ茲ニ初メテ韓國ニ於ケル標識事業ヲ統一スルコト、ナレリ斯クシテ稅關工部燈臺局ニ於テハ韓國全沿岸ヲ通シテ八十餘箇所ニ標識設置ノコトヲ計畫シ之カ工費トシテ百貳拾六萬九千餘圓ヲ計上シ次テ今日ニ至リタリ而シテ稅關工部燈臺局ノ名稱ハ隆熙二年明治四十一年一月ヲ以テ燈臺局ト改メ隆熙四年明治四十三年四月ヲ以テ航

路標識管理所ト改稱シタリ

今隆熙三年(明治四十二年)末ニ於ケル航路標識種別及海岸別竝同四年(明治四十三年)ニ増減スヘキ航路標識種別及海岸別ヲ舉クレハ左ノ如シ

隆熙三年(明治四十二年)末航路標識種別

[illegible]

二 隆熙三年(明治四十二年)末航路標識海岸別

二八四

名	稱	燈	臺	導	浮	立	導	霧	霧	計
西	海	岸								
南	海	岸								
東	海	岸								
計										

二	〇	一	二	三	四	五	六	七	八	九
一	二	三	四	五	六	七	八	九	〇	一
二	三	四	五	六	七	八	九	〇	一	二
三	四	五	六	七	八	九	〇	一	二	三
四	五	六	七	八	九	〇	一	二	三	四
五	六	七	八	九	〇	一	二	三	四	五
六	七	八	九	〇	一	二	三	四	五	六
七	八	九	〇	一	二	三	四	五	六	七
八	九	〇	一	二	三	四	五	六	七	八
九	〇	一	二	三	四	五	六	七	八	九

三 隆熙四年(明治四十三年)中増減スヘキ航路標識種別

△印ハ三年(四十二年)末ニ對スル減

名	稱	一	二	三	四	五	六	七	八	九	外	計
燈	臺											
導	浮											
立	導											
霧	霧											
計												

霧	霧	專	立	浮	挂	挂	專	燈	燈
					燈	燈			
計					立	浮			
砲	笛	標	標	標	標	標	標	燈	竿
臺									

二	〇	一	二	三	四	五	六	七	八	九
一	二	三	四	五	六	七	八	九	〇	一
二	三	四	五	六	七	八	九	〇	一	二
三	四	五	六	七	八	九	〇	一	二	三
四	五	六	七	八	九	〇	一	二	三	四
五	六	七	八	九	〇	一	二	三	四	五
六	七	八	九	〇	一	二	三	四	五	六
七	八	九	〇	一	二	三	四	五	六	七
八	九	〇	一	二	三	四	五	六	七	八
九	〇	一	二	三	四	五	六	七	八	九

四 隆熙四年(明治四十三年)中増減スヘキ航路標識海岸別

△印ハ三年(四十二年)末ニ對スル減

專燈燈	名
燈竿臺	稱
	西
	海
	岸
	南
	海
	岸
	東
	海
	岸
	計

掛燈浮標	掛燈立標	浮標	立標	導標	霧標	霧標	計
一	一	一	一	一	一	一	二
二	二	二	二	二	二	二	二
三	三	三	三	三	三	三	三
四	四	四	四	四	四	四	四
五	五	五	五	五	五	五	五
六	六	六	六	六	六	六	六
七	七	七	七	七	七	七	七
八	八	八	八	八	八	八	八
九	九	九	九	九	九	九	九
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二
一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五
一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六
一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七
一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八
一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九
二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三
二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四
二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五
二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六
二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七
二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八
二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九
三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
三一	三一	三一	三一	三一	三一	三一	三一
三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
三四	三四	三四	三四	三四	三四	三四	三四
三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五
三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六
三七	三七	三七	三七	三七	三七	三七	三七
三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八
三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九
四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇
四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一
四二	四二	四二	四二	四二	四二	四二	四二
四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三
四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四
四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五
四六	四六	四六	四六	四六	四六	四六	四六
四七	四七	四七	四七	四七	四七	四七	四七
四八	四八	四八	四八	四八	四八	四八	四八
四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九
五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇
五一	五一	五一	五一	五一	五一	五一	五一
五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二
五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三
五四	五四	五四	五四	五四	五四	五四	五四
五五	五五	五五	五五	五五	五五	五五	五五
五六	五六	五六	五六	五六	五六	五六	五六
五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七
五八	五八	五八	五八	五八	五八	五八	五八
五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九
六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇
六一	六一	六一	六一	六一	六一	六一	六一
六二	六二	六二	六二	六二	六二	六二	六二
六三	六三	六三	六三	六三	六三	六三	六三
六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四
六五	六五	六五	六五	六五	六五	六五	六五
六六	六六	六六	六六	六六	六六	六六	六六
六七	六七	六七	六七	六七	六七	六七	六七
六八	六八	六八	六八	六八	六八	六八	六八
六九	六九	六九	六九	六九	六九	六九	六九
七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇
七一	七一	七一	七一	七一	七一	七一	七一
七二	七二	七二	七二	七二	七二	七二	七二
七三	七三	七三	七三	七三	七三	七三	七三
七四	七四	七四	七四	七四	七四	七四	七四
七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五
七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六
七七	七七	七七	七七	七七	七七	七七	七七
七八	七八	七八	七八	七八	七八	七八	七八
七九	七九	七九	七九	七九	七九	七九	七九
八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇
八一	八一	八一	八一	八一	八一	八一	八一
八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二
八三	八三	八三	八三	八三	八三	八三	八三
八四	八四	八四	八四	八四	八四	八四	八四
八五	八五	八五	八五	八五	八五	八五	八五
八六	八六	八六	八六	八六	八六	八六	八六
八七	八七	八七	八七	八七	八七	八七	八七
八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八
八九	八九	八九	八九	八九	八九	八九	八九
九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇
九一	九一	九一	九一	九一	九一	九一	九一
九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二
九三	九三	九三	九三	九三	九三	九三	九三
九四	九四	九四	九四	九四	九四	九四	九四
九五	九五	九五	九五	九五	九五	九五	九五
九六	九六	九六	九六	九六	九六	九六	九六
九七	九七	九七	九七	九七	九七	九七	九七
九八	九八	九八	九八	九八	九八	九八	九八
九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九
一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

## 第五章 海事及開港檢疫

### 第一節 海事

當國ニ於ケル航海業ハ未タ充分ニ發達セサルヲ以テ海事事務ニ關シテハ從來何等根本的法規ナク從テ之ヲ統轄スヘキ機關ナカリシカ隆熙四年明治四十三年三月ニ至リ船舶法規ヲ制定シ之ニ關スル事項ハ新ニ度支部大臣ノ管轄ニ屬セシメ稅關及財務署ヲシテ之ヲ所掌セシムルコト、ナリシヨリ初メテ組織的ニ海事々務ヲ統一スルヲ得タリ今之ヲ船舶海員水路嚮導ニ分テ大要ヲ左ニ記述スヘシ

#### 一 船舶

當國船舶ノ取締ニ關スル法規トシテ見ルヘキハ開國四百九十五年(明治十九年)ヲ以テ公布セラレタル韓國人置用火輪夾板等項船隻章程ニ於テ外國形船舶ノ登録方ヲ規定シタルト光武三年(明治三十二年)勅令第三十三號國內船稅規則ニ於テ船籍及船稅ニ關スル事項ヲ規定シタルトナリ然レトモ之等ハ航海ノ安全ヲ保障スヘキ檢査ニ關スル規定ヲ全然闕乏セルノミナ

ヲス船籍船税ニ關スル規定亦不備缺點多キヲ以テ之カ統一上當局者ハ船  
 船ニ關スル各種法規ヲ制定スル必要ヲ認メ本年三月船舶法船舶検査法船  
 船積量測定法及其實施上必要ナル諸法規ヲ制定シテ之ニ抵觸スル舊法令  
 ヲ廢止シ同時ニ船舶信號ノ方法ヲ定メ共ニ四月一日ヨリ實施シ茲ニ初メ  
 テ船籍ノ登録及各種船舶上ノ權利ノ確認船税ノ徵收及航海ノ安全保護等  
 ニ關スル法規ヲ統一スルヲ得タリ即チ新ニ實施セラルタル船舶法規ニ關  
 スル事務ヲ處理セシムルカ爲ニ各稅關ニ技術官ヲ配置シ検査事務ヲ掌ラシメ  
 總噸數二十噸以上及積石數二百石以上ノ船舶ノ登録及船税ニ付テハ稅關  
 之ヲ所掌シ總噸數二十噸未満帆船ニアリテハ總噸數五噸未満ヲ除ク及積  
 石數二百石未満積石數五十石未満ヲ除クノ船舶ノ船籍及船税ニ就テハ財  
 務署之ヲ所掌スルコト、ナレリ而シテ韓國沿岸ヲ航行セル日本船舶及船  
 舶法ノ支配ヲ受ケサル日本船舶ノ事務ニ就テハ從來何等ノ法規ナク便宜  
 ノ取締ニ一任シアリタルモ今次當國船舶法規ノ制定セラル、ニ至リタル  
 ナ以テ統監府ニ於テモ前記船舶ヲ一定ノ規則ニ依リ取締ヲ爲スノ必要ヲ  
 認メ府令ヲ以テ船舶規則及船舶検査規則ヲ制定シ之カ検査事務ハ當國稅

## 二 海員

前述ノ如ク當國ニ於テハ航海業未タ開ケス從ツテ海員ニ關スル規則トシ  
 テ見ルヘキモノナシ唯開國四百九十五年明治十九年ヲ以テ公布セラレタ  
 ル雇用工人之章程アリ稅關ニテ之カ取扱ヲ爲シ來リタルモ該章程ノ適用  
 ハ主トシテ外國人ヲ船長トシテ雇用シタル場合ニ在リテ一般海員ニ關シ  
 テハ何等法規ノ存在スルモノナク又實際取締ノ機關ナカリシナリ而シテ  
 今次船舶法規統一セラル、ニ至リタルモ當國現今ノ狀況ニテハ特ニ海員  
 ニ關スル規定ヲ設クルノ時機ニ達セサルヲ以テ單ニ検査事務ノ一部トシ  
 テ稅關ニ於テ便宜之カ取締ヲ爲スコト、セリ然リト雖將來航海業ノ發達  
 ト共ニ海員ニ關スル各種ノ規定ノ必要ヲ見ルハ明カナリトス

因ニ隆熙元年明治四十年中海員養成ノ爲メ其規程ヲ設ケ釜山稅關ニ於テ  
 修技生ヲ募集シ汽船楊武號ヲ海員養成所ニ充テ專ラ韓國ノ子弟ヲ入所セ  
 シメ航海科及機關科卒業生十五名ヲ出シ成績良好ナリシモ一回ニシテ廢

### 三 水路嚮導

當國ニ於テハ水路嚮導ニ關シ從來何等ノ制度ナク光武十一年明治四十年  
中日本陸軍ノ經營セル鴨綠江航路標識ヲ當國政府ニ引受ケ管理スルニ至  
リ同時ニ鴨綠江ニ於ケル水路嚮導事務ノ引繼ヲ受ケタルニ依リ燈臺局所  
屬船鴨川丸綠川丸ノ二艘ヲ以テ好意上船舶ノ要招ニ應ジ之ヲ繼續シ來リ  
タル外群山港ニ於テ日本人ノ之ヲ私營セルアリ而シテ鴨綠江水路嚮導ノ  
事務ハ爾來龍岩浦燈臺局分署ヲシテ取扱ハシメ來リタルモ本年三月官制  
改正ノ結果稅關事務ニ移サレ爾後鎮南浦稅關ノ所掌スルトコロトナレリ

### 第二節 開港検査

開港検査事務ハ從來稅關ノ取扱ニ屬シ開國四百九十六年明治二十年七月  
列國使臣ノ承認ヲ經テ實施セル通商港傳染病侵入豫防假設規則ニ依リ  
之ヲ執行セリ即チ検査ハ傳染病アル地方ヨリ來ルカ又ハ航海中傳染病ヲ  
出シタル船舶ニ對シテ之ヲ執行スルコト、ナレリ而シテ有病地ノ認定ニ

關シテハ二様ノ方法アリ即チ一ハ當該國政府ノ爲シタル傳染地公認ノ事  
實ニ依リ決スルモノニシテ他ハ稅關長理事官及條約國領事トヲ以テ成立  
スル協議會ニ於テ多數意見ニ依リ決セラル、モノトス尤モ先年日本各地  
ニ「ペスト」病發生後ニ於テハ阪神地方ハ常ニ有病地ト認メラレ入港船舶ノ  
大部分ハ該規則ノ適用ヲ受クヘキモノトセラレタルニヨリ事實ニ於テハ  
常時検査ト多ク撰ムトコロナシ

検査事務ハ從來稅關ニ検査醫アリテ之ニ從事セシメタルモ隆熙二年明治  
四十一年以降ニ於テハ官制上ノ港務醫官又ハ港務醫官補ヲ置キタル稅關  
支署所在地ノ如キ小規模ノ開港ニ在リテハ尙ホ地方醫ニ囑託スルノ方針  
ヲ採リ以テ今日ニ至レリ又關釜聯絡船ニ對スル検査ハ福岡縣港務部ト協  
議ノ結果隆熙二年明治四十一年十二月以降該船乗組日本検査官ニ囑託シ  
進航中ニ之ヲ執行スルコト、セリ

次ニ検査所設備ニ關シテハ光武六年明治三十五年初メテ仁川港月尾島ニ  
建設セル患者收容所ノ外各港何等ノ設備ナカリシニ依リ政府ハ開港設備  
工事ノ一部トシテ仁川、釜山、元山、鎮南浦ノ四港ニ検査所ヲ建設スルコトニ

決定シ既ニ釜山及鎮南浦ニ於テハ其建築工事畧竣功ヲ告グルニ至レリ

附 關係日本人職員

政府財政顧問部創設以來當國財務ニ從事シタル日本人官吏中其重ナルモノヲ列舉スレハ左ノ如シ

日本人高等官竝同待遇者現在員調 明治四十三年八月十五日現在

就職年月	日本官名	韓國官名	氏名
明治三十九年一月	統監府書記官	釜山稅關長	山岡義五郎
同三十七年十月	統監府書記官	度支部稅務局長兼臨時	鈴木穆
同四十三年五月	陸軍工兵大佐	財源調查局長兼稅務局長	土屋喜之助
同四十一年五月	統監府書記官	土地調查局測量部長	佐々木藤太郎
同三十九年四月	大藏省臨時建築部技師兼大藏省技師	建築所技師	阪出鳴海
同年五月	統監府書記官	兼臨時財源調查局長	小林重
同年二月	統監府書記官	漢城財務監督局長	宮木又七
同四十年一月	統監府書記官	仁川稅關長	川上常郎
同四十二年九月	大藏省臨時建築部事務官	大邱財務監督局長	上林敬次郎
		兼臨時財源調查局長	

明治四十二年四月	同 四十年一月	同 三十八年八月	同 年同月	同 四十四年六月	同 四十四年十月	同 三十九年四月	同 年八月	同 三十七年十二月	同 三十九年二月	同 年十二月	同 四十四年三月	同 四十四年十月	同 三十八年七月	同 四十年一月
統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官
檢査官	航路標識管理所技師	度支部書記官	土地調查局書記官	臨時財源調查局技師	臨時財源調查局技師	臨時財源調查局技師	臨時財源調查局技師	臨時財源調查局技師	臨時財源調查局技師	臨時財源調查局技師	臨時財源調查局技師	臨時財源調查局技師	臨時財源調查局技師	臨時財源調查局技師
落合芳藏	矢野久三	島重治	藤川利三	佐竹義準	荒井寅治	塚本道遠	木下重松	久芳直介	有賀光豊	藤原正文	矢田下次	西川麻五	西尾守行	佐々木正太

同 四十年二月	同 年三月	同 三十九年十二月	同 四十年五月	同 四十二年六月	同 四十年五月	同 年同月	同 年同月	同 三十八年十二月	同 三十九年九月	同 四十年二月	同 四十四年六月	同 三十九年十一月	同 三十七年十月	同 三十八年六月
統監府書記官	海軍少佐	稅務監督局事務官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官
臨時財源調查局書記官	航路標識管理所技師	元山稅關監督局長	土地調查局技師	度支部書記官	度支部書記官	度支部書記官	度支部書記官	度支部書記官	度支部書記官	度支部書記官	度支部書記官	度支部書記官	度支部書記官	度支部書記官
赤倉吉三	三浦義深	堀野手	阿部惠三	河內山樂三	吉松憲一	櫻井小一	永井松次	國枝博	鹽屋智隆	和田一隆	內海英吉	陶山武二	平野與次	平野與次

明治三十八年六月	稅務監督局事務官	度支部事務官	不破重兼
同 三十九年三月	煙草專賣局事務官補	土地調查局技師	中田三郎
同 年八月	大藏	稅關事務官	小幡三郎
同 四十年九月	大藏	度支部事務官	梶島榮孝
同 四十年五月	稅務監督局書記官	兼土地調查局書記官	菅田勇
同 三十九年十二月	稅務監督局事務官	財務監督局事務官	吉田政治
同 四十年五月	稅關鑑定官	稅關鑑定官	市川豐治
同 四十二年五月	稅關鑑定官	土地調查局事務官	小野朔二
同 三十九年六月	大藏	財務監督局事務官	秦秀
同 四十年二月	大藏	稅關事務官	寺尾規矩
同 三十九年十一月	統監府技師	建築所技師	掛札季藏
同 三十八年九月	統監府技師	建築所技師	勝又六郎
同 年同月	統監府技師	建築所技師	遠藤善十郎
同 三十九年六月	理事廳副理事官	建築所事務官	八木親豐
同 四十年五月	稅務監督局事務官	財務監督局事務官	石川鈴輔

同 年八月	陸地測量師	度支部事務官	野坂直次
同 四十二年一月	陸地測量師	土地調查局技師	豐田四郎
同 三十八年十二月	統監府技師	建築所技師	石原錠太郎
同 三十九年七月	統監府技師	建築所技師	藤宮惟一
同 四十二年三月	理事廳副理事官	土地調查局事務官	近藤左右一
同 年五月	統監府書記官	航路標識管理所技師	三浦矩明
同 四十年九月	統監府書記官	全州財務監督局長	須藤素
同 年同月	統監府書記官	稅關事務官兼稅務局事務官	深尾道恕
同 三十九年八月	稅務監督局事務官	公州財務監督局長	矢鍋永三郎
同 四十年五月	遞信技師	度支部事務官	森山誠之
同 三十九年五月	農商務技師	臨時財源調查局技師	馬淵歸一
同 四十年七月	稅務監督局事務官	度支部事務官	渡邊歸一
同 四十年八月	稅務監督局事務官	稅關港務醫官	吉田格之進
同 四十二年九月	稅務監督局事務官	財務監督局事務官	壬生一夫
同 四十二年九月	稅務監督局事務官	財務監督局事務官	召田寅一良

明治三十八年十月	關稅局運轉士	鹽坂長喜
同 四十二年二月	建築所技師	村幸長
同 四十年九月	財務監督局事務官	水口隆三
同 三十九年十一月	印刷局事務官	高木正雄
同 四十年八月	稅關監督官兼稅關港務官	吉村直二
同 年十一月	度支部技師	太田黑宣三
同 三十九年五月	財務署財務官	山口豐正
同 四十年七月	土地調查局事務官	橋本金太郎
同 年九月	財務監督局事務官	佐々木保之
同 年同月	建築所技師	正田玄龜
同 年十二月	建築所事務官	佐久間省三
同 年十月	稅關事務官	米山喜源太
同 四十二年十月	財務監督局事務官	松崎俊造
同 四十年二月	財務署財務官	太田德太郎
同 三十九年六月	稅關事務官	黑部寅一

同 三十八年十二月	煙草專賣局技手	富家正義
同 三十九年五月	建築所技師	岩城信太郎
同 四十年五月	財務監督局事務官	米內金策
同 四十年十月	財務監督局事務官	小笠原寬
同 四十二年九月	土地調查局事務官	牧千葉萬壽
同 四十二年十二月	稅關技師	干葉萬壽
同 四十二年三月	土地調查局技師	高關八百千
同 四十年十月	稅關港務官	犬塚宣次郎
同 三十八年九月	財務署財務官	高久敏男
同 三十九年十月	煉瓦製造所事務官	與村英一
同 四十年五月	財務監督局事務官	今井孝潔
同 年同月	財務監督局事務官	酒井孝德
同 年八月	關稅局事務官	安部直介
同 三十九年四月	稅務監督局稅務屬 陸軍步兵中尉	藤本元次郎
同 三十八年十二月	兵庫縣農事試驗所技手	高崎親和

明治四十年八月	陸軍歩兵少尉	度支部技師	石井彌三郎
同四十年十一月	會計検査院屬	検査官	服部豐吉
同四十二年十月	大藏	財務署財務官	安原時太郎
同四十年八月		印刷局技師	橋本井
同三十九年八月		印刷局技師	池田活之祐
同四十二年六月	税關監督官	税關監督官兼税關港務官	釜澤益太郎
同四十二年十一月	税務監督局屬	財務署財務官	北村健吉
同四十二年四月		臨時財源調査局技師	島居嚴次郎
同四十二年十月	關東都督府屬	建築所技師	渡邊
同四十二年二月		財務署財務官	大和田眞治
同四十二年十一月		土地調査局技師	谷武松
同四十二年三月	税務監督局事務官	財務監督局事務官	高田官
同四十二年三月	税務監督官補	建築所技師	八島
同四十二年四月		財務署財務官	渡邊善道

同 年五月	税關事務官補	臨財源調査局技師	二宮常八
同三十八年十月	陸地測量師	財務署財務官	黑田達之
同四十二年十二月	税務署税務局屬	財務署財務官	梅津武雄
同三十九年五月	兼税務監督局税務局屬	財務署財務官	光市次郎
明治四十年七月	鹽務局	財務署財務官	佐野林太郎
同 年同月	税務署税務局	財務署財務官	曾根
同 年五月	税務監督局税務局	財務署財務官	草場信治
同四十二年三月	總監府技師	度支部事務官	伊東清七郎
同四十二年九月		印刷局技師	豐田多賀雄
同三十二年八月		印刷局技師	松崎米藏
同四十年六月	税務署税務局	印刷局事務囑託(勸待)	太田和太郎
同四十年九月		印刷局事務囑託(勸待)	中村藏治
同四十二年十月	海軍機關大尉	囑託光濟號機關長(同)	齋藤知三
同 年十二月			田口久盛
同四十二年十二月			作問芳夫

明治四十一年五月	東京府立第二中學校教諭	關稅局事務囑託(案待)	飯島榮太
同 四十一年一月		土地調查局事務囑託(同)	尾石剛毅
同 三十九年八月		土地調查局事務囑託(同)	鹽田與助
同 四十一年八月		度支部事務囑託(同)	遠山熙
同 四十三年五月	香川縣水產試驗場技師	土地調查局事務囑託(同)	河內圭司
同 年四月		臨時財政調查局事務囑託(同)	林田虎雄
同 年同月		大邱財務監督局事務囑託(同)	稻浦直治
同 同 年同月		蔘政局事務囑託(同)	武智正次
同 同 年同月			齊藤金祐

同退職者

退職職年	日本官名	韓國官名	氏名
明治三十七年十月	統監府財政監查長官	政府財政顧問	目賀田種太郎
同 四十一年六月	統監府參與官	關稅總長	永濱盛三
同 四十一年五月	大阪稅關長	仁川稅關長	曾我祐保

同 三十九年二月	航路標識管理所技師	燈臺局技師	竹田關太郎
同 三十八年八月	煙草專賣局技師	臨時財源調查局技師	岡田眞一
同 三十九年三月	稅務監督局事務官	關稅局鑑定官兼關稅局書記官	野村才二
同 三十八年六月		財務監督局事務官	伊藤恒藏
同 三十九年三月		稅關港務醫官	世古口健吉
同 三十九年七月		稅關港務醫官	森永定次郎
同 三十八年十一月		政府財政顧問	井上雅二
同 三十九年九月	統監府財政監查官	政府財政顧問	馬場鏤一
同 三十九年九月	稅關鑑定官	政府財政顧問	齊藤甲萬三
同 四十一年五月	統監府技師	度支部事務官	阿部秀太郎
同 四十三年四月		稅關技師	鬼部一太郎
同 四十一年六月		政府財政顧問	佐治修三
同 三十九年五月		政府財政顧問	東條世三
同 三十八年七月	稅務監督局事務官	財務官	神谷卓男
同 四十一年一月		財務官	松尾延之助

[illegible]

同死亡者

同四十一年九月	同四十一年十二月	同四十一年九月	同四十一年十二月
税	税	税	税
官	官	官	官
財務ニ關スル事務囑託	財務ニ關スル事務囑託	財務ニ關スル事務囑託	財務ニ關スル事務囑託
廣	廣	廣	廣
崎	崎	崎	崎
衛	衛	衛	衛

同治三十八年五月	稅務監督局事務官	財	山田周三
同四十八年八月	統監府技師	建築所技師	岩田五月滿
同四十八年五月	統監府技師	政府財政顧問技師	堤慶藏
同四十九年六月	稅務監督局事務官	財務官	神津質文
死職 亡年月	日本官名	韓國官名	氏名

韓國財政施設綱要

小官明治四十年十月現職ヲ奉シ當國財政ノ衝ニ當  
リテ爾來三年此間統監閣下指導ノ下ニ漸ク諸般ノ  
施設ヲ遂行スルヲ得タリ仍テ爰ニ明治三十七年帝  
國政府ノ韓國財政監督ニ着手以來其經過ノ綱要ヲ  
記シ閣下ニ報告ス幸ニ瀏覽ヲ賜ハラントヲ

明治四十三年八月十五日

度支部次官

統監府參與官 荒井賢太郎

統監子爵寺内正毅閣下

# 韓國財政施設綱要

## 目次

### 第一編

#### 第一章 財務概説

第一節 財政整理ノ沿革

第二節 財務機關

#### 第二章 歲計

第一節 歲入

第二節 歲出

第三節 歲出豫算費途區分

第四節 繼續費

第五節 各特別會計

目次

## 第六節 日本政府ヨリノ借入金

## 第七節 隆熙三年度明治四十二年歳入歳出現計

## 第三章 租税及諸收入

## 第一節 總論

## 第二節 租税

## 一、地稅

## 二、戶稅

## 三、家屋稅

## 四、酒稅及煙草稅

## 五、其他諸稅

## 六、徵收及其成績

## 七、地方費賦課金

## 第三節 諸收入

二八

二九

五三

五三

五九

五九

六六

六七

六八

七一

七六

八〇

八三

## 第四章 關稅

## 一、印紙收入

## 二、其他收入

## 第一節 條約

## 第二節 開港

## 第三節 關稅制度

## 第四節 關稅警察

## 第五節 關稅官廳

## 第六節 貿易統計

## 第七節 稅關收入

八九

八九

八九

九〇

九三

九六

九八

九八

## 第五章 紅蔘專賣

## 第一節 紅蔘專賣制度ノ經過

一〇〇

一〇〇

## 第二節 藝業ノ經營及施設

一、藝園ノ取締 一〇三

二、病害ノ研究 一〇四

三、人蔘耕作試驗 一〇五

四、人蔘耕作ノ獎勵 一〇六

## 第三節 紅蔘賣下成績

一〇七

## 第六章 驛屯土

一〇八

## 第一節 驛屯土ノ起源

一一

## 第二節 驛屯土ノ管理

一一

## 第三節 驛屯土小作料徴收ノ成績

一二

## 第四節 驛屯土ノ實測

一四

## 第七章 會計検査

一一

## 第一節 沿革

一二

## 第二節 事務成績

一三

## 一、概説

一四

## 二、書類検査

一四

## 三、實地検査

一四

## 第三節 會計検査ノ狀況

一六

## 一、歳入

一六

## 二、歳出

一七

## 三、物品

一八

## 四、歳入歳出外現金

一九

## 五、國有財産

二〇

## 六、地方費

二〇

## 第四節 検査ニ關スル諸表

二一

## 第二編

## 第一章 貨幣

二四

第一節 概況	一四一
第二節 舊貨幣ノ整理	一四一
一、舊白銅貨ノ引上	一四四
二、葉錢ノ還收	一四五
三、舊銀貨及舊銅貨	一四六
四、還收舊貨ノ處置	一四七

第三節 新硬貨	一四八
一、新貨ノ製造及發行	一四八
二、新貨ノ散布	一四八

第四節 銀行券	一四九
第五節 結論	一五〇

第二章 金庫	一五一
一、金庫設置	一五三
二、通信官署國庫金事務取扱委託	一五三
三、農工銀行等支金庫事務取扱	一五四

第三章 國債	一五六
第一節 國債種類及使途	一五六
第二節 公債金特別會計	一六〇

第四章 金融機關	一六二
第一節 緒說	一六二
第二節 漢城共同倉庫株式會社及手形組合	一六三
一、漢城共同倉庫株式會社	一六四
二、手形組合	一六五
一、天一銀行	一六六
二、漢城銀行	一六七
三、韓一銀行	一六七

第三節 普通銀行	一六六
----------	-----

第四節	農工銀行	一六八
第五節	地方金融組合	一七一
第六節	韓國銀行	一七二
第七節	日本側銀行	一七五
第五章	外國貿易	一七九

## 第三編

## 第一章 財産整理

一八九

第一節	帝室有不動産ノ整理	一八九
第二節	帝室債務整理	一九六
第二章	土地調査	二〇一

## 第一節 沿革

二〇一

一、	土地調査ノ必要	二〇一
二、	測量技術者ノ養成	二〇三
三、	測量ノ實地練習	二〇四
四、	測量技術教科書出版	二〇五
五、	測量規程制定	二〇六
六、	土地調査試行	二〇七
七、	舊價調査	二〇七
第二節	事業ノ開始	二〇八

一、	土地調査ノ計畫及豫算	二〇八
二、	土地調査ノ方法	二〇九

## 第三章 財源調査

## 第一節 鹽業

## 一、調査

## 二、試験

## 三、天日製鹽田ノ築造

## 第二節 酒類

## 一、調査

## 二、釀造試験所ノ設置

## 三、試験

## 第三節 煙草

## 一、調査

## 二、耕作ノ指導

## 三、試作

## 第四編

## 第一章 建設工事

## 第一節 工事機關

## 第二節 工事實施

## 一、創始時代工事概況

## 二、隆熙二年(明治四十一年)以後工事概況

## 三、施行方法

## 四、建築工事一覽表

## 第三節 煉瓦製造事業

## 一、沿革

## 二、組織

## 三、作業

## 四、收支計算

## 第二章 開港場設備

第一節 港灣改良ノ目的	二五七
第二節 税關設備工事計畫	二五八

一、仁川税關工事	二五八
----------	-----

二、釜山税關工事 附釜山監平工事	二五九
------------------	-----

三、元山税關工事	二六〇
----------	-----

四、俄南浦税關工事	二六四
-----------	-----

五、其他ノ税關設備工事	二六四
-------------	-----

六、各税關設備工事費豫算年度別一覽表	二六八
--------------------	-----

第三章 印刷事業	二七〇
----------	-----

第一節 沿革	二七〇
--------	-----

第二節 擴張計畫	二七〇
----------	-----

一、技術ノ種類及生産能力	二七三
--------------	-----

二、工事經過	二七四
--------	-----

第三節 工場配置	二七五
----------	-----

第四節 事業概要	二七六
----------	-----

第五節 技術ノ整備	二七七
-----------	-----

第四章 航路標識	二八〇
----------	-----

第五章 海事及開港檢疫	二八七
-------------	-----

第一節 海事	二八七
--------	-----

一、船舶	二八七
------	-----

二、海員	二八九
------	-----

三、水路嚮導	二九〇
--------	-----

第二節 開港檢疫	二九〇
----------	-----

附 關係日本人職員	二九三
-----------	-----

財務機關  
金融機關  
稅關及燈臺

配置一覽圖